
この手のひらで消える雪のように（彼の娘：続編）

大島 有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「この手のひらで消える雪のよつに」（彼の娘・続編）

【Zコード】

Z4512V

【作者名】

大島 有

【あらすじ】

「美しいことは儂い」ということ

? 彼が口にした言葉。そして、僕の心の中にずっと生き続けている
彼女、扶美との思い出の言葉。 ?

突然の事故で亡くなつた扶美の面影をずっと胸に、人を好きになる
ことを避け続けていた隆博の前に現れたのは、同じ大学の2歳上の
先輩、悟。

隆博への思いを押し殺したまま学生結婚をした悟と、扶美への思い

を引きずつたまま里佳子と付き合い続ける隆博。

そんな状況の中、戸惑いながらも悟の思いを受け入れる隆博。しかし交わる時は短く、その雪のよつこ一瞬にして消えていく。

リズムに心を委ねる。五感のすべてをその音に委ねる。心が解き放たれる心地よい空間に誘われるこの感覚。誰にも邪魔されることのない自由な空間。時間も忘れ身体の感覚もなくなってしまうような忘我の極地。

そこは自分だけの楽園だ。その音にすべてを委ねる。

リズムに乗つてキイを叩く。子供のような彼。笑うとくしゃくしやになる田元。音に身をまかせ、そのリズムと振動に心も魂も自由に泳がせて、その一瞬、一瞬を楽しんでいる彼を、今この時、僕の目に映る彼の姿を記憶しておこうと思った。もう2度と戻らない時間。全神経を集中させて、彼の姿を心の奥深くに記憶する。

それしか出来ない。でも、それでいい。

あれはサークルの日帰りの旅行だ。

日本海の沿岸のちいさな漁村を訪れた。目的は昼食においしい海鮮物を食べることだった。案内された小さな料理民宿。海水浴場の近くにあって、夏は大勢の海水浴客でにぎわう民宿だが、まだ海水浴シーズンには程遠い。訪れる人はまばらだ。

僕たちは案内された広間で向かい合わせに座り、食事を始めた。ビールや焼酎などのアルコールも出て、飲める人たちはそれなりに楽しんでいたが、僕は一滴も飲めない下戸だった。

窓の外からは海が見えた。食事もそこそこにして、早く海を見に行きたかった。新鮮な海の幸は確かにおいしかったが、生物を食べ続けたせいか胃の辺りがむかむかしてきた。それとも、先程まで揺られていたバスのせいだろうか。

（早く海が見たい。海岸沿いを散歩したら気分が良くなるんじゃないだろうか。）

そんなことを考えていると、

「熱いうちにお召し上がり下さいね。」

宿のおかみさんが僕の前に茶碗蒸しを置いた。それを合図のよう
に僕は立ち上がった。そして、広間を横切り、玄関にならんでいる
宿の下駄をつつかけて外に出た。

部屋の中のむつとした熱氣に包まれていた僕には外の風が心地良
かつた。宿の隣には民家や民宿などの建物が密集していて、車がや
つと1台通れるかどうかわからないほどの細い路地が連なっている。
海の方からはふうんと潮の香りがした。僕はその路地を海の方へ歩
いていった。宿からほんの2、3分程歩くと海水浴場がある。僕は
コンクリを積んで出来た防波堤を歩いた。目の前には日本海が広が
り、ほんの目の先には景勝地として名高い神島が見えた。

いい眺めだなあと思った。山国で育った僕には海は珍しく、海を
見ると胸がわくわくした。大人になつた今でもだ。波が荒々しいイ
メージがある日本海だが、ここは内陸部に近いせいか波が穏やかだ。
僕は防波堤のコンクリの上に座り、寄せては返す波の動きをぼんや
り眺めていた。無心になつて波が作り出す泡を見ているとだんだん
気分がすつきりしてきた。でも本当はそんなに気分が悪いわけでは
なかつた。

僕は待つていた。ぼんやりと、いや、はつきりと。

彼が来るのを。

席を立つた僕が、数分立つても戻つて来ないことに気づいて。気
分が悪く、外へ出かけたのだろうと、そう思つて。もしくは、皆の
食事が終わりもうそろそろ出発だと呼びに來るのではないかと。

でも、彼は来なかつた。時計を見ると下駄を突っかけて出てから、
15分ほど経つていた。時間的にはとうに食事が終わり、次の目的
地に出かける準備をしなければならないような時間になつていた。
何故、彼が来ると思つたのだろう。来るはずがない。

自分のばかな考えに苦笑しながら腰をあげた。

さて、気分も良くなつたし、そろそろ戻らないと本当に置いてか

れそうだ。

路地を上がり、一つ田の角を曲がった所でいきなり彼に出くわした。

彼はこちらには田もくれず、僕に気がつかないふりをして、「ああ、やっぱり外は寒いなあ。」

聞こえるような大きな声でつぶやいた。

（なんだ。気づいているんじゃない。）

そして僕の前を横切り、海岸線の方へじんじん歩いていった。

（僕を迎えに来てくれたんだろ？ それともただ単に風にあたりにきただけ？）

僕はちょっと迷った。もし、僕を迎えに来てくれたのじゃないなら追いかけていくのも変だし、さてどうしようかと一瞬躊躇したが、結局は早足で彼に追いつくことにした。

「先輩はそんな薄着してさ、風邪引いてるくせに。」

彼の背中に向かって少し大きな声を出して悪態をついた。昨日会った時、鼻をぐずぐずさせていたことを思い出したからだ。風邪を引いているくせに薄い長袖のシャツを一枚着ているだけだ。

「ちゃんと着ているさ。こんな風邪のうちに入らんよ。」

後ろを振り向きもせず彼が言い返した。

僕は彼に追いつき、並んで歩いた。迎えに来てくれたのがどうか、聞こうと思ったが結局口をつぐんだ。

その瞬間、僕たちの真上を鳥が飛んでいった。沖の方へ飛んでいく鳥を指差して

「あれ、かもめ？ ワシかな？」

「さあな。」

ぶつきらぼうて答えた彼の薄い唇に田がいった。

？美しいといつことは、儂といつことだ。？

又あの時のことを思い出した。あれから何度も彼の言葉を思い出

す。

「ワークショップでの出来事。ある小説の原文をそれぞれが思い思いに訳したものを見、皆の前で発表しあった時の事だ。

小説のあらすじはこうだ。

薄幸の少女。病に侵され残り少ない命。彼女の元を度々訪れる青年。ふたりして窓の外を眺めていると、ふいに雪が降り始めた。綺麗だと、喜び勇んで外へ駆け出す少女。その手に雪を取ると、一瞬にして溶けて消える。手に消えた雪を惜しそうに眺め、小さく息を吐く少女。辺りの空気が小さく小刻みに振動し、彼女の杞憂が彼の胸にも痛いほど伝わってきた。程なく消えゆくであろう自分の命の灯と、掌に溶けた雪の儂さが同じものだと感じたであろう彼女の心境を思い、青年の胸によぎつた思いの一節をそれぞれが訳した。？いくら美しいものでも、形あるものはすべて消える。？

？どんなに美しくても、形あるものはその形を変えていき、いつまでも同じ姿を留めておくことは出来ない。？

といつた訳が多かった。

その中で彼だけが、

？美しいということは、儂いということだ。？

そう訳した。簡潔にして心に響くフレーズ。

原文から離れすぎているという意見が出た。

確かに。訳手の意見や感情が入りすぎるのは良くない。いかに書き手の心を、その物語の意図とすることを率直に、解りやすく、そして真実を読み手に伝えるか。

だけど僕は彼の訳したそのフレーズに心を惹かれた。それは、僕にとって特別な忘れぬ言葉だったからだ。そして何故かその彼の薄い唇や、彫りの深い横顔が記憶から離れず、何度も頭の中をよぎった。

「何だ。」

横顔に視線を感じたのか彼が尋ねた。

「いや、別に。」

視線を逸らし、僕は空と海を交互に眺めた。薄いブルーとグレーが入り混じったような空。沖を渡る風。風に乗ってときおり鼻をくすぐる潮の香り。眼前に見える岩を連ねた見事な景勝地。海岸線を縁取る松の木立。時間にしてわずか数分の出来事だったが、時が止まつたような感じがした。もう少しこうやって海を見てみたい。そう思つていると、おもむろに彼がくるりと方向転換をし、

「これ以上行つてもなんもない。戻るぞ。」

早足でどんどん宿の方へ歩き出した。僕も慌てて彼の後を追いかけた。

それから僕たちはマイクロバスに乗り込み次の目的地に向かった。僕はバスに揺られながらぼんやり一週間前のことと思い出していた。一週間前の夜、僕たちの学部内で飲み会があった。駅前の繁華街の一軒の居酒屋。僕たちの学部で飲み会をする時はいつもそこだつた。全国的に店舗を持つチエーン店。店内は僕たちのような学生のグループでいつも一杯だつた。僕は用事があつて少し遅れて店に入った。すると、奥の座敷のにぎやかな15、6人のグループから

「隆博、こっちだ！」

裕樹が顔を出した。

「ごめん。遅くなつた。」

「いや、いま始まつたばかりだ。」

「で、今日は何の集まりだ？」

裕樹の隣に腰を下ろしながら聞いてみた。

「あほか、お前は。そんなことも知らんと来たんか？」

「いや、ごめん。しつかり聞いてなかつた。場所と時間だけチェックした。」

「相変わらず、マイペースだなあ。」

裕樹は呆れ顔で、肩をすくめた。

マイペースとは自分のことを形容する名詞として、僕の友人たちがよく使う言葉だ。

確かに自分でもマイペースだと思う。だけど、こういう人が集まる場所が苦手ではないし、来たら来たでそれなりに楽しむし、人とも会話する。自分は下戸で1滴も飲めないが、飲み会は嫌いじゃないし、この雰囲気は好きだ。もちろん酔っ払いともペースをあわせて盛り上がる。でも、自分の時間が一番大事だ。ずっと人と一緒だと疲れる。周りからは人当たりが良いと言われるが、それは自分の時

間があつて、人と一緒に時間との区別をきちんととしているからだろう。その時間内では人に不愉快な思いをさせないよう、場を和ませようとするところがあるみたいだ。さしあたってどうでもよいことはあまりしつかり把握していないことが時々あるみたいで、今日の飲み会の趣旨も、幹事の健一から送られたメールからわざと時間と場所だけ見て飛んできたのだ。

店員が飲み物の注文を聞きに来た。

「ウーロン茶ちょうどいい。」

店員が注文を取り下がつていいくと、隣の裕樹に耳打ちをした。

「で、今日はなんの催し?」

「お前知ってるだろ? 4年の水木先輩?」

「ああ。」

「できちやつた結婚なんだつて!」

「えつ?」

僕は聞き返した。

4年の水木悟先輩。僕の学部は翻訳家や通訳を目指す学生の多い外国语大の英文学科だ。そうでなければ外資系の会社に就職する学生が多い。水木先輩は僕と同じ学部で、学部内の翻訳家をめざす学生で作るワークショップに籍を置いている先輩だ。そのワークショップでは何度か会っているが、女関係の噂など聞いたことがなかつた。というか、僕があまり親しくしゃべつたことがなかつただけで、裕樹の話によるとかなりもてる人らしい。ガールフレンドも何人かいたらしいけど、どうもそのうちのひとりが妊娠したらしい。それで、卒業前だけ年内に籍をいれることになつて、今日は内々でのお祝いらしい。

「へえ、そなんだ。」

「で、当の本人さんは?」

「あれ、あの前の方に居るだろ? お前もお酌してこよ。」

「ああ、そうだな。」

前方をみると水木先輩はだいぶ飲まれたみたいだ。顔を少し赤くして、数人に仲間に囲まれている。彼は身長がかなり高く、学生時代はずっとラクビーの選手だったらしい。細くて、顔立ちも彫が深く、女の子には確かにモテそうだ。僕もあまり親しくしているわけではないのでその人となりはよくわからないが、男氣があつて頼まれると嫌と言えないところがあつて、後輩の面倒見などはかなりいいみたいだ。声が低くて特徴があり、女性のような細い指をしている。口が悪いことで有名だが、その手先を見ると神経質な所もあるのだろう。

僕は近くにあつたビール瓶に中身が入つていてことを確認して、

それを持ち、先輩の席へ向かつた。

「どうぞ。ビールでいいですか？」

ビール瓶を傾けると、

「おお、隆博か。」

「だいぶ飲まれたみたいですね。」

「うん。今日はかなりいい気分で酔っ払つたみたいだ。」

「・・・あの、おめでたいことだそうですね。僕何も知らなくて・・・」

そう遠慮がちに聞いてみた。すると先輩もちょっと罰の悪そうな顔をして、

「・・・ああ、まあ、なんてやうかな。俺も予想外のことだなあ。ちよつと、気持ちの整理が・・・」

所在無げに頭に搔ぐ。

「でも、おめでとうございます。」

そう言つと、先輩はふつと鼻から大きな息を吐いて

「ま、俺も年貢の納め時だな。それにしても22歳にして、後の人間はかみさんと子供を食べさせていくだけで、俺の人生は終わつたも同然だな。」

「そんなこといつて。おめでたいことなのに。」

「そりが、でも隆博らがうらやましいよ。まだ20歳だろ。これ

からもつといろんな経験が出来るだろ。遊びでも勉強でも。それに女のことにでもな。でも、俺はもう決まってしまった。一生懸命働いて子供とかみさんと家庭を作る。それはそれでいいんだが。まだ俺22だし、もっとこれからいろいろな選択肢があつたのかなあと思うと、なんだか他の連中らが自由で縛られるものがなくて、いいなあなんて思う時がある。」

先輩は言いながら、ひつむいて目の前の突き出しの小鉢を箸でもてあそんでいる。

何だかそんなしぐさが子供っぽい。でも、無理もないか。先輩といつても2こしか違わないし、仮に僕が2年後に結婚して家族を持つて養つていかないといけないなんてことになつたら、考えただけでじたばたしちゃいそうだ。結婚なんて全く実感わかない。その責任に押しつぶされそうだ。

僕は話を変えてみた。

「先輩は就職先決まつてるんですか？」

「うん、東京のT株式会社。」

「あ、そこ外資系の。超倍率高いとこじゃないですか。なかなか内定もらえないですよね。すごいじゃないですか？」

「うん、まあそれはありがたいんだけど。」

「お前は？」

「僕は翻訳をやりたいんです。まだしっかり決めてるわけじゃないけど。どつかの出版社にもぐりこんで、商業紙の翻訳でもやれたらいいなあって。」

「そうか。お前文才あるもんな。」

「文才ですか？」

人から文才があるなんて初めて言われた。

「いつもやのワークショップでの課題でそう思つたのがあつた。」

「えつ？ いつのでしたっけ？」

「珊瑚礁の白化現象について」

「ああ、あれは環境保護についてがテーマでしたよね。」

「文章がうまく書けるつてことは、まず、読解力があるつてことなんだろうなって思うんだ。翻訳は原文の読解力が一番の基礎だけど、それだけじゃない。その原文をどこまで読み込めて、どこまで原作者の意思に沿うように表現できるか。大事なのは表現力だ。でも、でしゃばってはいけない。自分の言葉で表現すればいいわけじゃない。原作者の心を読むんだ。それに沿つてなおかつ自分のオリジナルティの翻訳が出来るかだ。その原書の言語を理解してればいいってことじやないと思うんだ。なんかうまく言えんが・・・。だいぶ飲んだんでね。頭がまわってないんだ。」

でも、先輩の言つことはわかつた。やはりこの人は頭のいい人だ。頭の回転が速いっていうのかな。人の言つことをすばやく理解して、無駄なく簡潔にそして、自分の言葉をうまく操る。先輩は早口でもあるし、しゃべりのテンポも速い。頭の悪い人としゃべってるときつといらうするだろうな。

それについても、先輩が僕の文章を読んでいたとは初耳だった。ちょっと、うれしかった。先輩は見目も良く、後輩の面倒見もいいので、後輩連中の中ではちょっとした有名人だ。男から見てもかつこいい男つて言つのかな。変な言い方だが憧れてるやつらもいるんじやないかな。

そうすると、先輩は眠たそうに目をしょぼしょぼさせて、
「隆博。ちょっとウーロン茶、頼んでくれ。」

酔い覚ましかな。

店員を呼びに立ち上がったのと同時に、入れ替わりに他のやつらが酌をしに来た。それでそのまま自分の席に戻る。自分の席に戻ると、裕樹と健一が陣取つてすでに、かなりべろべろに酔つていた。

「だいぶ飲んだな。」

「おう、隆博。水木先輩どうよ？」

「うへん。結婚つて人生の墓場つていうの、ほんとかな？」

「後悔してるんかな。」

「まあ、22歳で人生決まつてしまつとなあ。」

健一が口を開いた。

「だつて、俺だったら、まんだ遊びたいもん。いろんな子とやりたいしな。」

と、にやにやした。

「俺も、俺も！」

と、裕樹が続く。

「やつぱりそれかよ。」

「なんだよ、隆博は。てめえだつて似たようなもんだろ。」

「俺、おまんらみみたいに盛んじゃねえしよ。」

「何言つてんだよ。」

健一が酒くさい息を吹きかけて肩に腕を回してきた。

健一はちょっと小太りで、見目がいいわけではないんだが、結構女の子にもてる。その秘密はかなりのまめ男で押しが強い。明るい喋りがうまいし、ユーモアもある。コンパなんかに行くとかなりの確率で「お持ち帰り」ができる。電話もメールもまめだし、もち

ろん誕生日や記念日も忘れない。僕は時々感心してしまつ。

「で、今日はどうすんの？」

聞き返すと、

「まあ、4丁目だな。この後は。」

「最近熱心だな。」

返すと

「まあな。」

酔つ払つて田の据わつた顔で健一が意味ありげに笑つた。

「4丁目」というのは最近健一が気に入つて、足しげく通う北欧クラブのことを指す暗号だ。なんでもスカンジナビアから来ている子に執心らしい。僕もよく誘われるけど外人の女の子には興味ない。健一も最近彼女と別れたばかりで寂しいらしい。もてるわりには長続きしないらしいがヤツのことだ。ま、あれこれと話はあるらしい。いろんな話をしていると、あつという間に時間が経つてお開きの時間が近づいてきた。

「そろそろお開きだ。」

もうひとりの幹事が会費を集めに来た。千円札を5枚財布から出していると、その幹事の先輩が僕に

「隆博。お前な、悟送つてくれんか？」

と、もちかけた。

「え、水木先輩を？」

「うん。俺んら飲んでるしなあ。悟、かなり酔つててなあ。電車じや危ないし。」

「隆博、お前飲んでないだろ？」

「はい。」

僕は車で来ていた、この居酒屋の地下の駐車場に止めてあつたし、送つしていくのは構わないけど。と、水木先輩の方へ目を向けると大声でなんだかわめいている。かなり泥酔状態みたい。やばいな。

「じゃあ、頼むぞ。」

はあ、とうなづくと、健一と裕樹の顔をのぞいた。

「お前んらも一緒に送つてくれ。」

「あー。俺んらはあかん。」「4丁目」「行くんだ。」

「そんなこと言わんと、先輩と一緒に送つていこうぜ。」

「水木先輩はお前にまかした。」

「ええつー。」

「ちょっとブルーだつた。あの泥酔状態をひとりで送つてくれる? 大丈夫かな?」

健一も裕樹もふたりしてさつさと会費を払い、カウンターの所でタクシーなんか頼んでる。

仕方なしに水木先輩の側に行つて

「僕、送つてきます。」

声をかけると

「うん、すまんな。」

とは答えたが後が続かない。戸惑つて、周りの先輩らに目を向けると、

「とりあえず、お前の車まで乗せるわ。」

そう言つて3、4人で先輩を抱き出した。

先輩がこんなに酔つ払つた姿なんて初めて見た。何度も飲み会に同席することはあつたけど、確かにこんなに飲む人ではなかつたようだ。

「寝てしまつて。大丈夫だから、悪いな。」

ひとりの先輩が僕に目配せした。

まったく正体なく酔つた彼に、皆で靴をはかせ、上着を着せ、4人がかりでエレベーターに乗せ駐車場に運んだ。その間、彼はなんだかんだと意味不明なことをしゃべつていた。もちろん解読不能だ。健一と裕樹はいつの間にかタクシーに乗り込み、夜の街へ消えていった。

(ちえつ、薄情なやつらめ)

心の中で舌打ちをした。

何とか僕の車の助手席に先輩を乗せ、運転席に座りエンジンをか

けると、

「隆博。悟の家わかるか？」

聞かれたので、だいたいはわかるけど行つたことがないので、誰か同行して欲しいような事を言つたのだが、他の先輩は皆、別方向だつた。それでしかたなしにひとりで彼を送つていくことになった。その間中、隣の先輩は意味不明なことを叫んでいた。

車を走らせると嘘のように彼は静かになり、すーすーと寝息を立て始めた。僕は内心ほつとした。運転中に暴れ出したり吐いたりしたらどうしようかと思ったが。こんな時飲めん人間は損だなあと思う。うちは親父もお袋も、それから兄貴もざるのよう強いのに、僕だけだ。飲めないのは。妹はまだ未成年だからわからない。アルコールを分解する能力がないらしい。飲める家系で家に酒がないわけがなかつた。ので、兄貴と一緒に未成年のうちからこつそり家で飲んだりしたことはあるが、ひとくちふたくちで顔が真っ赤になり、鼓動が早くなり頭がズきズき痛み出した。ビール、焼酎、ワイン、カクテル、日本酒。いろんな酒類を試したが、結果はどれも同じ。なんでお前だけアルコール分解しないんだろうなあと、兄貴は首をかしげた。その経験から自分は酒が飲めないと重々理解していたから、もちろん、入学したての歓迎コンパの時も辞退した。が、新入生の立場上、そもそもいかなくて、先輩らに無理やり飲まされた。その翌日の苦しかつたこと。病院に行つたら「急性アルコール中毒」ですね、なんて言われブドウ糖の点滴を受けた。2、3日は体の調子がさっぱりしづ、やはり酒は飲むべきでないと硬く心に誓つたことがあつた。ただ酒が飲めないと、こういつた酔っ払いの送り迎えをさせられたり、飲んでることに乗じての悪ふざけも出来ないし、幹事にさせられて人の面倒を見る事になるとか、デメリットも結構ある。

が、まあいいか。

先輩の寝顔を見ながら心の中でつぶやいた。

口が悪く、きついっていう印象が僕の中で強かつたので、こんな無防備な顔で寝息をたてる先輩を見ているのが不思議な感じだ。

車を走らせる。駅前の繁華街を抜けて郊外へ15分程走らせると、僕のアパートに着く。それを通り越して、隣町の先輩のアパートへ向かう。ふだんは車を使わず、電車やバスなどの交通機関で移動するので、アパートは駅の沿線上に探した。その分家賃は高くなるし、ひどく狭いけど。でも、ひとりだから別に不便はない。だいたい寝に帰るくらいだし。

信号待ちで止まる。先輩の顔を覗き込んでみるが起きる気配はない。大丈夫かな。熟睡している。青になつたのに気づかず、後ろからクラクションを鳴らされた。慌ててアクセルを踏む。そういえば、こうやってこの人と2人きりになつたのって初めてだ。

僕が今のワークショップに参加したのは入学してすぐくらい。その時初めて先輩に会つた。僕らのワークショップは会員が20人ほどだが、だいたいいつも参加するのは12、3人。メンバーは大体決まっている。月に2度。大学の講義室で集まつて、その時決めたテーマに沿つて、自分の興味ある翻訳物を探し翻訳する。それをメンバーに読んでもらつて講評を受ける。そんな活動が主だ。先輩を最初に見た時の印象がとても強く、背がひょろつと高く、声が低く特徴があつた。それと、初対面の時のワークショップで、先輩が自分の受け持つたメンバーの作品に講評をたれた時の口の悪かつたこと。歯に衣をきせぬとはまさにこのこと。ずばずば自分の思ったことを言い、相手を批判する。もちろん批判だけでなく評価もするが、もうちよつとオブリートに包んだ言い方がないのかとびっくりした。僕の作品があの人に当たつたらきっとぼろくそこに言われるんだろうな、とびくびくした覚えがある。しかし、不思議に人から嫌われるわけではなく、後輩からは慕われるタイプだ。ま、言つてることは的を得てるし、反面、人の面倒見が良く、ときおり子供みたいに無邪気に笑つたり騒いだりするところが心安いのだろう。

ハンドルを握りながらそんなことを思い返していると、彼のアパートの近くの四つ辻まで来た。赤信号で車を止めた隙に、隣の先輩の肩を掴んで起す。

「もうすぐ着きますよ。」
「……ん~。誰だ。」
眠たそうな声が返つてくる。
「堀江です。」
「……隆博か。」
「そうですよ。」
「……悪いな。送つてくれたんか?」
「もう、着きますよ。」
起きるのかと思つたら、またすぐ寝息が聞こえ始めた。
まあいい、まず田舎地まで走ろう。

「先輩。」
アパートの駐車場の脇に車を止めて、体を揺さぶつてみた。彼は“うん、うん”と生返事を返した田を見ましてはいるみたいだが、半分はまだ夢の中だ。

困つたなあ。

これじゃあ部屋まで担いでいくしかないかと思い、
「部屋の鍵は?」
と聞くと、
「……うん、乃理子がいる。」
また眠そうな声をあげた。
(乃理子?・・ああ、奥さんか、もう一緒に住んでるのかな?)
「部屋まで送つてきますよ。ほら、シートベルトはずして・・・」
酔つている彼に手を貸すために、座席のシートベルトをはずそうとして彼に覆いかぶさるような形で運転席から手を伸ばした時だ。半分眠つていると思っていた彼が、はつきり起きているかのような早い動きで、いきなり僕の右腕をつかんだ。そして、反対の手を背

中に回されるとあつ、と思う間もなく僕は彼に抱きしめられた。

(何?)

思ったのもつかの間、次の瞬間には彼の唇が僕の口をふさいだ。

何が起きたのかよくわからず、僕はめまいのよつたな感触を覚えた。だけど、むつとするタバコと酒の匂いが現実を認識させる。

(キス?)

キスしている。彼が僕に。

反射的に彼の胸に手をついて体を起そうとすると、反対に物凄い力で抱きしめられ、体の自由を奪われる。それに抵抗しようと大きな声をあげた。

「先輩・・・」

一瞬、目が合った。彼は酔っ払っているんだろうか。

僕が見た先輩の目はしらふの時と同じに見えた。とても静かに何か思いつめたような、酔っているとは思えなかつた。

(僕だとわかつているんだろうか?)

僕は混乱する頭で必死に冷静になろうと取り繕つた。

「先輩。まだ部屋まで着いていませんよ。乃理子さんと間違えないでくださいよ。」

僕の声は少し震えていたかもしない。彼はきっと、奥さんと僕をまちがえてキスしたに違いない

そうでないと、・・・困る。

先輩は僕の目をじっと見たが、次の瞬間、まつたく正常さを取り戻したように、

「ああ、ひどく飲んだな。まだ頭ががんがんするよ。」
笑つて自分でシートベルトをはずしにかかった。

僕が車を降りて助手席に回った時、外に人影が見えた。よく見ると若い女性が近づいてきて、

「あの・・・

声をかけられた。

助手席から降りた先輩が彼女に気づいて、

「乃理子。」

(ああ、この人が)

「今、車の音がしたので、送つてきて頂いたのかと思い下へ降りて
来てみたの。」

「ああ、かなり飲んでな。隆博に送つてきてもうつたんだ。」

僕の方へ目をくれた。が、まだ足元がふらふらしている。僕は慌
てて、彼の脇へ手を回して身体を支えた。

「どうも、すみませんでした。ご迷惑をおかけしてしまって。」

彼女が頭を下げた。

暗いので、よくわからなかつたが、水銀灯の下で見た彼女は先輩
よりも大人びて見えた。年上なんだろうか・・・?

それよりも今の・・見られたんじゃ?

僕は努めて冷静に

「いえ、同じ方向ですか。」

「こいつは同じ学部の後輩で・・・」

先輩がそれつの回らない口で僕を紹介しようとしたので、堀江で
す、と自分で自己紹介した。

「木島乃理子です。もうすぐ水木になりますが・・・

(ああ、やっぱりそうか)

「おめでとうござります。今日はそのお祝い会だったので、乃理子
さんも」一緒に良かつたのに。」

そう、声をかけると

「ええ、ご招待を頂いたのですが、悟さんが嫌がるので・・・」

(門外不出か。そんな感じだな、先輩つて。)

そんな話をしていくうちにも先輩の足取りがふらふらして、支え
ている肩がずつしり重くなつてきたので、まず、部屋まで送り届け
ることにした。

部屋まで送り届けると、彼女は本当にすまなそうに頭を下げて「ありがとうございました。迷惑かけてすみません。」何度も繰り返した。

「気にならないで下さい。それより、先輩だいぶ飲んでますから早く介抱してやってください。」

そう言って、？休んでいて下さい？といつ彼女の誘いを丁重に断つて車に乗り込んだ。彼女は駐車場の脇に止めてある僕の車の所まで来て見送ってくれた。

僕はひとりになつてアクセルを踏み込むと、安心し、どつと疲れが出た。めまいのような感覚を覚えた。先ほどまで彼女の前では冷静さを装つていたが、内心どきどきだつた。

彼女があれを見ていたのか。先輩は酔つて、あんなことを？

でも、あの後僕を見つめた目は確かにしらふだつた。僕を見た彼の目を思い出した。何を思つて？ただの悪ふざけだったらしいんだけど。悪ふざけにしては過ぎる。舌までいれなくとも。ディープキスだ。男と女がするような。彼はそういう趣味があるのかな？言われるまでもなく、僕はノンケだ。男とキスしたのなんて初めてだ。あれこれ考えてみたが、ひとつ不思議なことに気づいた。彼はどうしてあんなことをしたんだろうと、あれこれ考えを巡らせることはどうしても、それに対して怒るでもなく、嫌悪感を持つわけでもなく、ただ客観的にその事実を見ている自分がいた。

何だろう？この感覚は？本当だつたら嫌悪感を感じても不思議ではない事なのに。

ふいにあのワークショップでの彼の言葉を思い出した。

？美しいということは、嫌いということ。？

そしてその言葉を口にしている彼の薄い唇。

心臓が引っ掴まれた。頬が赤くなる。あの唇で僕にキスを？

初めてキスをした中学生の頃のことを思い出した。こんなに胸が

波打つて いるのは、あの時と同じ?
いや、何馬鹿なことを考えている?

ふいに頭の中を扶美の姿がよぎった。肩まで伸ばしたストレートヘア。いつも控えめで、大人しく、透き通る声で静かに話した。

「綺麗ね。」

薄い透き通るような花びらを手に乗せて、僕の方を振り返った。

校庭の桜の木。満開の花の下。風に乗って散る花びらを名残惜しそうに拾い集め、扶美はそう言った。

ずっと好きだった。ずっと一緒にいたかった。

たぶん僕はあれから恋をしていない。恋をするときめきてどんな感じだったのか、もう遙か遠い昔のことのようでもいま思ひ出しことも出来ない。

そう、扶美のことが好きだった。いや、たぶん今でも。

僕はさつきのキスを忘れようとした。あの唇を扶美の柔らかな唇とすり替えようとした。そう想しながらハンドルを握る。うまく出来ない。

車の時計を見るともう夜中の2時を過ぎている。眠らない生き物のようだ、24時間のコンビニの明かりが無遠慮に煌々と行過ぎる車を照らす。気づくと、さつき彼に掴まれた腕が、今になつてずきずき疼くよに痛み出した。

1週間後。

学内の廊下でばったり水木先輩に会った。先輩は僕を見かけると軽く手を上げ、

「隆博！」

大きな声で僕を呼んだ。

「この間は悪かつたな。まったくあんなに飲んだのは久しぶりだ。
乃理子に聞いたんだが、えらい迷惑かけたらしいな。」

子供のような顔をして笑つた。

「いえ。」

先輩のそのくつたくのない顔を見ると何故か胸がどきんとした。
それを悟られまいと、

「もう一緒に住んでるんですか？」

僕は彼女のことには話を振つてみた。

「・・うん、まだ籍はこれからなんだ。だが、とりあえず乃理子が
一緒に住みたっていうもんだから、今の俺が住んでいる所へ呼ん
だんだ。」

（ふうん。なるほど。彼女は年上みたいでしつかりした感じにみえ
たけど、きっと先輩にべつたりなんだろうな。なんだかそんな気が
する。）

「へくつしょん。」

オーバーアクションで彼がくしゃみをしたので、

「風邪ですか？」

聞いてみると

「うん。まあ、たいしたことないけどな。」

「それより、明日サークル内の日帰りの旅行、行くんだろ？」

明日、北陸の方へ出かける予定だった。これは授業やワークショ

ツプとは関係ない。まったくのお遊びだ。気のあつたメンバーで、テニスやスノボーや旅行など。お遊びサークルだな。健一が入つていて誘われたから、たまに気が向くと参加している。女の子も多いから、出会いを求めて入つてくるやつが大半だが。健一らしい。僕はそんな軽いノリが嫌で、健一にしつこく誘われると、仕方なしにたまに参加するくらいだ。

「あれ、先輩も入つてるんですか？」

「まあ、ほとんど出ないけどな。」

と言つて、僕も知つていて同じ学年の先輩の名前を出して、その人に誘われるとたまに参加するようなことを話した。僕もたまにしか出ないので、水木先輩もそのサークルに籍をあいているとは知らなかつた。

「明日、行くんですか。」

「うん、お前も行くんだろ。」

「ええ。」

「そつか。じゃ、また明日な。」

そういうつて先輩は手を振つて去つていつた。いつもと同じ先輩だ。あのことはやつぱり酔つ払つていたんだう。

バスは海沿いの国道を走り続けていた。前の席に座つていた健一が座席越しに顔をのぞかせて

「隆博。大丈夫か？」

声をかけられてはつとして顔を上げた。

いろんなことをあれこれ考えていたものだから、目的地に着くまでずっとぼんやりしていた。次の目的地の大きなレクレーション施設の門が見えてきた。そこで皆でパターゴルフをすることになつていた。38ホールはあるけつこう大きなパター場だ。

バスが止まつた。僕が大丈夫だと答えると、彼は僕を誘い数人の女の子とバスを降りた。

彼女たちがパター場を一緒に回りうと、僕の回りを囲んだ。それ

に答えながら、僕の目は水木先輩を追っていた。

何故だろう。先輩のことが気になつた。あの夜のことを何か先輩が言うのではないかと思っていた。それは期待なのか、何なのか。確かめたかったのか。

何を？でも、そんなことなど何もなかつたかのようになつもと同じ彼だつた。

さつきは風にあたりにきた僕を迎えて来たのかと思つたが、何も特別なことは言わなかつたし、今も女の子たちに囲まれて、誰とコースを回るか雑談をしている。

「隆博くん。なんだか今日はぼんやりしてる。」

「ねえ。せつかく久しぶりに参加してくれたのに。」

彼女たちが口々に、僕がぼんやりして楽しんでいないことを責めた。

これはいかんなと僕も思い直し、

「よし、なにか賭けようか？一番になつた人にはみんなで何かおごるとか？」

「やつた。アイスクリーミーとか？」

「何でもいいよ。」

「でも、女性陣にはハンデつけてよ。」

「そりゃ、もちろんだ。」

健二が愛想よく笑い、僕たちは女の子2人と4人のグループになり、パターを借りに受付へ向かつた。

「誰だろう。気持ちよく寝ているのに。」

誰かが、僕の首を手で触れる。その手を払いのけようとするが、執拗に僕の首に腕を巻きつけ、引き寄せて口づけしようとすると、僕が顔を背けて逃れようとすると、ものすごい力で頭を押さえつけて唇を寄せてくる。息が出来ない苦しさにそれを跳ね除けようと、腕を掴まれ、そいつは執拗に僕の口をふさぐ。僕はひどく嫌がつているんだけど、どうにも出来ない。うつすら目を開けて、相手

を確かめよつとある。そこで、はつとする。

(先輩！)

頭の側で目覚し代わりに置いてある携帯電話のアラームが鳴っている。その音で目が覚め、反射的に手を伸ばしてアラームを止める。

(・・・寝汗が気持ち悪い。)

べたべたした寝汗が首筋にまとわりついている。

僕は今見ていた夢を反復した。

(何故だろう。ひどい夢だ。)

(こないだのことがよほどショックだったらしい。)

先輩だった。

ひどい夢だ。

振り払おうと思えば思つほど、執拗にあの夜のことを思い出してしまつ。

あれから北陸へ行つたときも、先輩のことが妙に気になつてしまつた。知らぬうちに目で彼を追つてしまつていて。

先輩はどうもあれから僕のことを微妙に避けているみたいだ。あの時もあまり話らしい話もしなかつたし、目が合ひつとふつと、目をそらした。

僕の気のせいだらうか? といつか何故僕があの人に執心しなければならないんだ。ばかばかしい。確かに憧れてる先輩だと思うが、あれくらいのことで、動搖して・・・

これ以上ベッドの上でじつとしているし、変な妄想に捕らえられそうで怖くなり、布団をはねのけてシャワーを浴びることにした。時計を見ると10:30を回つている。カレンダーを見る。土曜日だ。

やばいな。急がないと間に合わないかも。

といふか、すっぽかそつか。気乗りしない約束に出かける気力が失せる。しかも、寝過ごした。今から準備して出かけてもぎりぎり

だ。

わへ、どうするかと思案し、とりあえずこの気持悪い寝汗を何とかしないと、そう思い浴室に飛び込む。コックを捻り熱い湯を浴びてこりうつむけに気分がすつきりしてきた。シャワーを浴びながら、どうやって断るか思案し始めた。

（ごめん。風邪引いたみたいで起き上がれないんだ。）

それとも、（母親から急に呼び出されて、実家へ行かないといけないんだ。）とか。

すると、部屋の向こうからシャワーの水音に混じって、電話の呼び出し音が聞こえた。

（やばい。健一だ。）

タオルで身体を拭きながら浴室を出て、携帯を手に取る。

「「ごめん。健一。」どうも風邪ひい・・・」

言い終えるのを待たずして、彼が大声を上げた。

「いかんぞ。隆博。もうおまんのアパートの下まで来てるだ。」「えつ。」「えつ。」

絶句した。バスタオルで腰を巻いたまま、部屋の窓を開けると、「おーい。」「バイクにまたがった健一が手を振っていた。

「何だよ。」

声を上げると、

「おまん、今日もすっぽかすつもりだつただろ。こりやつて俺が迎えにこれば行かんわけにはいくまい。」

はあ。ため息をついた。仕方ない。行くか。

窓をぴしゃんと力任せに閉めると、しぶしぶクローゼットからシヤツを取り出した。

「だからせ、断つてつて言つてんだろ。」

「はあ。何？」

健一め。聞こえんふりだな。

メットを思いつきりくつつけて、大声を上げる。

「だからさ、そんな気ないんだって言つてるだろ。」

健一のバイクの後ろにまたがつて、僕はまた大声を張り上げる。

キキイ。

「痛て。」

急停止したバイクの反動で、メット同士ががつんと音を立てた。

「急に停まんなよ。」

「赤だよ。」

前方の信号を彼が指差す。

「俺さあ、おまんのこと心配してんだよ。里佳子ちゃんいい子だからさ。1回ふたりでどつか行つてみろよ。きつと氣に入るよ。」

里佳子ちゃん。ああ、そんな名前だつたつけな。こないだのサークルの日帰り旅行。北陸へ行つて魚を食べて、パター、ゴルフした。あの時、健一と女の子ふたりとグループになつてパター場を回つた。あの時、一緒だつた女の子のふたりのうち、髪の毛の長い田がくりととした活発そうな子。あの子。

「う～ん。でも。」

「でもじゃねえよ。男から断るなよ。普通。」

そうだけど。僕は健一に気づかれないようこっそくため息をついた。

だつてまた同じでしょ。どの子と付き合つても一緒だよ。言いたかつたけど、口をつぐんだ。健一が心配してくれてるのはくわかつていたから。

あのパーティー場で、里佳子ちゃんが僕を気に入ってくれたらしい。

健一を通じて連絡があり、今日はその里佳子ちゃんとデート。どこへ行けばいいんだか。考えるのも何だか億劫で。

健一の予定では、駅前で彼女と待ち合わせ。3人でちょっとお茶して、その後は彼女を連れてどつか行つて来いつてやつ。こないだから言られてたんだけど、気乗りがしないで、ずるずるすっぽかしていたら、いい加減業を煮やした健一に無理やり拉致されて連行されているつてわけ。

どうして、僕が気乗りしないのかつていうと。

「おい。何とか間に合つたぞ。」

嬉々として健一が声を上げ、駅前のロータリーにバイクを滑らせた。

駅前のロータリーの駐輪場にバイクを止めて、待ち合わせの大きな時計台の下に目を向けると、もう彼女が来ていた。僕の姿を目に留め、はにかんだように笑顔を向けた。僕もぎこちなく笑顔を返し、手を振つた。確かに可愛い子だけど。

「お待たせ。こいつがぐずぐずしてるもんだから、出かけるのが遅くなつてしまんね。」

健一が僕のシャツの袖を引っ張つた。何がすまんねだ。濡れた髪にろくすっぽドライヤーもかけさせてもらえず、本当に風邪を引きそうだ。

「大丈夫。今来たところだから。」

彼女は、来ているニットの袖を直して、バックを肩に掛けなおした。何となく緊張している感じが伝わってきて、余計に僕も緊張しそうだ。

「そこのプレシュウズでいい?」

健一が駅前に面したガラス張りのごじんまりしたカフェを指差した。

「ええ。」

彼女が頷き、3人で店に向かって歩き出した。

「あの店、オープンテラスもあるね。いいね。外でお茶飲むのも。」

健一が愛想よく笑った。

だからさ、寒いんだって。髪の毛乾いてないから。僕は乾いてない髪の毛が気になつて、頭に手を伸ばす。彼女がそれに気づいて、

「堀江くん。こないだと何だか髪型違つ?」

「ああ、変? シャワー浴びてきたもんだから。」

彼女は首を振つて、小さく笑つた。

あれからカフェで健一と別れて、僕は里佳子ちゃんを連れて近くのイタリアンレストランへ行つた。そこでスパゲティとピザを頼み軽く食事をした後、地下鉄を乗り継ぎ、港の近くの水族館まで行つた。

彼女は、僕らの学校の割と近くにあるU女子大の2年生。あのサーカルにはちよくちよく来ているらしかつたが、僕は本当にたまにしか参加しないから、どんな女の子がいるのがあまり知らなかつた。だけど、里佳子ちゃんは僕を知つていたらしく、こないだのパーティーで一緒に過ごさせて嬉しかつたと言つた。食事をした時、真正面からじつくり彼女を見るたら、確かに可愛い子だなと思つた。こないだは気がつかなかつたけど、笑うと小さなえくぼが出来て、くりつとした目元が愛らしい。だけど、何故僕なんだろう。健一の方がいい男だと思うけど。

水族館で、ペンギンが飛ぶように泳ぐのが面白く、じつとその場に座り込んだようにして動かず見ている彼女の脇で、僕もじつとペンギンの姿を田で追つていた。

「今日は嬉しかつた。」

田を水槽に向けたまま、彼女が言つた。

「うん。」

僕はこのパートを2回すっぽかしていたから気まぐれ、曖昧に返

事を返した。

「堀江君ともうとゆつくり話してみたかったの。だから思い切って
杉原君に頼んでみたの。」

「うん。」

僕は返す言葉がない。

「また、会ってくれる?」

黙つていると、

「駄目かな。」

彼女の声が震えていた。

「僕なんかつまんないよ。」

「そんなことないよ。」

「男から断んなよ。? ?

健二の怖い顔が浮かんできた。

「そうだね。今度はアシカのショーキー、見に来る?」

ついそう答えてしまった。

どの子と付き合つても長続きしない。どうしてなのか、理由はわ
かっている。

僕がその恋に執心してないと、女の子の方が先に感づいて僕の元
を去つていく。大体はそのパターンだ。熱が入らない。悪いとわか
ついても、その子のことを本当に好きになれない。恋人の振りは
いくらでも出来るけど。

食事してドライブして、ベッドに入るだけ。

形のない愛だけを信じていたあなたは、本気で愛すること恐れて
るだけ。

あれは兄貴の好きな浜田省吾の歌の歌詞だつたけ。兄貴がいつも
風呂場で歌つていた。

そう、僕は何に怯えているのだろう。

結局、メルアドと携帯の番号を交換した。

そのうちアシカのショーを観にいかないといけないだろ？

ちょくちょく彼女がくれるメールに返事を返す。短く返信し、送信ボタンを押した後、携帯をカウンターの下に置き、グラス磨きの続きを取り掛かる。

あれからあつという間に月日が経ち、店の奥のカレンダーに日をやると、来週の水曜日、定例のワークショップの日が間近に迫っていることに気がついた。

僕はこれで3回休んでる。何だかあれ以来水木先輩と顔を合わせることに気が進まない。あの夜のことが尾を引いていた。僕はそういう趣味はない。もちろん先輩にもないだろうし。彼は酔っ払っていてそんなことは覚えていないかもしだれない。でも、僕は覚えている。だからなんとなく気まずい。そんなことを考えながらグラスを磨いていると、オーナーがバックヤードから叫んだ。

「隆博。レモンがきてた。買つてくるから店番頼むぞ。」

「オーナー。僕が行きますよ。」

「いや、いいんだ。自分の用事もあるから、ちょっとといいか？」「ええ。どうぞ、じゅつくり。」

ここは僕のバイト先。親父の知人がここのおーナーで、ちょっとしたパブをやっている。いつも店は薄暗く、オーナーの好きなオールドジャズがいつもかかっている。客層もかなり上だな。男性客が多い。しつとりとした感じの大人のカツプルとかね。親父の知人ということでかなり融通が利く。ありがたい。僕はグラスを磨いたり、掃除をしたり、客の相手、ちょっとしたおつまみを作ったり、いろいろ。

手が空くと、オーナーが好きなジャズのレコードを聞かせてくれる。ベイブ・ブルーバック。ジョーン・コールドウェル。物悲しいような哀愁を漂わせるトランペットの音色。親父たちが若かりし頃、良くな聞いたアーティストたち。その音楽を聞いたこともない、アーティ

ストの名前すら知らなかつたが、その音色は古さを感じさせない。心地よい振動が僕の脳の中に入り込んでくる。プレーヤーにかけると、所々音が飛ぶレコードをなだめるようにして、オーナーは大事に何度もレコードをかける。まるで自分の青春の思い出を大事に懐で温めるようにして。

僕は薄暗い店内を歩き回り、テーブルを拭き、じみなどが落ちていないかチェックをし、冷蔵庫を覗き込んだ。氷は充分にあるし、飲み物の在庫もチェックした。どのジャズをかけるか店のクロラックをぐるぐる回しながら選んでいると、ドアベルの音がして店のドアが開く音がした。

オープンにはまだ少し早いじみじみがと迷つたが、開店灯のスイッチを押し、「いらっしゃいませ」とドアの方へ声をかけた。

「おう、隆博。」
(先輩・・・)
水木先輩だった。
「まだ、店開いてないか。早いかな。」
「ああ、いいんですよ。どうぞ。」
僕はカウンターを勧めた。彼が店に来たのは初めてだし、もちろん僕がバイトしてるなんて知らないはずだ。
「あの。何飲みます?」
メニューをさしだすと、
「トムコリンズ。」
(えーと、ジンベースだつたけ?)
変わった物を注文されて一瞬躊躇した。
「ジンだよ。」
僕の考えていることを見透かすように先輩が言った。
「メニューにないな。だめか?」
メニューにトムコリンズが載っていないことを彼は指摘した。
「いや、いいですよ。作りますよ。」
うろ覚えだが、シェーカーに材料を入れ始めると、
「お前、けつこうしゃれたところでバイトしてんな。」
彼が話し始めた。
「で、先輩どうしたんですか?僕がここでバイトしていることを知つてたんですか?」
「いや、健一に聞いた。」
(なるほど、で、何の用事?)
「お前さあ、なんでワークショップ、最近来ないの?」
(ああ、そのことか。まさかあなたに顔を合わしにくらいからなんて、言えないよな。)

僕はショーカーを振りながら

「最近、ずっと忙しかったんですね。」

言葉を濁した。

「そうか。」

「でも、勉強だからな、来た方がいいぞ。」

「ええ、わかっています。」

僕はなんとなく先輩の顔を見るのが気恥ずかしく、カウンターの中でいろんな雑用をしながら、彼と言葉を交わした。

先輩はそれからグラスを2、3杯おかわりして、たわいもない話を書いて出ていった。

そして、次のワークショップの課題を置いていった。

僕は目を通して、はつとした。

『レイモンド・カーヴァーもしくはリチャード・アダムスの著書の一節』

組み合わせは先輩とだった。課題に沿う文献を選んで、規定のページ数だけ訳しあ互い交換する。それに目を通して、お互いの訳にたいしてのつぶやくを述べる。

さて、はつとしたのは『リチャード・アダムス』という作家の名前だ。僕の原点。

「… 芙美。」

その名前をつぶやくと、胸が苦しくなる。せつなくて、今でも心を離れない。

芙美は高校の同級生。英語が好きな女の子で、いつも原書でいろんな本を読んでいた。僕も英語が好きな科目で、読書も好きだった。だから、芙美が図書館でいつも本を読んでいるのを見ていた。何とはなしに声をかけてみたのがきっかけで、僕らは図書館で会つていろんな話をした。読んだ本についてとか、クラスのことや、学校の行事や先生のことや。そして、この本は良かったとか、あの作家のこんな本を読んでみたらって、勧めあつたり……。

リチャード・アダムスは彼女の好きな作家のひとりだった。彼女が僕に残してくれた本。リチャード・アダムスの「ウォーターシップダウンのうさぎたち」。原書だった。僕は芙美が残してくれた本が読みたくて一生懸命勉強した。その上・下巻の本を辞書をめくり、わからぬ所は先生に聞いたりして、読み終わつたのには3ヶ月がかかつた。それほど僕は英語が好きなくせに全くだめだったんだ。芙美のことを思い返していると、オーナーが帰つてきた。

「大丈夫だつた？ 店？」

「ええ、とりたてて何もなく。」

「客は？」

「ひとりです。」

「先輩のことだ。」

「でも、隆博はある程度力クテルも作れるし、客あしらいもうまい。俺が留守にしていても大丈夫だから、安心だ。」

「それほどでもないですよ。」

そう言って、トムコリンズを注文されてレシピに迷つたことを話した。オーナーは、ああ、メニューにないからなあと言って、どこかにレシピ集があつたと探してくれた。そして2人でそれを見ながらカクテルを作る練習をしていたら、客がどんどん入つてきたので中断した。

その2、3日後に僕はT市にある洋書の専門店に向かつた。目的はワークショップの課題を探すためだ。地下鉄に乗り、その専門店がある駅に降りると、そのホームで見覚えのある女性を見かけた。（あ、おばさん。）

芙美の母親だった。細面の優しい雰囲気の女性だ。あまり変わっていない。向こうも気がついたらしく、

「隆博くん。」

と、声をかけてきた。

「おばさん、ひさしごりです。」

頭を下げる

「ちょっと見ない間に大人びたわね。」

彼女は笑顔を見せた。

おばさんはこの駅の近くにあるデパートに買い物に来たらしい。僕が学校の勉強で使う洋書を探しに来たのだと言うと、勉強熱心なのね、と褒めてくれた。そして、少し立ち話をした後別れ際に、たまには芙美に会いに来てやつてね、と言つて人混みの中に消えていった。

ああ、そうなんだ。何年だろう。あれから何年経つたんだろう。最後に芙美に会いに行つたのはいつだつたんだろう。僕はいてもたつてもいられず、芙美に会いに行こうと思つた。

今からでも。すぐに。

そう思つたけど、思つただけだつた。僕は駅のホームのベンチに座つたまま、じつと電車が行き交うのを見ていた。見ていただけだつた。心とは裏腹に体が動かなかつた。

まだ、芙美に会えない。僕は自分の気持ちをまだ整理していなかつた。

僕はリチャード・アダムスの短編を何冊か買つて家に帰り、読み始めた。洋書を読んだのはこの人が初めてだ。そして、何故かそれがきっかけで僕は翻訳の仕事がしたいと思い始めた。その言葉の裏にあるものが知りたい。訳し方によつていろんな解釈がある。読み手にどんなふうに原作者の思いが伝えられるだろう。僕の中で言葉は魔法だ。言霊という言葉がある。言葉には魂がある。どんな思いをどんな言葉にしたら、眞実のことが伝えられるだろう。僕が今思つてゐること。言葉にしたら壊れそうだ。でも、僕は自分の心中で何度も、何度も復唱する。その言葉を。それは誰にも知られたくない。

それから、店に何度も先輩が来た。もちろん、ワークショップの課題の交換のこともあつたし、彼は店の雰囲気が気に入つたらしい。僕が店にいるか携帯へ電話がかかってくる。僕が店にいると、彼はやつてきた。友人が来ることはあまりなかつた。なんでつて？ここは大人の店だ。『4丁目』へ足しげく通つているようなやつらがあるような店ではない。じゃあ、先輩も大人かつていうと、どうかな？と、最近は思うことがある。僕の中ではかなり大人っぽい人だと思つていたけど、店へやつて来ているんな話をするうちに意外と子供っぽいところがある人だということに気がついた。年よりも大人っぽく見えるくせに、意外と意固地だつたり、子供のように愚痴を言つたりする。まあ、お酒が入つてゐるからね。そんなもんかも。

先輩はあの夜のことなんて忘れたかのように、僕を避けていたような時期があつたのも嘘のように、先輩面をして僕を小突きまわし、冗談を言つた。僕も何だかそんなことを意識していたのが変だつたなと思うようになり、先輩が店に来る日を楽しみにした。僕らは時々店が引けた後、ラーメンを食べに行つたり、居酒屋に飲みなしへに行つたりした。

そんな日が数ヶ月続いていた。あつという間に季節は過ぎ冬になつた。最近はちらほら雪が舞う日もあつた。里佳子ちゃんからはちよくちよく連絡が入る。僕らは駅前で待ち合わせして、映画を観たり、夕食を一緒にしたりしてゐた。だけど、まだアシカのショーは観にいつていない。

今日は金曜日。バイトの日。

「寒いですね。」

「おう、もう冬だな。」

オーナーはグラスを磨きながらつぶやいた。

窓の外には、またちらほらと、雪が降り始めた。店は週末にしては人が少なく、暇だから早めに閉めようかとオーナーが言つた。

「隆博。最近、彼氏来ないね。」

「彼氏？」

「悟くん。」

「そうですね。忙しいんでしょ。」

「ふーん。春に卒業なんだろ。」

そういえば、確かにここ最近、ずっと先輩は店に顔を出さなかつた。どうしてかなとは思つてはいたが、わざわざ連絡するまでもないしと思い、でも内心すごく気になつていた。学部内でも最近は顔を見ない。客が入つてくるたびに彼ではないかと、気になつてドアの方ばかり見ていた。

（ばかみたいだな。）

ふつとおかしくなつた。

（女の子みたいだ。）

女の子が好きな人を待つてゐるみたいだと、思つた。駅前に行くと必ず先に来て、僕を待つてゐる里佳子ちゃんのことを思つた。

（好きな人？）

まあ、確かに好きな先輩ではあるが・・・

店がひけてから帰り道。やつぱり気になりだすと気になつて仕様がない。電話をかけてみようと携帯を取り出した。夜11時を過ぎていたから、まづいかなと思いながらダイヤルしてみる。

（寒いな。）

フリースのファスナーを首のところまで引き上げる。そんなに寒くはないとたかをくくつて、シャツの上に薄いフリースを一枚着てきただけだから、帰り道はさすがに寒かつた。僕は駅まで続く道沿いにあるコンビニで、暖かい缶コーヒーを買って、それで手を温めながらコール音を聞いていた。

（出ないな。）

7回「ホール音を聞いて切り替わったら

「もしもし」

彼が出了。

「隆博？」

「夜分、遅くすみません。」

僕は遅い時間に電話をしたことを詫びた。

「いや、いいんだよ。」

何となく元気がないようだ。

最近顔を見ないのでどうしたのかと聞くと、ちょっといろいろあつてと答えたがそれ以上詳しいことは話してくれなかつた。あまり話していくもいけないのかなという雰囲気だつたので、切ろうとした、どこにいるんだと彼が問つた。バイトの帰りでこれから地下鉄の駅へ向かうところだと言うと、雪が降つているなど彼が言つた。僕がええ、と答えると、ちょっと間をおいて彼が囁いた。

「気をつけて帰れよ。」

その声があまりに優しくて、まるで恋人に語りかけるように、甘い声で、僕はとても切ない気持ちになつた。ちらほら舞つていた雪が大きなボタン雪に変わつて、ポコポコと音をたてるようになつた。そして、その雪を見つめていると、その景色がしだいにじんわりとにじんできた。

「また、電話するわ。」

そう言つて電話が切れた。僕の目に涙がにじんでいた。何故だろう。彼に会つたかった。今日はもう終わるけど。明日になつたら。それとも明後日になつたら。

自分の思いもよらない変な感情に戸惑いながら、切れた携帯を手にじつと雪を眺めた。大きな粒となつて落ちてくる雪を見ていたら、ふいにあの時の情景が記憶に浮かんだ。

白い雪が白い花びらと重なつて見えた。触れてしまえば溶けて消えるかのような薄い乳白色の桜の花びら。手にした花びらを口元に

寄せて、ふつと息を吐き、風に乗つて舞う花びらが落ちる様を目に
して、扶美は言つた。

「美しいって儂いつていうことなのね。」

僕は黙つて桜の木を見上げた。そうしている間も、休むことなく

風に桜の花は舞い、地面に落ちた。

「悲しいの？」

そう彼女に問うと、

「そう、悲しいのかな。寂しいのかな。変な気持。どうして美しい
ものはその美しさを永遠にとどめておくことが出来ないのかな。」

「扶美は女の子だな。ロマンチストだ。」

「隆博君は何か感じない？」

風に舞う桜の花を見て、何も感じないのかと彼女は聞いた。少し
口を尖らせてね。その表情が可愛くて、僕は桜より扶美の表情に気
を取られていた。

「桜が散つてしまつのは悲しいけど、でも来年又咲くよ。儂いつて
扶美が言つのはわかるけど、でも自然のものは回りまわつてまた日
にすることが出来るよ。」

「だから消えてなくなつてしまつわけじゃない。扶美はこの一瞬、
一瞬の美しさを儂い、儂いからこそ美しく、心に残るつていうこと
が言いたいのかな。」

扶美は笑みを浮かべて、

「隆博君にみんな私が思つたこと言われけやつた。」
とおどけてみせた。

？扶美！？

僕はその場につづくまつた。胸に熱いものが押し寄せて立つてい
られなかつた。血が逆流するよつに胸の鼓動が早くなり、目じりに
涙が浮かんだ。

記憶の中で扶美が笑つていた。あの時と同じ、あの頃のまま。
雪が肩に落ちてじんわりと服を濡らした。髪に手に雪が落ちる冷

たさを感じながらも、僕はその場から立ち上がりなかつた。悲しくて、そして愛おしくて。帰らない時間を持つて。

（美しいといふことは、儂いといふこと。）

彼が言った言葉。扶美が言った言葉。僕の中で決して忘れえぬ特別な言葉。

雪の中で扶美が笑つていた。雪の粒が薄い花びらに変わつた。そして先輩が優しく僕の耳元で囁いていた。恋人のようだ。

「隆博。お前最近元気ないな。」「そんなことないよ。」「おー？里佳子ちゃんと喧嘩でもしたんか？」「してないよ。だまれよ。講義中だぞ。」4時限目の授業に出ていると、後ろの席に健一が来て僕の背中をベンで小突いた。「なー？俺んらとも最近つき合って悪いなあ。」「うるさいぞ。」「うるさいぞ。」「僕が少し声を荒げたせいか、前の席にいた2、3人の生徒が振り返った。慌てて頭を下げる。「あとにしよ。昼飯おじるわ。」「やつた。」「やつた。」講義が終わつた後、健一と連れ立つて学食に向かつた。「や、あれから里佳子ちゃんとつまづいてるのか気になつてな。歩きながら健一が話しだした。「まめに連絡くれるよ。メールとか。」「あの子からか？」「やう。」「おまんからもデートとかひやんと誘つとるのか」健一が責めるように言った。「時々会つてるよ。今夜も食事する約束だし。」「そうか。」「少しほつとしたような表情をこじらひじに向かへ、健一が笑つた。わかつてゐる。健一が気にかけてくれること。心配してゐるけど。健一とは高校生からの付き合いだ。クラスで後ろの席にあいつが来たのがきっかけで仲良くなつた。こつも居眠りしてゐやつだつた。

それでも不思議と授業の内容は頭に入っているみたいで、試験ではそこそこちゃんと点を取っていた。あいつが背の高い僕の背中を隠れ蓑にして、いつも居眠りしてゐるのを知つてた。あいつは？いつもまんな。おまんの後ろでラッキーだよ。？つて頭をかいてた。どちらかというと淡白で奥手な僕の女関係を心配してくれてるのは、長い付き合いだから、彼の面倒見の良い性格のせいか、いや、でも本当はもっと違う理由で僕のことを心配してゐるのだとわかつていた。お互にそのことを口にすることはないけど。

「それで多少付き合いは進展したんか。もうやつたか。」

あはた

僕はちょっとむつとした。これ以上彼女の話題を振られると困る。だつて、進展も何も健一に報告することなんて何もないんだし。

「お、お前ラッキーだぞ。隆博が飯あいこってくれるって。」

「あほか。裕樹の分までなんか知らんぞ。」

反論した

なんよ、今お隣のあいりなんか

「あま、自分で払えよ。

とせむらたが
結

「お姉さんといいな。誰がおばあちゃんやんか。」

健二が食堂のおばちゃんと軽口をたたいていふのを見て、（あい

テーブルに3人で座り、僕のおごりのカツ定食を食べ始める。

あ、とにかく體に食へてしまつた健一が

「俺、ラーメンも食べるわ。」

勢いよく、食券を買いに席を立つた。
「相変わらず、あの食欲には負けるわ。」

裕樹も呆れ顔だ。

「しかし、だいぶ顔見なんだな。」

「うん、授業は出てたんだけどな。」

「忙しいか。」

「バイトが結構入つてて。」

「そうか。」

そこへラーメンをトレイに乗せた健一が戻ってきて、

「ほうよ、俺が誘つても合コンにも来んわ。つまらん男よ。」

「悪かつたね。俺が行かんほうが、お前んらに女の子が回つてくる率が高くなるだろ。」

そう言つと、

「まあ、野郎は少なくて女の子の数が多いのはいいけどな。」

裕樹も笑つた。

それで僕らは、食堂に備え付けてある自動お茶汲み機の生温くて薄い煎茶を啜りながら、たわいもない話をしていた。そうすると思い出したように裕樹が

「そういえば水木先輩んとこ。大変だつたらしいぞ。」

戸惑つた僕の表情を見て、裕樹が続けた。

「ああ、お前知らなんだか。彼女、流産しかかつたらしくて。」

「そうなんだ。それで？」

「うん、ずつと入院していたんだけど、持ち直したらしくて今は実家に帰つて安静にしているらしい。」

「そりや、大変だ。」

「ずっと、付き添つて病院に行つたり、いろいろで大変だつたみたいだけど、だいぶ落ち着いたらしいな。」

聞くと、先輩が店にぱつたり顔を出さなくなつた辺からの話で、僕は合点した。

（そうか。別に言つてくれればいいのに。）

水臭いなと思った。結構行き来してたのに。そういうことは話さないんだから。

こないだ電話した時にでも言つてくれればよいのにと思った。

「さてと、次の講義が始まるからそろそろ行こうか。」

裕樹がトレイに食べた食器やら灰皿を乗せ始めた。僕も席を立とうとすると、メールの着信音がなった。

（里佳子ちゃんか。）

携帯を見るとやはり彼女からだった。

『今日大丈夫？ 6時に時計台のところで待ってるね。』 確認メールだ。

『大丈夫だよ。後でね。』 すばやく返事をし、携帯のフラップを閉じる。

それで僕は夕方までの授業をこなし、約束の時間に駅にすっ飛んでいった。

ぎりぎりだ。いつも彼女は先に来て待っている。だからこそ少しでも遅れることが気がかりだ。腕時計に目をやると6時ジャスト。遅れなくて良かった。

時計台の下で待っている彼女を目に留め、手を振る。薄いベージュのニットポンチョにスキニーのデニムに黒いブーツを履いた彼女が同じように手を振る。スポーツが好きな彼女は、毎週プールに通っている。そのせいか、程よく筋肉質で長くて形の良い足をしている。綺麗な子だ。

駅前から東南に伸びた繁華街を僕らは並んで歩く。僕の左側を歩く彼女の手が手持ち無沙汰のようにポンチョの裾から出ている。手を繋ぐべきかな。ふと思つ。

だけど、僕はコートのポケットから手を出すことをしなかった。

「ここにミニグラソース絶品ね。」

美味しそうに口を動かす彼女に、

「どのハンバーグもうまいね。」

僕も返す。

彼女とこの店に来るのは2回目だ。クリームコロッケやハンバーグが美味しい可愛らしい洋食店はいつもカップルや女の子のグループで一杯だ。

「パンのお代わりはいかがですか？」

店員が籠に焼きたてのパンを持ってテーブルを回っている。

「パンも美味しいからたくさん食べたいんだけど、もう私このハンバーグでお腹一杯だわ。」

「食べれるよ。僕はお代わりしよう。里佳子ちゃんももう少し食べたら。何とかは別腹って言うじやん。」

「それを言つなら、甘いものは別腹でしょ。」

「デザートもどうぞ。」

僕はおどけて笑つた。

彼女と会うのはこれまで何回目だろう。数えるくらいしかまだ会っていないけど、僕らは昔からの友達のように気安くいろんな話をした。確かに彼女というのは楽しいと思った。明るく気さくな子だ。変な気を使わなくてもいい。でも、恋人として付き合っているのかどうなのか、僕の気持の中ではまだはつきりしていなかつた。

お互いの学校の話、友達や遊びの話、いろんな話をしているうちに時間が過ぎた。いろいろを見て店を出、賑わう繁華街の町並みを見ながら僕らは歩いた。

「どうしようか。」

「これから行動を問うと、

「そうね。」

ポンチョの袖から手を出し、彼女は僕の手に触れた。反射的にそつとその手を握ると、もう戻れないような気がした。

「もう少し隆博君といたいな。」

そう甘えたように彼女はつぶやいた。

?おまん、まだやつてないんか。 ?

昼間の健一の声が蘇った。

僕は頭の中で、財布の中の札の数を数え、3つ先の駅近くのホテル街の地理を頭に思い浮かべた。

可愛いし、いい子だし、僕のことを好いてくれてるし。理由は揃っている。だけど、何故か踏み出せない。今、抱いていいのか。この子とそういう関係になつていいのか、僕は困惑している。何に。又同じことの繰り返しになるんじゃないのか。僕も彼女も擦り切れた雑巾のように疲れ果ててしまう。今までのよつて。

立ち止まって彼女が僕を見た。その目は恋している目だ。少し潤んだように見える。

その瞳をじっと見る。

あ、決めなきや。

その時、ふいに携帯の着信音が聞こえた。

「あれ、私？」

バッグの中をかき回すようにして携帯を探す彼女に、

「ごめん、ごめん。僕だよ。」

「コードの内ポケットから携帯を取り出して見せた。ちょっと、ごめん。そう言って液晶画面に視線を落とすと、

(あ、先輩。)

先輩だ。慌てて着信ボタンを押す、

「ごめん、今いいか？」

彼が電話するわ、と言つてから10日ほど経っていた。

少し先で待つてくれている里佳子ちゃんを見つめて見て、

「あ、ええ。」

そう返すと、

「すまんな。電話するわって言つてからだいぶ経つてしまつて。」

「いや、いいんです。それより大変だったらしいですね。」

乃理子さんのことほのめかすと、

「事情を話せばよかつたんだけど、まあ、こんなこといつのもなんかなと思つて。」

「プライベートなことですからね。」

とは言つたものの、水臭いなあと思つ氣持ちは払拭できなかつた。

「それより、今から会わんか？」

急に誘われて僕はとまどい、時計と里佳子ちゃんの顔を交互に見た。すまないと想つ氣持と共にどこかほつとした思いが過ぎつた。

「めん。里佳子ちゃん。まだ無理かも。

彼女はさすがにちよつとむつとしていた。無理もない。

？とにかく断れない怖～い先輩なんだ。どうしても行かないと行けなくて。断ると後でどうなるかわからんないし。？

僕は先輩の誘いにかこつけて、デートを中断した。申し訳ないので彼女を家までちゃんと送り届け、それから慌てて先輩との待ち合わせの店にすつ飛んで行った。

彼が指定した炉辺焼きの店に着くと、すでにカウンターで先輩は一杯やり始めていた。

「おまたせしました。」

彼の隣に腰を下ろすと、

「急で悪かつたな。」

「デート中だつたか？」

「どうしてわかるんです？」

「別に。当たずっぽうだ。」

「邪魔したかな？」

「いいんです。ちょうど送つてこつたところでしたから。」

本当は違うんだけど。

「いいなあ。デートかあ。」

彼がうらやましそうな顔をするので、

「先輩たちも行けばいいじゃないですか？」

「うん、でも、これだからな。」

お腹が出ていることを手振りで示した。

「当分は大変ですよね。」

彼女の具合を尋ねると、食事の支度をしている時に、床が濡れていたことに気づかず転んでしまったことが原因で流産しかかり、でも、処置が早かつたのでなんとか持ちこたえたこと。今は実家に帰つて療養していることなど話してくれた。

「だいぶ、店に来なかつたから、どうしたのかと心配していたんですけど、マスターも最近、来ないねって。別にそつないうまいだ言つてくれればよかつたのに。」

「うん、まあ、なんか恥ずかしいんだよな。そういう家の事情みたいなこと話すの。俺つてすごい所帯じみてる感じがするんだよな。最近。」

「まあ、もう所帯持ちですからねえ。でも、奥さんよかつたですね。」

話しても、もうすぐに彼が子持ちになることなんて実感として沸くわけがない。目の前にいるのは、まだ2つしか違わない大学生だもん。

「そりなんだけど。ああ、羽伸ばしたいなあ。」

子供じみたことを言つ。

「旅行とか？」

以前、当てもなくふらふらと旅をするのが好きだという話を聞いた。

「いいね。いろんなところへ行つたな。」

過去の旅を思い出すようにして、

「地図を見るのが好きなんだ。日本地図広げてさ。自分が行つた所に赤丸をつける。丸が一杯になるとなんだか嬉しくて。今度はどこ

へ行こうかってわくわくするんだ。」

嬉しそうに話すので、おかしくて小さく笑うと、

「子供っぽいなあと思つてんだろ?」

肩をこづかれる。

「わかりました? だつて、こういつ話をじてる時の先輩つて、僕より年下なのかと思つてしまつ。」

面倒見がよく大人っぽく見える彼が、こういつ子供っぽいところを持つていて、それを見るのが何だか楽しに。誰にでもこういつ側面を見せるのだろうか? それとも? ?

「お代わりはどうだい?」

カウンター越しに大将が声をかけた。

「じゃあ、もう一杯。同じのを。」

先輩は焼酎のお湯わりをオーダーする。

「隆博も飲めば?」

そう言つて、ウーロン茶をすすつている僕に勧めるので
「僕が飲めないの知つてるでしょ。」

「でも、少しくらい飲めるつて聞いたぞ。」

「ワインなら少しくらい。」

「大将、ワインあるか?」

そうすると、大将はおかしそうに

「こんな店にそんなしゃれたもん、置いてあるかつ。」

そりやそうだ。炉辺焼屋にそんなもん置いてあるはずがない。先輩が肩をすくめるので、

「いいですよ。どうせ先輩を送つてかなきやいけないだろ? し。飲むと頭が痛くなるし。」

「面白ないね。こないだみたいに迷惑かけん程度に飲むわ。」

彼が苦笑した。

「しかしながら人生飲めたほうが楽しいぞ。少し練習したらどうだ。」

「そんなもんですかね。」

「隆博はいつもクールだなあ。」

「クールですか？」

「そうだよ。いつもすましててそつがなくて。今まで大きな失敗も挫折もしたことないって顔してるよ。可愛げないヤツだよ。もちろん、目は笑っている。批判してるわけじゃないのはわかってる。この人はいつもこんな調子で口が悪いのだ。」

「じゃあ、飲んでみようかな。」

「お、それはいい。焼酎を薄くしてお湯かウーロン茶で割ろう。焼酎はあとが残らないから、頭が痛くならないかも知れんぞ。」

「そう彼が言うので、大将が

「そうこなくつちや。俺も飲み屋でウーロン茶ばっか飲まれると気が滅入るからな。」

アルコールの匂いがした、が、さっぱりしてるので飲みやすい。

「どうだ。」

「飲みやすいですね。これならいけるかも。」

「初めて?」

「ええ。」

「まあ、心配するな。酔っ払つたら俺が送つてやるから。」

すでにアルコールが回つて潤んだ目をして彼が言った。

「その方が心配ですよ。そんなに飲んで。」

並んだ空のグラスを指差した。

「ああ、違いないな。」

先輩は酔つてきたせいもあるか元気になってきた。

彼はそれからいろんな旅について話をした。バイクをフェリーに積んで北海道へ渡ったこと。函館から北上して、洞爺湖、登別、札幌を経由して富良野のラベンダー畑、見渡す限りの大地に波打つ丘が伸びやかに広がる美瑛。旭川そして稚内、最北端、サハリンの島影が望める宗谷岬まで。それから、伊豆半島。ヒッチハイクをして伊東、熱川から南下して下田へ。海辺から一転して、中伊豆の山の中を河津七滝から天城峠を越えて土肥へ抜ける。恋人岬、堂ヶ島を経由して下田へ戻るコース。

途中、お金がなくてお寺の境内の軒下にもぐつて寝ていたら、朝になつていて、行き倒れかと人だかりが出来ていて恥ずかしかったこと。

富山・雨晴海岸海に浮かぶ立山連峰が見たくて、海岸でテントを張つて立山連峰が見えるまでねばつたこと。沖縄。浅瀬でおこぜに射されて病院に運ばれたこと。カヌーで矢久島を回つたこと。

楽しそうに話をする彼を見ていて、僕は思つたんだ。この人は若いせいもあるけど、一ヶ所で落ち着いて生活をするようなタイプの人ではないんだろうな。いろんな所へ行つて、いろんな経験をして。狩猟民族のような。その土地に根付いて土地を耕し、子孫を増やしていくような農耕民族ではないんだろうな。

僕はどっちだろ。たぶん、農耕民族ではない。獲物を狩り積極的に生きていく狩猟民族タイプでもない。遊牧民族かなあ。雲と共にあちこちへ流れていくような。

と、ぽんやり考えていると、

「お前もいろんなところ、行つとけよ。自由が利くうちにな。」

寂しそうに彼が言うので、

「人生終わったような顔しないでくださいよ。落ち着いた生活は生

活で、幸せな部分もあると思いますよ。」「

精一杯慰めてみた。彼は首を傾げて考えこんだので、つい言つてしまつた。

「…後悔してるんですか?」「

すると彼は、ふつとカウンターの端に手を背けて、

「…」こんなこと言つと、女らしいんだが…。いまだに気持ちの整理がつかんのだ。お前が望んでるみたいに、翻訳で食べていけるようにもつと勉強もしたかったし、自分が決めた道へ進みたかった。でも、今は嫁さんと、産まれて来る子供を食べさせしていくことが先決だからT社に入社した。安定している企業だし、給料もいい。でも、自分がやりたかったことは違う。どこまで自分が出来るか、理想を追い求めたかったんだ。ばかみたいだろ。自分で時いた種なんだ。でも潔くないんだな。本当は違う人生があつたのかなあなんて、あれこれ考えてしまうんだ。こないだ嫁さんが流産しかかった時も、俺はおろおろするだけで、どうしていいかわからなかつたんだ。向こうの母親とか来て、てきぱき入院の手続きをして、身の回りの物を持つて来て。俺は動転していて、あいつの母親に言わされることをするだけで。こんなで父親になれるんかなあつて、自信なくなつてきたんだ。だからお前に会えなかつた。落ち込んでたからね。こんな俺を見られたくないなかつたんだ。」「

そう言つた後、

「でも、会つてこんな愚痴を聞かせているんじゃ話にならないよな。」

がつくりきている彼が急に弱々しく見えた。

「いろんなことが急にありますよ。誰だつて戸惑います。急に人生の方向先を変えられたみたいに思つて。僕だつて、今、彼女が妊娠したらどうするかわかんないですよ。」「

「避妊は?」「

「もちろん、していますよ。」「

とは言つたものの、セックസ്ഡิ-cornerがまだキスすらしてない相手だけだ。里佳子ちゃんは。

「だよな。俺が悪いんだ。気をつけていたつもりだつたんだけど。つもりじやいかんよな。本当に人を好きになるつていうのがよくわからんんだ。いろんな女の子とつきあつた。たぶん、お前も耳に入っているかもしけんが、複数の女の子とつきあつていた。乃理子はそのうちのひとりだ。でも、俺を一度も責めん。一度も責めたことがない。自分以外の女と同時につき合つていたことを気づいても。いつも控えめで、しつかりしていて優しい。子供が出来たつて聞いてうるたえたけど、男として責任を取るのが当たり前だつて思つて。それで幸せだと思った。あいつは可愛い。だけど、今更になつて本当は自信がない。あいつを本当に愛してゐるのかわからない。ちゃんとやつていけるのが、自信がないんだ。」

「この人でもこんな怯えたような自信のない表情をするんだ。それよりも何故僕にこんな弱い所を見せるんだ。」

「僕はまだ人生なんてわかつていないし、子供だし。うまいこと言えないけど、先輩がしんどいなあと思つてることを僕に話すことでも、少しでもそのしんどさを和らげたり、悩みが解決出来そうになつたりするなら、僕はいつでも聞きたいと思ひます。そのくらいしか言えないけど。」

「でも、自分で蒔いた種だから、自分の問題は自分自身で解決するしかないんだ。わかつてゐる。」

「何かの小説に書いてありました。自分で解決出来ないなら我慢するしかないって。」

「うん。でも我慢する人生はつらいな。」

「そうですよね。」

「今までいろんな悩みや問題があつたけど、解決できる方法はありますて信じていた。し、そして解決してきた。大概のことは。でも、解決の方法が無い問題つていうのがあるんかなと、最近は思つよ。」

「先輩にしては弱気ですね。でも、今はそう思つても、例えば時間が経つたり、周りの状況が変わつたり、自分の気持ちの持ち方が変わつたりとか変化があると、その問題に対しても何か変化があるんじゃないかなあ。そして、ある口当然ふつと解決の糸口が発見出来たりとか。」

「やっぱ、お前クールだわ。」

「えつ。何で。」

「だつて客観的で理論的、冷静だもん。」

「僕だつて取り乱す時くらいありますよ。たぶん、自分のことでないから客観的に見てるだけですよ。僕もあなたの立場だったら、悩むかも。」

「そうかなあ。」

「ま、元気出してくださいよ。」

彼を元気付けるようにわざと大きな声で、大将にお代わりをオーダーした。

「すまんなあ。後輩のお前にこんな愚痴言つてさ。」

「別に。僕でよかつたら、何時でも。」

そして、思い切つて言つてみた。

「僕、嬉しいですよ。そういう心の内を話してくれるの。信用されてるのかなつて。」

本音だつた。彼が心の内を話してくれることが素直に嬉しいと思つた。

すると、彼はちょっと恥ずかしそうに

「何だかなあ。よくわからんがお前には素直にいろんなことを話せるような気がするんだ。」

それから僕たちはいろんな話しうしながら、かなり飲んだ。焼酎は飲みやすくてこれならいくらでも飲めそうな気がした。頭も痛くならないし、気分も悪くならなかつた。先輩もかなり飲んでいた。元々飲める人なので、どのくらい飲んでも大丈夫なのかわからなかつた。

つた。彼も自分の限界がまだ先だと思って、次々にお代わりをした。そつこつするうちに時計の針も1-2時を回ったし、それに、僕よりも彼の方がかなり泥酔してたので、自分がしつかりしているうちに送つて行こうと思い店を後にした。

店を出ると、又雪がちらほらしてきたので、電車で帰るのは止めることにした。

本当のことを言つと僕もこんなに飲んだのは初めてで、足元がふらついているのが自分でわかつてたから。無論、先輩は僕より酔つていた。お前に迷惑かけん程度に飲むとは言つたくせに、結局この間送つていつた時より酔つていいように見えた。

仕方ない。先輩に肩を貸しながらタクシーを拾い、彼のアパートの場所を告げた。

タクシーに乗り込むと、

「隆博。俺のどこでもうちょっと飲み直さないか？」

呂律の回りない声で言つので、

「まだ飲むんですか？」

僕も途切れ途切れに意識が飛ぶのを意識していたので、これ以上飲んだらまずいなと思っていた。

「いいじゃないか。乃理子は実家へ帰つているし、誰も居ないから。

」
座席に身を沈めながら、拗ねた子供のような口調で、僕の顔色を伺う彼。

「しようがないですね。」

それで、僕は彼のアパートでタクシーと一緒に降り、少し休んだら帰るつもりで部屋へあがつた。

彼の部屋は「どちらまいと片付いていて、ベージュを基本にしたインテリアでまとめてあった。部屋の隅の方に彼女が使っているらしいちょっととしたドレスサーがあつて、ああ、女性と一緒に住んでいるんだなあと、実感した。

「いい部屋ですね。きちんと片付いてるし。」

「そうか。」

「ひとりでは広いでしょ。」

「そうだなあ、2人で住んでも大丈夫なくらいだよな。」

聞いた話では彼の父親はある商社の重役で、その会社の名前は聞けば皆が知っているような有名な会社だ。家も裕福らしい。彼の父親が借りたのだろう。いいとこの坊ちゃんだな、と思つていると、「まあ、どのみち春までだけだ。就職したら引っ越す。又住む家を探さないと。」

「東京でしたよね。」

「うん。」

そうなんだ。春になつたら東京へ行つてしまつんだ。もつあと僅かか。この人と会えるのも。ちょっとしんみりした気分になつたけど、そんなこと考えても仕方ない。

気を取り直して、僕らはソファの上にあぐらをかき、冷蔵庫から取り出したビールを飲んだ。しゃべりながらも時折ふつと、意識が飛ぶ。眠くて意識が朦朧とする。自分が何をしゃべっているのかよくわからない。彼の声がずっと遠くで聞こえるような気がする。これはまずいな。

帰れなくなると思い、

「もうそろそろ帰ります。」

ソファから立ち上がった。

「泊まつていけば？」

「いえ、まだタクシーも拾えるだろうじ。」

そう答えたが、自分の声が水の底から発せられた音のよにぐぐもって聞こえた。同時に部屋の隅にあるダウンライトの仄暗い明かりが揺らめいて、形を失くした。

自分の近くに誰かの寝息を感じた。

（誰だろう？）

薄つすらと目を開けて周りを見ると、見覚えのないベージュがかつたようなモスグリーンの色が目に入った。それが彼の家のソファの色だとわかるまでに、少しの間が必要だった。

（あ、そうか。寝ちゃったんだ。）

ふたりでいい気になつて浴びるように酒を飲んだ。酔つ払つてしまい、気づかぬうちにふたりして眠り込んでしまつたらしい。頭を起すと、ジーっと耳鳴りがしたが、それでもソファの上に起き上がると、だんだん意識がはつきりしてきた。

居間のライトは全部消してあり、小さな足元のダウンライトがひとつだけポツンと点いていた。隣接する対面式のダイニングキッチンの明かりは点いていたから、その明かりで先輩の姿を確認することができた。ソファの下の床でうつ伏せになつて眠つている。横向きに顔をこちらに向けて。

彼の側に行き、声をかけてみる。

「先輩。」

返事がない。

何とはなしに、彼の顔に目を向けてみる。薄暗い明かりの中で、長く伸ばした前髪が崩れて目のかかっているのが見えた。彫の深いはつきりとした目鼻立ち。薄い唇。ふと、綺麗な人だなどと思つてしまふ。そう、彫刻みたいだ。こうやって動かすにいると。だけど、じつと彼の顔を見ていても仕方ない。ソファの上に置いてあつた毛布を彼の肩に掛けた。どこかでタクシーでも捕まえて帰

るか。

彼の耳元に口を寄せて、

「先輩。僕帰りますね。玄関の鍵、かけて。」

「うん。」

返事が聞こえた。なんだ、起きているのか。大丈夫だな。
そう思い、彼の側から立ち上がるとしたら、ふいに床について
いた手首を握られた。

「隆博。」

眠つたまま、いや、目を閉じたまま、左手で僕の右手首を掴み僕
の名前を呼んだ。

「「めん、このまま聞いてくれ。」

（何だろ？）

握られた手首が熱かつた。彼の手の体温だ。
先輩の声はもう酔つてなんかいなかつた。

「好きなんだ。」

僕は耳を疑つた。

今、何て？

彼は僕の手首を掴んだまま、目を開けずにもう一度繰り返した。

「お前のことが好きなんだ。」

咄嗟にその言葉の持つ意味がわからず、彼が寝転んでいるカーペ
ットの幾何学模様を凝視した。息もせず。

「あの時、乃理子と間違えたんじゃない。お前だとわかつていた。
その言葉で瞬時に僕はすべてを理解した。

「まさか、だつて。」

僕の声に反応するかのように起き上がつた彼と目が合つた。

ダウンライトのぼんやりとした明かりに照らされた彼の顔は、僕
の知つている先輩の顔ではなかつた。

そう、弱々しく、力を出し切つてゴールに倒れこんだようなラン
ナーのように、そんなすべて自分をさらけ出し、疲れ切つたような。

ずっとこのことを彼は考えながら、僕と接していたんだろうか。気がつかなかつた。いつも見ている、強気で快活とした自信に満ちた彼の表情はすべて消えていた。

僕が何か言葉を発するのを待つてゐる。だけど、何も言葉が出てこない。どうしよう。

彼の目を見ていられなくて、カーペットに目を落とした。それを合図にするかのよう、彼が僕の肩をつかみ、ゆっくりと顔を近づけてきた。僕は拒めなかつた。動悸が激しくなる。耳のすぐ側に心臓が位置しているように思えた。そのくらい自分の心臓が音を立て波打つのがわかつた。柔らかい唇の感触がした。彼の前髪が自分の額に触れるのを感じた。僕は動けなかつた。

だつて、あんな目を初めて見た。真つ直ぐな視線。「冗談とかそんなじやない。自分の心の動きに怯えながら、それでもそれを隠そうとせず、僕に真つ直ぐにぶつけてきた。それがわかつたから。だから。

どのくらいの時間だつたんだろう。とても長い時間に思えた。こんな悲しいせつないようなキスを受けたのは初めてだ。でも、何か言わないと。混乱した頭で必死に考えた。何て言つたらいいのか。確かに憧れていた先輩だし、彼と一緒にいるのはとても楽しい。だけど。

「でも・・先輩にはもうすぐ・・」

乃理子さんがいるんだ。もうすぐ赤ちゃんだつて生まれる。そんな状況で、どうして僕のことが好きだなんて。きっと混乱してるんだ。背負わなければならぬ責任に怯えているんだ。僕は咄嗟にそう思つた。彼の表情が暗くてよく見えなかつた。だけど、それがかえつて僕をほつとさせた。

彼の返事を待たずに部屋を飛びだした。その場にいるのがいたたまれなくて。

真夜中の3時を過ぎていた。

真夜中の国道は閑散としていて、時折、荷物を運ぶ長距離トラックが僕の脇をすり抜けていった。タクシーなど一台も通っていなかつた。だけど、タクシーに乗ることを考えてなぞいなかつた。

こうやって歩いて帰ろう。混乱した頭を整理したかつた。歩きながら、僕は彼の言ったことを何回も復唱した。僕はそれにどう答えたらしいのだろう。答えるべきなんだろつか。

「好きなんだ。」

そう言つた彼の表情を思い出そうとした。薄暗い明かりの下の薄い形の良い唇を思い浮かべた。

あの雪が降つた夜。携帯から彼に電話した。会いたいと思つたあの気持。

あれは何だつたんだろう。自分の不可思議な説明のつかない彼への気持と、今聞いた告白を線上に並べてみた。

でも彼の僕への好きという気持と、僕が彼を先輩として慕う気持は違う。そう思つた。

だけど、聞いてしまつた後はもう元へは戻れない。

あの一言で、僕と彼の間には大きな川の流れが出来た。対岸同士に僕らはそれぞれひとりずつポツンと佇む。今まで同じ川のほとりを歩いていた。それも彼が東京へ行くまでの間の短い時間だとしても。

だけど、あの一言を僕は聞いてしまつた。もう戻れない。あの川を越えるのか、もつこまま対岸に位置したまま、僕らは離れていくんだろうか。

寂しいと思つた。だけど、僕はあの川を渡れない。直感的に渡つてはいけないと思つた。胸に鉛の塊を落とし込まれたように気が重かつた。胸の辺りに息苦しさを感じた。

見上げると、冬の月が青く冴え冴えと光つていた。

それから数日。その晩の事が頭から離れず、ぼんやりとした毎日を送っていた。学校には通っていたが、前のように集中して講義を聞くことも出来ず、気がつくと教授の話は頭の上を通り過ぎていくだけで、僕の心は違うことに支配されていた。

里佳子ちゃんからメールが入っていた。彼女に会う気になれなかつた。あの日、デートも中断したままで、悪いとは思いながら曖昧な返事を返すしか出来なかつた。

数日後、目が覚めた時にふと思いついた。

京都へ行つてみようか。何故、京都なのかよくわからないが、とにかく日常から逃れたかった。静かな場所へ行きたかった。

それで、地下鉄に乗り、バスを乗り継いで、新幹線が停まる駅まで向かつた。緑の窓口で切符を買い、発車まで時間があるのを確認すると、駅のロータリーの真前にあるスタバでコーヒーを買い、発車までの時間を潰すことにして。ガラス窓越しに行きかう人々を眺めながら時間を過ごしていくと、発車の時間が近づいてきたので、ホームに立ち、京都行きの新幹線が到着するのを待つた。平日なので、人は少ない。出張らしきサラリーマンの姿、定年でリタイアした感じの夫婦連れや、数人の中年女性のグループ。ホームの真ん中に陣取つてはしゃぐおばさんたちの群れは観光旅行のようだ。楽しそうにどこを見て回るか、あれこれしゃべつてはしゃいでいる。僕はそんな人たちをぼんやり見ていた。

僕はどこへ行くんだろう。京都か。ひさしぶりだな。里佳子ちゃんが京都で舞妓に変身してみたいと言つてたことを思い出した。でも、今の僕には、彼女に会うことがひどく現実味から離れたことのよつに思えた。

ホームに新幹線が到着する。僕は自分の席番を確認し、腰を下ろ

した。新幹線が動き出し、景色がゆっくりと流れしていく。そして、時速を上げ始めた新幹線のスピードに伴い、町並みが、そして町並みを過ぎると、延々と続く田んぼや山の景色がものすごい速さで後方へ飛び去った。僕は窓からその景色を眺めていたが、そのうち心地よい眠気に襲われた。

「次は京都です。」

アナウンスが入るまでよだれを垂らさんばかりに眠りこけていた。

京都へ着いた。いつ来た以来だろう。京都駅はかなり変わった。広く近代的に変貌を遂げ、駅には何件もの土産物屋が入り、ポルタやアバンティなどのデパートが駅ビルに居を構え、何連にも連なるエスカレーターが観光客を運んでいた。僕はホテルグランヴィア京都の脇を通り過ぎ、エスカレーターが上がりきった所にある観光案内所へ飛び込んだ。

さて、どこへ行こう。中でパンフレットや観光マップを何枚か選び取っていると、ふと頭に浮かんだことがあった。

芙美のことだ。芙美と京都へ来たことがある。

高校1年生の春休み。芙美と、芙美と仲の良い加奈子に美晴。それから僕と、同じクラスで仲の良かつた聰に健一。6人で京都へ出かけたことがあった。きっかけは何だったんだろう。よく思い出せないが、仲の良い僕たちは、春休みどつか遊びに行こう、遠出してなんていう話をしていたんだろう。

あの時、僕たちはどこを回ったんだっけ。あの時はまず、清水寺へ。それから、産寧坂から高台寺へと続く道を土産物屋などを見て歩き、円山公園、八坂神社にお参りした。そして、嵐山、嵯峨野。渡月橋を行き交う人たちを見ながら、桂川沿いのベンチに座り話をした。芙美と。何を話していたのだったか。いや、よく覚えている。芙美が言ったことを。

あの時の英美と過ごした時間がまるで昨日のように思い出され、僕は急にどうしようもなくあの渡月橋が見えるあの場所に行きたくてたまらなくなつた。

すぐに観光案内所を出て、嵯峨野線の電車に乗り込んだ。バスを使わなかつたのは市内の渋滞に巻き込まれるのが嫌だつたからだ。電車なら渋滞に巻き込まれることもなく、30分ほど後には、僕をあの場所に連れて行つてくれるだらう。

嵐山の駅を降りると、平日だというのに、通りは観光客でいっぱいだつた。蟻のようにうごめく観光客に紛れながら渡月橋の方へと歩いていく。桂川沿いに土産物屋や食べ物屋などがびつしりと軒を連ねていて、大勢の観光客がひしめいていた。カメラを片手に記念撮影をする人、路上でアイスクリームや団子などを食べて雑談をしている若者、団体旅行で観光バスに乗ってきたと思われる中の団体やら。大堰川の上にかかる渡月橋の上では記念撮影する人たちで一杯だつた。シャッターを切る前を邪魔しないように橋を渡ると、対岸へ降りてみた。

その辺り一帯が中ノ島公園だ。出店が出ており、平日とはいえ結構な人が出て賑わつていて、川沿いにベンチが並び休憩できるようなスペースが取つてある。ペットボトルのお茶を買い、そのひとつに座り橋を眺めると、ここが一番の撮影スポットに思えた。嵯峨野の方へ観光に行くこともちらりと頭に浮かんだが、別に観光目的で来たのではない。日常から離れたかった。非日常の空間に自分の身を置きたかった。周りにはカップルや家族連れの観光客や、ひとり旅と思われる人たちもいた。渡月橋の方へ向かつてキャンバスを広げ、絵を描いている人もいる。その人たちを何の気なしに眺めていると、頭の中が空白になつていくのを感じる。

誰も僕を知らない。この街では僕は異邦人だ。誰も僕を見ない。誰も僕に気を止めない。それがひどく心地良かつた。何人の観光

客が僕の後ろを通りていった。川の流れを見つめた。「まあ」とした雑念が一緒に流れていけばいいと思った。誰も僕の心中に入つて欲しくなかつた。

又、芙美のことと思つた。あの時、ここにベンチに座り、やはり休憩した。芙美は僕の隣に座り、今日は乐しかつたね。と言つた。もう、今日は傾きかけ、僕らは帰り支度をしなければならない時間になつていた。

そうだね、乐しかつたね。と、僕は返した。芙美はあれこれと今日回つた観光地のことなどを話していたが、思い切つたように聞いて欲しいことがあるのだと、僕に言つた。

「何?」

隣に座つた彼女の顔を除くと、扶美は言いにくそうに少し黙つた。間があつて、その間隣で、今みたいにペットボトルのお茶かジュースを飲みながら彼女が口を開くのを待つていた。

「隆博くん。あの、聰くんのことどう思う?」

何故、芙美が聰のことを聞くのか疑問に思つた。それでも、

「いいやつだよ。明るいしリーダーシップもあるし、スポーツも出来るし。」と、答えた。

「何で?」

そう返すと、彼女は思い切つたように一気にしゃべり始めた。内容はやつにつき合つて欲しいと言つられて、どうしようかと迷つているところだった。

僕はその時、胃の奥がぎゅっと痛くなるような感触に襲われた。確かに動搖していた。冷静に返さなければと思うのだが、言葉がすぐに出ない。やつとの思いで口を開いたが、自分の声がうわずつているのを感じた。

「それで、返事は?」

「聰くんは答えが出るまで待つていると。」

（まだか。まだ返事していないんだ。）

その時の彼女の表情を忘れることが出来ない。目を見開いて僕をじっと見た。答えを探るように。助けを求める溺れかけた人のように、彼女は僕に必死で語りかけた。何も言わず、その視線だけで。一瞬の間があった。僕は芙美が好きだった。他のやつになんか。でも、ついて出た言葉は。

「いいんじゃないか。」

何故そんなことを言つたのかわからなかつた。自分でも驚いた。本当は違う。芙美を他のヤツに渡すのは嫌だつた。今がチャンスだつたのに。自分も告白して、芙美につき合あうつて言えるチャンスだつたのに。でも、もう発した言葉は戻らない。その時の芙美は一瞬泣きそうな顔をしたかに見えたが、すぐににこりと笑つて

「そうね。いい人よね。」と、言つた。

それから芙美はそのことについては触れず、僕らは帰路についた。それから、1ヶ月ほど経つて、2人がつき合いだしたことを見た。噂しているのを耳にした。

それから何年か経つて、今思い起こすと、僕は波風を立てる」とを避けたのだ。6人は仲の良い友人同士だったし、聰も健二も一番の友達だった。芙美とは中学校も一緒に、仲良くしたのは高校へ入つてからだったけど、僕は中学の頃から芙美がずっと気になっていた。図書館で頻繁に会うようになって、仲良く話すようになり、本当は何度か告白しようと思つたけど、その関係を壊すことが怖かつた。もし、断られたら友達でもいられなくなる。そのうち同じクラスで6人が自然に仲の良いグループになるのは、そんなに時間がかかることではなかつた。6人で楽しい日々を過ごした。聰が芙美を好きになつてもそれは自然な流れだつた。

でも、僕は何かを犠牲にしてまでも本当に欲しいものを欲しいと言えなかつたのだ。後悔をしたけど遅かつた。あの時はいろんなことがはつきり自分の心の中で整理が出来なかつたけど、今になつてひとつだけ言えることは、僕は自分の心に嘘をついたんだ。それは真実だ。そして、自分に勇気がなかつたせいで、僕は取り返しのつかない大きなものを失くしてしまつた。

何故、あの時あんな言葉が口をついて出たんだろう。どうして自分の心を隠したのだろう。

そんなことを思い出しながら、いろんなことを考えた。自分が目を背けようとしたもの。そして、背けようとしているもの。いろんなことをそつなくこなそうとしているのは自分が臆病だからだ。失敗した時に、それによって失うものを考えてしまうんだ。そして、自分の心に嘘をついて、後で後悔する。

もう、時間は戻つてこない。今、あの時と同じように、この嵯峨野に来て、芙美と座つたベンチに座り、あの時と同じように桂川の流れを眺め、渡月橋をバックにそびえる岩田山を眺めている。でも、

芙美はもういない。もう一度あの時は戻つてこない。

どのくらい、そこでぼんやりしていたのだろう。冬の日は短い。夕闇が押し寄せ、観光客たちが帰途に着き始めた。風が冷たい。

そろそろ帰ろう。そう思つた時に、先輩の顔が浮かんだ。

そのことを考えまいと、あの人のことを考えまいと、自分の頭から追い出そうとすればするほど、その問題が自分の心の中にインクの染みのよう広がつていった。

「好きだ」って言われた。僕にどうしろというんだ。

試験前に勉強を見ててくれたのも、飲みに連れて行つてくれたのも、僕に特別な感情を持っていたからなのか。何故だろう。彼女と籍を入れるばかりなのに。

いつから?ずっと前から?それとも。

彼の眼差し、彼の行動、仕草、いろんなものを思い浮かべた。特別なそぶりはなかったと思う。僕は何も気がつかなかつた。だけど、思い返しても、あのキスを思い出しても、不思議に僕は嫌悪感を感じることがなかつた。それはどうしてだろう。

あの帰り道、衝動的に彼に会いたいと思つた。あの感情は何なんだろう。同時に脳裏に浮かんだ扶美のこととどう繋がるんだろう。いくら考えてもわからなかつた。

いや、答えはもうどこかで出ているのかもしれないけど。

僕がまだ気がつかないだけで。

ただあの夜の、彼の行き場をなくした子供のような寂しげな表情が忘れられない。

夕暮れの風に追い立てられるようにベンチから立ち上がり、桂川沿いを歩いていると、ふと目に入ったものがあった。

(あ、あれ。)

土産物屋の軒先に並んでいた京紅だった。

あの時芙美が欲しがっていた物。

清水寺周辺で、土産物屋を覗いてぶらぶらしていた時、ある一軒の店で、芙美が貝殻に入つた紅、京紅を欲しそうに見ていた。僕が「何、それ。」と聞くと、紅、よみは口紅なのだと説明した。

あの頃、高校生でも化粧している子はたくさんいて、マスカラを塗り、アイシャドウや口紅を塗っていた。学校では校則が厳しかったので、あまり学校内ではする子はいなかつたが、放課後や休みの日には化粧をして出かける子が多かつた。加奈子もあの日は化粧をしているみたいで、唇がピンク色に光つていたつけ。芙美は化粧などしたことがないらしく、素朴で他の同級生から見たら地味な方だろう。だから、芙美が紅を欲しいなどと言つのが、なんだか意外だつた。

「買つたら」と言つと、「うものは買つて欲しいのだと」言つて僕を見た。僕は「買つてやる」と、喉本まで言葉が出かかつたが、何故か恥ずかしくて、「ふうん。そんなもんなの。」と言つたきりだつた。すぐに近くにいた聴たちが來たので、その話はそこで終わつてしまつたが。

僕は京紅の店に入つた。店内には漆黒に塗られた貝殻に詰められた京紅が並んでいた。貝殻には桔梗や藤の花などの絵柄が描かれており、その多様さに目を奪われた。

何故かわからないが、その可憐な花の形が気に入り、撫子の花が描かれた京紅を手に取つた。お店の人には「これ、下さい。」と言つと、「彼女にお土産ですか。」愛想の良い笑顔を向けられ、包装しけたので、簡単でいいと手を振つた。

僕はその小さな箱を持って京都を後にした。

携帯の着信を見る。その後、メールをチェックする。受信トレイには里佳子ちゃんからのメッセージがいくつか残つていた。

（何もないか。）

僕が気にしてるのは、先輩からの連絡なのだと頭のどこかでわかつていた。あれから彼からの連絡はぱつたり止んだままだつた。しようがないか。僕から連絡するわけにもいかない。彼の言ったことの意味をまだ自分の中で反復している毎日だからだ。何故か気がつくとあの晩の事ばかりを考えている。里佳子ちゃんのメールに返事もしないなんて僕はどうかしている。

電車がいつものホームに滑り込む。ああ、ぎりぎりだ。走らないと最初の授業に間に合わない。気は乗らないが、単位を落とすわけには行かない。無理やりにでも足を学内に運ぶ。

構内へ入ると、賑やかに談笑している同級生たちが目に入った。皆が楽しそうに見えた。何の悩みもないように屈託がない。数人の同級生が姿を見て、声をかけてくれた。適当に話を合わせながらも、何とはなくみんなの輪には入りづらいような気がした。

講義室に入ると裕樹と健一が僕を見かけて、おう、久しぶり。授業の後飲みに行こうと誘われた。あまり断つて自分の殻に閉じこもるのもよくないと気がついていたから、素直に2人の誘いに応じた。授業が終わって、よく行く居酒屋へ行つてしこたま飲んだ。僕が少々は飲めるようになつたことを2人は驚き、喜んだ。これから飲みに行くのが楽しくなるなど、2人ははしゃぎ、僕に酒をどんどん勧めた。僕は気が紛れた。2人がいてくれたことに感謝した。彼らと楽しくはしゃぎ、それでも、どこか自分は2人とは違うんだとう思いが胸の中に染みのようにはりついているような気がした。それは彼の告白を聞いてしまったからなのかもしねれない。

「おおきに。また飲もうな。」

健一と裕樹が駅の改札に消えていく姿に手を振つた。

二日酔いだな。まだ頭が痛む。

あれから僕のアパートで、3人して飲んだ。あいつらに付き合つていると、際限がない。もう帰れよ、と言つて追い返すと、何言つ

てんだ。今夜は呑むぞと、人んちの冷蔵庫からビールを出すわ出すわ。あいつらいつたい何なんだ。

でも、僕が元気ないのをあいつらは感じ取っている。だから無理にでも飲ませて気を紛らわせよつとしてくれてるのだとわかつてた。

結局明け方近くまで飲んで、寝近くまで寝て、良いが醒めたところであいつらを車で駅まで送つていつた。

さて、帰るか。

駅前に横付けにした車に乗り込むと、足に何かが当たる感触がわった。屈んで足元を覗き込むと、ブレーーキパットの下に小さな箱が落ちていた。

（何だろ？）

拾つて手にとつてみると、京都へ行つた時に買い求めた京紅の小さな箱だつた。

（あ、こんなところに。）

あの時着ていつたジャケットのポケットに入れて帰つた。部屋に戻つてポケットを探つても箱がないので、どこかで落としたのかと諦めていた。きっとポケットから転げ落ちたままで、気がつかないでいたのだ。

（そうだ。これ渡さなきや。）

ふいに思いついて、そのまま車を走らせる。

目的地は、芙美の住んでいた町だ。

さつき、京紅の箱を見て思つたんだ。今田いそ、芙美に会いに行ひつひつて。

国道を20分ほど北上する。大きなドライブスルーの看板が目立つマクドナルドの交差点を県道へ折れると、すぐに駅前のターミナルが見えてくる。改札の前にはタクシーやバスが入ってくる円形のターミナルがあつて、大きな噴水がある。この駅のもつとも目立つ目印だ。その噴水を左に折れて、商店街を抜けると10分もせずにすぐにその場所へたどり着いた。街中には車が良く通る街道なのに、一歩中に入るとその喧騒が嘘のように静かだ。その境内には誰もいない。お堂があり、右手には住職の住まいがあり、左手に入つていくと墓地がある。

そう、僕は芙美の墓に参りに来たのだ。

久しぶりに来たけど、墓の場所はしつかり覚えている。僕はある頃、何度ここへ来ただろう。芙美の墓にはいつも綺麗な花が手向けられ、きちんと掃除が行き届いている。おばさんは毎日お参りに来ているのだろう。芙美の家はここから歩いて5分ほどの所にある。僕はその小林家先祖代々の墓と刻まれた墓の前にしゃがみ、持つてきた京紅の箱を置いた。

「芙美、今頃ごめんな。あの時買つてやればよかつたのに。」

そう、話しかけてみる。頭をなでるように墓石をなでてみる。墓

石の側面に刻まれた文字を手でなぞつてみる。

（俗名 小林芙美 享年17歳）

墓石は冷たく、その刻まれた文字は何の感触も示さない。でも、僕はここに触れずにはいられない。来たときはいつもそうする。あの頃のことを思い出してみる。彼女がこの世を去つて間もない頃。ここへ来て、どのくらいの時間、ぼんやりしていただろう。あの時のこと思い出すと、何ともいえない気持ちになる。背中から冷水を浴びせられるような、ぞくぞくとした寒氣にも似た感触に全身を包

まれていた。いつも感じた心もとない不安。何ともいえない気持ちだ。今でもはつきり覚えている。

あの日、僕は塾が遅くなり、家にたどり着いて夕飯を食べると自室で眠り込んでしまった。母親から電話だと起こされ、時計を見ると10時を過ぎていた。

（こんな時間に誰だろう。）

いぶかしげに受話器を取ると加奈子だった。

「隆博くん。」

言つたきり、泣き出してしまい後が続かない。何かあったのかと、問い合わせてもしゃくりあげるだけでらちがあかない。何かあったには違いないけど、それは予想もしないことだった。

「落ち着いて聞いて。」

「落ち着いてるよ。何があつた？」

「ホントに落ち着いて聞いてね。」

「ああ。」

「……」

「何？」

加奈子の声が震えていた。

「芙美が……」

「芙美に何かあつたのか？」

「芙美が亡くなつたわ。」

その瞬間、頭の思考回路がストップした。何かショックなことがあつた時、人はよく頭が真つ白になるというが、あれがそうだったのか。真つ白だった。何も考えられなかつた。どこか遠いところでの自分の声がした。

「死んだ？」

「そう。」

急に感情が復活した。腹の底から感情が沸きあがつて來た。

「嘘だ！」

「嘘なんかじゃないわ！」

受話器の向こうで加奈子が金切り声を上げ、号泣した。僕はそれをぼんやり聞いていた。その後のことはあまり覚えていない。何故か、次の記憶は芙美の葬式だった。芙美の家に行くと、クラスの皆が来ていて、あちこちで泣いている声がしていた。

今でも覚えている。こんなことを。

焼香をし、花を彼女の棺に入れた。僕はその花を芙美の左の脇腹の辺に置いたことを覚えている。きれいな顔だった。眠っているようだ。でも、その血の氣のない蠍人形のような青白い顔はまさしく死人の顔だった。白い菊やカーネーションなどが顔の周りを縁取り、僕は彼女の顔を見た。どつちの頬だつただろう。少し青いあざが出来ていて、それが事故死なのだという事実を物語つていた。

その葬儀の席にほうけたように聰が座っていた。むちうちの人がするおおきなカラーを首に巻き、頬にガーゼを当て、目の上が青く腫れていた。僕は聰を見ることが出来なかつた。目をそらし、その場を離れた。

出棺の時、僕は祈つた。何を。芙美、もし僕が死ぬ時、僕を覚えていてくれたら、迎えに来て欲しい。そう、祈つた。これで、最後なんて思いたくなかった。もう一度会いたかった。この世ではもう会えないなら、せめてあの世で。自分が死ぬとき、芙美にもう一度会いたかった。自分がおじいさんになつていたら芙美は僕だとわかるだろうか。きっと、わかるよな。

出棺の後、事故現場へ花を手向けようと、クラスの何人かで事故現場へ向かおうとした。加奈子と美晴が泣き崩れて動けないのを、クラスの女の子たち2、3人が抱えようとしていたので、僕は加奈子を、健二は美晴をそれぞれ抱き上げた。

「つらいけど、もつとつらいのはお母さんやお父さんたちだ。しつかりしろ。泣くんならお母さんたちの見えないところで泣こう。」

彼女たちは僕を見て、健気に首を大きく何度も縦に振った。

その時、聰が僕たちに近づいてきた。そして、僕たちの前で立ち止まると、頭を下げた。膝まで届くくらい体を折り曲げて。僕らはそれを見たけど、その場には加奈子と美晴、健一、それに他の芙美の友達やら10人くらいの人気がいたけど、誰ひとり、もちろん僕も、誰も聰に声をかけてやれなかつた。いたたまれなかつた。どうすることも出来なかつた。口を開こうと思つたけど、声が出なかつた。その場に僕らは立ち尽くした。

その後、花を買って、加奈子と美晴、健一の4人で、その現場へ行つた。堤防沿いの道で、結構見通しも良く走りやすい道だつた。その場所は、市内へ向かう道と、川を渡る橋が交差する交差点で信号がついている。

話によると、あの日。聰はバイクの後ろに芙美を乗せ、市内へ向かつていて。そんなにスピードが出ていたわけでもなかつたらしい。その信号は点滅信号で、聰たちが走つていた道が優先だつた。黄色の点滅の信号を確認し、交差点に差し掛かる。それを川向こうから橋を渡つてきた車が信号を無視して突つ込んできたのだ。おばさんが病院へ走つていつた時には、すでに芙美の意識はなかつた。即死だつたらしい。

聰は奇跡的に軽症ですんだ。しかし、芙美はもう戻らない。

夏の日は傾きかけていた。うだるような暑さも川を渡る風に冷やされ、心地良い風が吹いていた。僕らはその場所に花を手向けると、手を合わせた。

それから僕たち4人は、そう、あの噴水の前で待ち合わせて、週命日になると彼女の家に行つた。仏前に参り、芙美が好きだつたシュークリームやチーズケーキを買つていつて供えた。仏壇には大きな芙美の遺影が飾られ笑つていた。

いつ頃の写真だろう。高校の制服を着ている。おばさんの話によ

ればあまりにも急なことだったので、遺影に使う写真を選ぶ余裕がなく、高校の入学式に撮った写真を引き伸ばしたそうだ。僕はその写真を見るたび、（おばさんたちもきつい冗談だよな。まるで死んだ人みたいじゃないか。）そう、思うのだが、その次の瞬間、ああ、本当のことなんだ。芙美は死んでしまったんだ。と、確認するのだ。次の瞬間、うつかり涙が出そうになるのをぐつとこらえる。

そして、おばさんはお茶やお菓子を出してくれ、彼女が生きていたときの話、家ではこんな子だったとか、こんなものを集めていたとか、兄弟とはこんなふうに遊んだりしていたとか、そんな話をしてくれる。その時の僕らにはそれ以上の慰めがあつただろうか。芙美とどこか面影が似ているおばさんと彼女の話をする。それは悲しいことだけど、どこか優しい時間だった。

彼女には下に、弟と妹と兄弟が4人いて、そのすぐ下の妹が年子で彼女にそっくりだった。家に行くとその妹が顔を出す。その子を見るとなんて似ているのかと感心し、でも、芙美ではないのだと思うと、砂を噛むようなむなしい思いになる。

お参りに彼女の家に行つても、聰の話は出なかつた。誰もが彼の名前を口にすることはなかつた。聰のつらい気持ちは僕らも容易に想像出来たが、僕は彼を慰めることは出来なかつた。芙美の葬式が済んで、だいぶ経つてから彼は学校に出来たが、事故の後の傷が痛々しく、僕は差しさわりのない話しか出来なかつた。事故のこと、芙美のことはいつさい触れなかつた。

でも、事実、このことで僕たちの間には埋めようとしても埋めることの出来ない溝が出来たのは避けようのないことだつた。実際、芙美は死んでしまつた。彼女は永久に僕らの前から姿を消したのだ。その事実は拭い去ろうとしても拭い去ることは出来ない。聰は一緒に事故に遭つて芙美だけが死んでしまつたことを、ひどく後悔していた。

自分がバイクに乗せていたから。あの日、あの道を通りなければよかつたとか、いろんなことを考えていたのに違いないけど、彼だつて被害者なのだ。つらいのは彼だ。僕より、誰より、後悔と、罪の意識にさいなまれて一生それを背負つていくのだ。だから、誰が彼を責められよう。どうしてお前だけ生き残つたのだと、誰がなじることが出来よう。

だけど、僕の心の奥底にはきっと醜い部分があつたに違いない。

聰、何故お前だけ生きているんだ。芙美はどうして死んでしまわなければならなかつたんだ、つてね。

自分の醜い部分を見たくなかつた。それでだろうか。何となく聰とは距離が出来てしまつた。以前のように腹を割つてしまつてもなく、毎日のように遊んでいたのに、遊ばなくなつた。聰は聰で、僕は僕で、健一や違う友達と毎日を過ごしていた。もう以前のよう

にはなれなかつた。でも、それは仕方のないことと、僕は割り切つていた。それよりも芙美が死んだことで僕はその後、たぶん半年から1年くらい、そう高校を卒業するくらいまでの間は、どこかおかしかつたに違いない。夢遊病者のように、意識が朦朧として、その辺りのことを今から思い出すと、少し記憶が飛んでいるところがある。受験生だったのに、どこをどうして勉強していたのか。よく、あれで大学が受かつたものだと、われながら感心する。

確かにあの頃の僕はおかしかつた。時々、学校の帰りに無性に芙美に会いたくなる。そして自転車で40分もかけて、あの事故現場まで行くのだ。芙美が後ろに乗つているような気がするのが嬉しくて、自転車を走らせた。そこへ行つたからといって何もないのに。馬鹿みたいだと、夕暮れの堤防を何度も泣きながら走つただろう。毎日、普通に学校へ行つて、受験勉強をして、塾へ行つて、母親に文句を言いながら飯を食べて。

でも、ときおり風呂に入つてゐる時や、自分の部屋でヘッドホンをつけ音楽を聴いているときなどに訳もなく涙が溢れてきて、止まらなくなることがあつた。いつまでこんな日が続くのだろうと、途方にくれた。

そして、ひとつずつ罪の意識に苛まれ続けた。

あの日、バイクを貸したのは僕だつた。聰から扶美と約束しているのに、自分のバイクの調子が急に悪くなつて動かないからと。まさか、こんなことになるなら貸さなければ良かつた。

バイクを貸したから、扶美があのバイクの後ろに乗つたから。だから。

それはどうしようもない事故なのに。もうひとつ言えばこちらには過失などなかつたのに。赤の点滅信号で突つ込んできた車に責任があるので。

だけど、僕はバイクを貸したことをずっと悔やんでいた。

健一が、

「おまん、いい加減にせい。ずっと引きずつたままでおるんか。」

ある日、話があるからと呼び出された。

健一は知っていたんだ。彼に扶美のことを話したことはなかつた。

だけど、いつも一緒にいる彼は僕のことをよくわかつていた。

「だけど、バイクを貸したのは僕だし、扶美に気持を言えないまま

こんなことになつてしまつて、どうしていいのかわからないんだ。」

堰を切つたように彼に胸の内を打ち明けた。

「俺もようわからん。」

そう俯いた後、天を仰ぐように空を見上げ、

「どつかに扶美、おるよ。おまんがいつまでもそんな顔して、うじうじしどたら扶美だつて辛氣臭うてかなわんわ。」

わかつてる。自分でいつまでもこんな思いを抱えて生きてるの嫌だ。

「俺が考えるには、毎日、普通に同じ時間に起きて、食事をし、学校へ行く。何も考えず、規則正しくいつもと同じように過ごす。そんないいんやないか。だつておまんも俺んらもそうするしか仕方ないやんか。それ以外、俺んらに出来ることなんてあらへんぞ。」

そして、週命日のお参りを49日を境に止めた。きりがよかつたし、こうして引きずることが僕らにはつらいことだと、その時はそう思つたのだ。早く、気持ちの整理をつけて、次の段階へ行かなければならなかつた。そして、そちらを選んだのだ。無論、それが正解なのだと思った。辛過ぎたのだ。その事実にいつまでも向き合つていることが。

それから一度と僕はバイクに乗らなかつた。

どのくらい彼女の墓の前で僕は惚けていただらつ。気がつくと日はすつかり傾き、夕暮れの闇が迫つていた。僕は身震いをした。薄いジャケット一枚で、ずっと冷たい墓石の前に座つていたのだから。

季節はもう1~2月で、雪が舞う日も多い。雪の多いこの地方は、1月の末頃にはちらほら雪が舞い、1~2月には道に雪が積もり真っ白になる日も多い。僕はすっかり冷えた体を引きずつてアパートへ戻った。

バスタブに湯を張つている間、毛布に包まってウイスキーの薄いのをちびちびやつていて、体に体温が戻つてくるのを感じる。戸だつた自分が嘘のように、アルコールと相性が良くなつたらしい。自分の体質が変わつてしまつたようだ。でも、飲めるのはいい。嫌なこと、思い出したくないことを忘れることができるからだ。一時でも。どうも、芙美の墓の前で呆けていたら、あの頃のことをあれこれと思い出してしまつた。自分の胸の中に思い出さないようつに封印していた思いを。

僕は本棚から芙美の遺品を取り出した。「ウォーターシップダウンのうきぎたち」リチャード・アダムスだ。彼女の家にお参りに行つているときに、おばさんがもらつて欲しいと出してきたものだ。

僕たちが仏前にお参りした後、いつものようにおばさんがお茶とお菓子を出してくれて、

「隆博くん。ちょっと待つていてね。」

そう言い残して、部屋から出て行き、数分経つて戻つてくるとおばさんの手には1冊の本が握られていた。そして、それを僕の前に出すと、

「これね。芙美が隆博くんに渡そうと思つていたものらしいのよ。」

「僕に?」

手に取り、ペラペラと中をめくると、ページの最後の空白の部分に、僕に宛てたメッセージが書かれていた。

『隆博くんへ。私が最初に読んだ洋書です。この本を読んで、私が感じたことをあなたも感じて欲しい。』

「おばさん、これ本当にもらつていいんですか。」

「もらつていいも何も。芙美があなたに残した物なのよ。」

僕はその本を手に取ると、涙が滲んでくるのを感じた。こんな所で泣くなんて。皆もおばさんもいるのに。でも、恥ずかしいけど本当にその時、嬉しかったんだ。そして、ひどくひどく後悔した。芙美の気持ちを思つた。大事な本を僕に残した彼女の本当の気持ちをその時初めて理解した。そして、自分の気持ちを。そして、何よりすべて遅すぎたことを知つた。

何をしてももう芙美はいない。それでもその本を僕にと、残してくれた芙美の気持ちを少しでもわかりたくて、一生懸命訳して何ヶ月もかかってやつとその上下巻2冊もある洋書を読みきつたんだ。だから、一番思い出のある作品だ。

その頃のことを思い出しながら、本をめくつていると、何か紙切れがひらりと落ちた。その紙切れを手にとつて、僕ははつとした。（ああ、こんなところに挟んでおいたのか。）

それは、ワークショップで水木先輩と組み合わせになつた時の、僕の訳したものに対する彼の評が書かれたものだつた。それには彼には似つかわない上品な言葉で、贊辞の言葉が書いてあつた。それを読んで僕には彼が僕のことを、僕の才能と言つたら大げさかもしれないけど、僕のことを理解してくれているのだと感じ、ひどく嬉しく思つたのだ。だから、この大事な本の間に挟んでおいたのだ。

彼の書いた文字、彼の筆跡を見、ひどく彼に会いたいと思つた。今すぐにでも会いたい。でも、僕は頭を振つた。その思いを振り払うように。

会いたいと思う自分の気持ちにまだ振り回されている。どうして彼に会いたいと思うのだろう。この気持は恋なのか。好きな人に会いたいという、あの思いなのか。まだよくわからない。だからもう、会わない。会えないのだ。僕らの関係は変わつてしまつたのだ。あの夜を境に。彼はもう僕にとって過去の人でしかないのだ。そう思

つた瞬間、胸ぐらを凍つた手で掴まれたかのよつて急に息苦しくなつた。田の奥が痛んだ。

それでも、次の瞬間、僕は違つことを考えよつと無理にそのことから意識をはぐらかそうとした。無理やり傷口から瘡蓋を引き剥がすように。

（ああ、いけない。風呂の湯が一杯になつてしまつ。）

僕は、その紙切れを今までと同じようにページの間に挟み、本棚に大事にしまつた。そして、グラスに残つたウイスキーを一気に喉に流しこみ、浴槽へと向かつた。バスタブに体を沈めると、細胞のひとつひとつが一気に弛緩し、気が緩んだ。暖かくて気持ち良かつた。

どうしてだらう。ふつと、涙があふれてきた。

泣くなんて。男のくせに。何を泣くんだ。芙美のことか？思い出したら悲しくなつたのか？それとも、本当に胸を占めていることは何なんだろう。わかつていたはずだ。だけど僕はそれに田を向けたくなかった。

ばかばかしい。泣くなんて。でも、よく考えたら、僕ひとりだ。ここにいるのは。自分の部屋だし、泣いたつて喚いたつていいじゃないか。誰もいらないんだ。誰に聞かれることもない。その方が、気持ちが楽になるのかもしれない。

僕は泣くことによつて自分で自分を癒したかつた。気持ちの奥に、何がが枯渇していた。それは何だらう。乾いていた。

僕はバスタブにジャブジャブとお湯を流しつぱなしにしながらいつまでも泣いていた。誰に聞かれるのでもないのに、何故かお湯を流しつぱなしにすれば泣き声が聞こえないだらうと思つたのだ。

その日、僕は学内にある生協のコピー機で、市川に借りたレポートを「コピー」していた。何せここ最近うすく授業に出てなくて、単位が危つい。

「コピー機の前で、ほんやつ」コピーが終わるのを待つていると、横から無遠慮に誰かの手が出て来て、コピーした用紙を取り上げた。

「あ、それ。」

僕のだと言おうとして、そいつの顔を振り返って見たら、裕樹だった。

「なんや、おまえ。真っ白じやん。」

裕樹の手から用紙をひつたくると、確かに真っ白だった。

「あれ。」

よく確かめてみると、元の「コピー」したい方を裏返していったので、裏面が「コピー」されただけで、どれも真っ白だった。

「あほじやな。」

ばかにしたように裕樹が言つのに腹が立つて、コピーしようとした。レポートを乱暴にひつたくると、生協を後にした。

「待てよ。」

裕樹が追っかけてきて、僕の腕を掴んだ。

「なんや。調子悪そだな。」

ふん、と僕は鼻で息をした。

「別に。最近授業に出てなくて、市川にレポート「コピー」させてもらおうと思つて。」

「さうか。」

「俺に言えばいいのに。取つてる授業大体一緒だろ。」

そうは思つたが、抱えている悩みを健一や裕樹に知られるのが嫌だった。

「まあ、いいわ。コーヒーでも飲も。」

ふたりして学食へ行つて、コーヒーを買つて窓際の席に座つた。

「最近、おまえおかしいわ。こないだも具合が悪いって、だいぶ出てこんくて、ちょっと出て来たと思つたら、また見ないもんな。ええかげんにせんと単位落とすで。来年3年だろ。就職活動も始めないかんしな。」

裕樹は真面目なヤツだ。家が和菓子屋の老舗で、学校を卒業したら、家業を継ぐらしい。何で、この学部に来ているのだと聞くと、ただの趣味だといった。まあ、それはいいが、老舗の跡取りのせいか、责任感が強く、真面目であまり冗談も言わない。が、人の気持ちのわかるやつで、こいつにはいつまでも隠せないなとは思つていたが、虚をつかれた。

「わかってるよ。」

「ほんとに胃の調子が悪いんだ。」

「だつたら、検査受けろよ。」

「うん。」

とは、言つたがもちろん胃が悪いなんて嘘だ。

「嘘だろ。」

「何が。」

裕樹に表情を読み取られないよ♪コーヒーカップに視線を落としながら答えた。

「だからさ、なんか悩みとかあるんだろ。何やらかした?」

「いや。」

「何もないよ。」

「俺に嘘つくなよ。」

「うん。」

自分自身も何を悩んでいるのか、いつもの調子の自分に戻れないことが苛立たしかつた。だからと言つて、彼に言つてみると言われても何を言えばいいのか。まさか、何が言える。あるきっかけで、昔の死んだ彼女のこと思い出しても、悲しくなつていても?そ

れとも、男に告白されて悩んでると？もひとつ上をいつてその相手のことが何故か気になつてしようがないとでも告白しようと？

「まあ、悩んでるといつたらそつなんだけど。裕樹の気持ちは嬉しいけど、とにかく、少し自分でいろいろ考えていたいんだ。人に話して解決するような問題でない。」

そう、溜息をつくと、

「まあ、お前は何かあると、健一みたい明け透けに悩みを打ち明けて解決するタイプじゃないしな。それはわかつてんんだけど。健一も心配してたぞ。あ、あと、例の彼女。大丈夫なんか。お前から連絡がないって、健一に泣きついでいつたらしいぞ。」

「え。」

里佳子ちゃん。気にはなつていたが、とても連絡を取つて会つ気分じゃなかつた。

「健一がそのことでも心配しどつたぞ。今度はうまくいきやうやなつて喜んどつたんやけど。」

健一が女関係で僕のことを心配してくれてるのは前からのことだ。扶美の事があるから。

あれから扶美を失くしたショックで、他の女の子と付き合つことなんて考えられなかつた。でもここ最近になつてやつと、前向きに考えられるようになつた。それで紹介やコンパなどで知り合つた女の子とデートしていくんだけど、どうも長続きしなくて。それは僕の執着心のなさなのだとわかつていた。原因は僕にあるんだ。

「コーヒーの薄いカップに目を落としたまま、黙り込んでいると、裕樹に肩を揺さぶられ、

「でも、俺でよければいつでも言え。友達がいるのを忘れるな。」

「裕樹。僕が何をやらかしても友達でいてくれるか？」

思い切つて聞いてみた。

彼は即答した。

「たとえ、お前が泥棒をしても、殺人をしてもだ。俺がお前を嫌い

になることはない。そうすることには何かしら理由があるだらうし、俺はお前を知つていいのつもりだ。」

心強かつた。裕樹が男らしく見えた。

「ありがとう。」

そう言つて精一杯だった。

急に裕樹は照れたように、時計を見て、

「ああ、いかん、次の授業は出ないかん。お前はゆっくりしていけ。」

「そう言つて立ち上がり、

「良ければいつでも俺の下宿へ来い。いつでもだ。」

「ああ。」

裕樹は去り際、背中を向けたまま、じゃあなど手を振つて出て行った。

何だかほつとした。ひとりじゃないところとはなんて心強いのだろう。裕樹があれ以上何も聞かずにしてくれたことが嬉しかった。いつまでもこいつしていてはいけない。とつあえず、やめないとやらなければ。僕も次の授業に出来るために立ち上がった。

いつものよつとが過ぎていった。だいぶ授業を休んでいたので、次のテストは苦しかった。が、何とかこなし、ぎりぎりだつたが何とか単位もクリアできだし、ちょっとほつとした。裕樹に会つた時、何とか単位もクリアし、テストもやつつけたことを報告すると、彼もほつとした顔をした。

このまま、普通に日々が過ぎればいいと思つた。あの晩の事は忘れ、先輩も東京へと発ち、いつもと同じ日常が戻つてこれば。自分が自分に戻れるのもあと少しだ。

でも、ひとりになると、藻が絡みつゝよつと頭の中を支配することがある。振り払おうとすればするほど、心をそこに近づけまいとすればするほど、その影は心の中にどんどん大きくなつていった。そして、そのことを僕は嫌悪した。嫌悪しているのに、その嫌悪感と

は反対の位置で心が魅かれてどうにもならないことを感じる。

2人の自分がいた。その答えをいつかは出さないといけないのだろうか。このまま、あいまいに日々を過ごしていくばいつか忘れ、解決していくことなのだろうか。その答えは出ない。誰も答えてくれない。

時々、夜、自分の部屋で何もせずにぼんやりしていると、無性に彼のことを考えることがある。彼の笑った顔や、眼差し、ふつとしあしげさや、話した事柄についてや、そんないろいろなとめどもないことだ。

僕はあれから彼に会っていなかつた。当然なのだろうけど。連絡もしない、連絡も来ない。彼の問いに僕は答えなかつた。それで良かつたのだろうか。いや、それで良かつたのだ。その問答の繰り返しだ。

ある日、講義を終えて学校の門を出ると、ぱつたり里佳子ちゃんに会つた。

突然で声も出ず、立ち竦くしてこむとい、

「隆博君。今いい？」

彼女から声を掛けってきた。

頷き、無理やり笑顔を繕つ。

ずっと連絡をしなかつた僕をなじるわけでも、不機嫌な顔を見せるわけでもなくいつもどおりの明るい笑顔を見せて、

「久しぶり。急にごめんね。」

そう言って僕の腕を取つた。

ずっとあの門のところで待つていたのだろうか。

聞きたくて、喉元まで言葉が出かかったのを飲み込んで、

「ひつちこそ」めん。連絡もせずに。」

彼女は慌てて首を振る。

「いいのよ。」

門を出てすぐの場所に位置するカフェに入る。

窓越しに、雪を被つたポプラ並木を見ながら、

「隆博君の気持を聞かせて欲しいの。」

「僕の？」

「そう。」

何度かデートして、付き合っているのだと自分は思っていたのだけれど、このところ連絡をしても返事がないし、付き合っているのかどうかも自信がなくなってきた。それとも他に好きな子が出来たのか。もひ、自分とは付き合ひの気がないのか。はつきり聞かせて欲しい。

そう里佳子ちゃんは言った。

僕は気持を決めかね、何と返事をして言いのかわからず口をつぶる。

黙つてカップを口に運んで様子を伺つていた彼女が焦れて、「私のこと嫌い？」

「いや、嫌いだなんて。楽しいよ。君といふと。ほんとこ。」「思わずそう答えた。彼女といふのは楽しい。それは本当だつた。」「どうして連絡くれなかつたの。」

答えようすもなく、また黙り込んでいると、

「杉原君から聞いたんだけど。」

健一に泣きついたつて言つてたつて。裕樹が。

「隆博君にはまだ忘れられない人がいるつて。本当？」扶美のこと。健一が言つたのか。

怒りに似た感情が湧き上がってきた。

「あいつが言つたのか。」

押し殺したような暗い自分の声に、驚いた。もつと驚いたのは彼女の方だったみたいだ。

「『』めんなさい。聞いてはいけないことだつたのかしら。どうしても隆博君のことが諦められなくて、無理に私は聞きだしたの。何か原因があるのかと思って。」

慌てて小さな声で彼女が弁解した。

怒つてみても仕方がない。彼女のすまなそうに身を縮める様子を見て、一気に暗い感情が払拭される。だつて何も知らない彼女に連絡も取らず、返事を返さなかつた自分が悪いのだから。

「いいんだ。」

沈黙が続いた。

「それで、里佳子ちゃんはそれを聞いてどう思った？」

どうするつもりなのか。彼女任せにしている自分が嫌なやつだと思った。これ以上いろんなことを考えると頭がパンクしそうだ。また執着心がないと健一に怒られそうだが。半分投げやりな気持で、苛立つてている自分がいた。

「ずっと考えていたんだけど、隆博君がもし嫌でなかつたら、もう少し付き合つて欲しいの。その忘れられない人がいてもいい。いつか私に振り向いてくれる日が来るのを待つてみたい。」

健気な彼女の返事に、罪悪感で胸が一杯になつた。

「僕は、里佳子ちゃんが思つているような人間じゃないよ。待つてもらうだけの価値があるのかどうか自信がない。」

本音だった。いつまでもうじうじと、扶美のことが忘れられず、いろんな女の子を傷つけているだけの自分。それだけならまだしも、あらうことか好きな男がいるなんて。

好きな男？

自分で自分の胸の内の声に驚愕する。水木先輩のこと。無意識にそう思った。好きなのか？まさか。

扶美が亡くなつてから、女の子と付き合つた。何人かの子と。殆どは心配した健一から紹介された子だった。思い出しても自分から

好きになつて付き合つた子はいなかつた。胸の内にはいつもどこかで扶美がいたんだとおもう。

意識的に彼女を思い出すことはなかつた。封印していたのだと思う。彼女の存在を。

もうこの世にはいない人なのだから。新しく自分の道を進んでいかなければならることなんて、充分わかりすぎるくらいわかつていた。

頭でわかつていても、身体がうまく動かないことって結構ある。それと同じように頭ではわかつていても心がうまく動かなかつた。ギクシャクと耳障りな音を立てながら動いているぜんまい仕掛けの人形のように、僕は女の子に接していた。たぶん。

そんな違和感を気づくと、彼女たちは自分から去つていつた。何も聞かずには。

こんなふうに僕の中に割つて入つてきたのは里佳子ちゃんが初めてだつた。ナイフで胸を抉られて氣絶する寸前のように、眩暈がした。脆い。自分は。

彼女たちとうまくいかなかつたのは扶美のことが忘れられないからなのだと、思つていた。だけど、今自分の中に湧き上がる感情の中にもうひとつ理由があるのかもしれないと疑いだしていった。水木先輩のこと。男が好きなのか。僕は？それも原因なのか。扶美のことじやないのか。

急に視界が明白になつて、素のままの裸で往来に放り出されたようで、怖くなつた。自分に対してだ。

「大丈夫？」

どのくらい時間が経つたのだろう。凄く長い時間、自分はここにいなかつたような気がした。

「大丈夫だよ。」

彼女がテーブルの向こうから僕の顔を覗き込んでいる。心配そうに。

僕の顔は青ざめているのだろうか。頬に手を当ててみた。ひんやりした頬の感触が気持悪かつた。

里佳子ちゃんは明るく、半ば一方的に、

「待ってる。隆博君が私の方を向いてくれるまで。私、結構気が長いのよね。」

笑顔を向けて、僕の頬に触れた。

暖かい。柔らかい手の感触が気持ち良かつた。

レジでコーヒー代を払い、外に出る。

冷たい風が身を切るようだ。

肩先で揺れる彼女の栗色の髪を見て、不意に並んで歩く彼女の肩を自分の胸に寄せる。

驚いた彼女が僕の顔を見上げる。

そのまま彼女の背に手を回し、顔を近づけた。

甘い髪の匂いがして、柔らかい唇の感触がした。唇を離しかけて、何を思ったのか僕は又そのまま唇を寄せた。彼女の口を夢中で吸つた。小さく吐息を漏らしながら、彼女は僕の背中に腕を回して力を込めた。

それから数日後のこと。
バイト先の店の窓から外をぼんやり眺めていると、不意にオーナーが口を開いた。

「そろそろ店閉めようか。」

「もう閉めるんですか？」

反射的に壁の時計を見た。11時か。

オーナーは問い合わせに答へず看板を仕舞い始めた。

「まあ、今日は寒いし、お客は来ないし、こんな日は早く家に帰つて自分が一杯やりたいよ。」

寒そうに、オーナーは身震いした。客が来ないかと待つてはみたが、どうやら今日は閑古鳥になりそうだった。

「珍しいですよね。こんな日も。」

「まあ、客商売には波があるしね。給料日前の週末で財布が硬い時だからねえ。」

ああそうか、自分みたいな学生にはぴんとこないが、世は給料日前か。いつもは12時過ぎまでは店を開けているのだが、こんな日は客が来ないだろうと、オーナーは早々に空氣を読んだみたいだ。

「隆博、もういいや。」

「ええ。」

店仕舞いを手伝つていると、オーナーが帰れといつよつと手を振つた。

「オーナーは？」

「ちょっと、店の事務処理があるから。少しあつてから帰るわ。」

「じゃあ、お席に失礼します。」

遠慮がちに言い、帰り支度して店の裏口から外へ出た

外へ出ると雪が降つていた。

「あれ、雪だ。」

傘が置いてなかつたかと、裏口から出て、店の荷物置き場をがさごそと物色していると、後ろに人の気配を感じた。

オーナーかな。

「オーナー、帰るんですか。雪降つてますよ。」

その気配に背を向けたまま、声を掛けると、

「隆博。」

名前を呼ばれた。オーナーじゃない。

「あ。」

不意を突かれてびっくりして振り向くと、水木先輩が立っていた。

「先輩。」

努めて、平静を装つた。

「帰りか。」

「ええ。」

「早いな。」

「客がないから。」

僕はぶつきらぼうに答えた。言葉が続かない。

僕らはだまつて突つ立つっていた。雪の降りが強くなつてきたようで寒い。

彼が口を開いた。

「こないだのこと謝ろうかと思つて。」

「謝らなくとも。謝るとかそういうことじやないし。」

僕の声は上擦つていただろう。何と答へよう。答えよつすがない。

「もう、済んだことだし。」

自分の声色が気になつた。先輩は苦しそうな顔をした。

いつから彼はここにいたのだろう。

よく見るとダウンジャケットの肩が濡れていた。

前髪に雪がついているのが気になつた。その雪を見て次の瞬間、何を思ったのか反射的に手を伸ばして彼の髪の雪を振り払おうとした

た。自分で自分のしようとしたことが意外で、びっくりした。

僕は急いで手を引っ込めた。動悸が激しくなる。彼はそれ以上何も言わず泣きそうな表情になつた。ふたりとも言葉を発することなく、立ち尽くした。

どのくらいそこに立つていたのだろう。たぶん、時間にしたらほんの数分の出来事だったに違いないが、とても長い時間に思えた。「すまない。このまま曖昧な気持ちのまま、東京へ行くのも嫌だつたし、行く前にもう一度お前の顔が見たくて。」

そう思い切つたように言つと、彼はきびすを返した。

（お前の顔が見たくて）

その言葉を聞いて、何かが自分の中で一瞬弾けて飛んだような気がした。今ここで呼び止めなかつたら一生彼を見失つてしまつ。そう思つた瞬間、心が凍りついた。

「待つてくれ！」

振り返つた彼の表情が見えた気がした。暗い街灯の下だったのに、その時何故かはつきり彼の顔が見えた。驚いたように目を見開き、戸惑いが少し開いた口元にみえた。でもそれは決して何かを拒絕した表情ではなかつた。

僕は彼に恋をしている。その時、はつきり意識した。里佳子ちゃんのことも、相手が男だということ、すべてその瞬間吹つ飛んで消えた。

振り返つた彼が僕の方へ歩み寄る。僕は彼の顔がまともに見ることが出来ずうな垂れる。

芙美が僕の中で何度も振り返り。花びらを手にして。

舞い落ちる雪が、扶美の掌の中で薄い桜の花びらに変わつた。少し俯き加減に肩を落とし、

？美しいものつて儂いんだね。？

扶美の声が響く。

「隆博。」

雪の中、彼の薄い唇が僕の名前を呼ぶ。

？美しいって嬉しいことだ。？

違う。僕はその時はつきりと理解した。

扶美が言った言葉。大事にしていた扶美との思い出。その言葉を彼も口にした。

だから扶美に重ねて、僕は彼を意識していたのかとずっと思つていた。

だけど、違う。違うんだ。僕が好きなのは扶美の思い出と重ねた彼の言葉じゃない。彼自身だ。ずっと会いたいと思っていたのは、失くしたくないと思つていたのは彼だったんだ。だけど。

近づいてきた彼が僕の腕を取る。

「隆博。もう一度言つてもいいか。お前のことが好きだ。」

彼が僕の顔を覗き込む。僕は表情を読み取られないように、顔を背けて、

「ずっと会いたいと思つていた。本気だ。だけど、怖いんだ。」

やつとやう言葉を発した。

「俺が男だから？」

そうかもしけない。いや、でもそれ以上に怖いことがある。

人を本気で好きになることだ。本気で好きになつた相手がまた消えてしまつたらどうしよう。僕はずつとそのトラウマに囚われたままだつた。だから、どの子も好きにならなかつた。相手の心の中に踏み込むことが怖かつた。どこまで相手の中に入つていいのか、距離を恐る恐る測つていた。飛び込むことなんて出来なかつた。

ゆつくり首を振つた。

彼が、その大きな手で僕の頬に触れ、顔を包んだ。

暖かい手の感触に、鼓動が激しくなる。小刻みに身体が震えるのがわかる。降り続く雪が背中を濡らしていくのがわかるのに、もう熱いのか冷たいのか身体が感じる感触すらわからない。

「顔を上げてくれ。」

ゆっくりと視線を彼の顔に移動した。優しい目をしていた。僕が好きだと思ったのは彼の目だ。笑うと尻に細かい皺が寄る。顔を近づけるほど至近距離でなければわからない、この皺が好きだと思つたんだ。

「消えないか？」

僕は聞いた。

「俺が？」

「僕の前から。」

怖いと思っていても、もう僕は彼のすぐ側まで来てしまった。今、手を伸ばせば彼の手に触れる。そして、もう戻れなくなる。本気で人を好きになることを避け続けていても、もつ彼に触れてしまつたら、僕は落ちていくだろう。この恋に。

「消えるわけない。消えろと言われても、お前の側から離れたくない。」

落ち着いたしつかりした声で、彼はそつ答えた。

ベージュがかかつたモスグリーンの色が目に入った。その色が彼の家のソファの色だと、もう今ははつきり意識出来る。

？俺の部屋に来るか。？

雪の中で濡れた僕の背に手を回して、先輩が言つた。黙つて頷いた。

ソファを背にキスを受けながら、僕の身体は強張つていて。彼が好きなのは本当だけど、身体がうまく反応しない。女の子としか経験がないからどうしていいかわからない。

最初は恐る恐る僕の反応を確かめるよう、小鳥のように小さく口を啄ばんでいた彼が、そのうち激しく唇を重ねてきて、熱い舌を滑らせてきた。ゆっくりと僕の口腔を探るように舌を這わせた後、舌を絡ませてきた。

息が上がる。心臓がすぐ側で音を立てていた。

彼の口が耳朵を食み、首筋へ降りてくると同時に、僕のジーンズのファスナーに手がかかる。

一瞬、身体が硬直する。が、次の瞬間には彼のもたらす快感に、身体全体の筋肉が弛緩する。ゆっくりと僕の中心を包み込むように彼の手が動くのがわかる。背後から僕を抱くようにして、手の動きを早める。思わず声を上げそうになるのを彼の口が塞ぐ。全神経がそこに集中するのを止めようすもなく、されるがままになつていて、腰の辺りに彼の屹立したものが当たつていてことに気がついた。急に怖くなつた。これからこの身に起ることを予想して、身が竦んだ。だけど、後戻りは出来ない。僕らは手に手を取つてこの恋を選んだのだから。

「痛いから、息を止めるな。」

？息をしろ。？

耳元で彼が囁いた。低い声で優しく。
これは自分が望んだものなのだと思った。この痛みも、この肌の熱も。

今まで、自分を「まかし続けてきた。間違いなんてあつてはならない。それは恥すべきことなんだと。でも、心の奥底ですつと欲していたものがあつたんだ。

あの時、扶美を欲しいと言えたら、欲しいものを欲しいと言える自分であつたら、こんな苦しい思いを引きずることなんてなかつたんだ。周りのこと、そうすることで引き起こるいろんなことを考えて、何も行動が出来なかつた。そして、後悔の念がずっとつきまとい、苦しむ。もう、そんな日々を過ごすのは嫌だつた。

悟が欲しい、そう言って後悔するのと、言わずに後悔するのどどちらを選ぶか。そうやって自分の内面を探るのはもう嫌だつた。

そのことで、後悔してもいい。今、自分が欲しいものはそれだつたのだ。

僕を抱きしめている彼の手が少し震えているのがわかつた。彼も自分の意思に戸惑い、迷い、嫌悪したのだろう。僕と同じように。それでも、欲しいものをどうしても手に入れたかつたんだ。お互い。何故だろう。不思議だ。終わつた後に、彼が自分の身体を僕の背に押し付けるように抱きかかえて言つた。

「女の子としか寝たことはなかつたけど、肌の温かみはどうちらも同じだ。」

そう、僕も同じことを思つていた。男だから、女だから?何が違うのだろう。相手のことを愛しいと思つのはどちらも同じだ。

異性間の恋は生殖と種の保存がつきまとつ。女の子とつき合つとき、結婚を意識する。意識しないやつもいるだらうけど、きっと恋の延長線上には結婚がある。結婚という共通のゴール、もしくはスタート地点に立つのを目的として、人は恋をするのだと思う。そして、結婚すると恋は形を変える。家族愛とか人間愛とかそういうの

だから、眞の恋といつのは同性間でしか成り立たないものなのかもしれない。僕は今まで女の子としか恋をしたことがなかつたら、この感情に振り回され、戸惑い、それを恐れてきた。そして、そういう自分に嫌悪したんだ。

でも、こうして同じベッドで、肌の温かみを感じているとそういうことがどうでもいいことのように思えてきた。翌朝になつたら、僕は自分のしたことに嫌悪するかもしれない。それは彼も同じかもしれない。でも、今この時の僕は後悔しない。

目が覚めた。カーテン越しに薄暗い光がみえる。まだ、夜は明けていない。遠くの方でときおり車が走る音が聞こえる。部屋の中がぼんやりと夜明け前の光にさらされている。

ベッドに横たわつたまま、部屋の中を見渡す。ベッドの脇のサイドテーブル。積み上げられた雑誌や、本棚に並んだいろんな書籍。部屋の脇のスタンドに無造作に引っ掛けられたジャケットやシャツ。そんな物が薄暗闇の中をぼんやり盛り上がり盛り上がって見える。

夢を見ていた。どんな夢だつた？すぐほんの脇で彼の規則正しい寝息が聞こえる。

夢を思い出す。それは芙美と最後にあつた時の夢。夢の中で僕は彼女の手を軽く握つていた。テーブルの上に置かれた2人の手。いつものようにじやれて手を握つた。その握つた手をテーブルの上に置いたまま話をしていた。僕が言つた。

「2人で会うのは良くないよ。」

「何故？」

「何故つて芙美はつき合つてゐる人がいるんだから。誤解されちゃうよ。もつこりんなふうに会わない方がいい。」

それが僕の本心だつただろうか？いや、違つ。

芙美はちょっと考えてから、言葉を選ぶように話しだした。

「だつて、私たち友達でしょ。隆博くんは私のつき合っている人の友達ではなくて、私たちは独立した関係でしょ。」

「会わないなんて言わないで。」

僕は芙美の心情を量りかねていた。その時急に恥ずかしくなつて、自分から手を離してしまつた。

その時、自分の気持ちを言えばよかつた。どんな結果になつたとしても、自分が芙美を好きなことを。芙美の気持ちをはつきり聞けばよかつた。聴に对してもし、友情が壊れたとしても。自分の気持ちを素直に表せばよかつた。でも、僕はそうしなかつた。いつもどおり、友達面をして別れた。

あの時、彼女が食べていたのはミートスパゲティだつた。サラダについていたパインアップルをじつと考え込んでフォークでつづいていたことまで覚えているのに。

僕はその後、彼女を駅まで送つた。

駅の改札口を通る時、彼女は僕を振り返り言つた。

「隆博くん、電話してきてね。」

彼女は僕からの連絡を欲しがつた。

「うん。」

そう短く答えた。彼女はいつもとは違つ様子で名残惜しそうにもう一度振り返り、ホームへ消えていった。

それが最後だ。

その後、何度も後悔しただろう。あの時、あの手を離さなければ良かった。僕らははじめて手を握つたりすることが何度もあつたけど、芙美の手はいつもひんやりと冷たかつた。なのにあの日に限つて、火がついたように彼女の手が熱く火照つていたことを後になつて思い出した。

すでに時は僕の後悔をあざ笑うように過ぎ去り、もう2度と取り返しがつかないことを、何度も脳に反復させるように眠れない日々が続いた。

だけど、僕はもう後悔しなくていい。そうだよね、芙美。

それからは楽しい日々が続いた。彼は4年生だからもうほとんど授業はなく、わりあい自由だった。就職のことや引越しのことなどの手続きで東京に行く以外はこちらにいた。乃理子さんは実家に出产のため帰ったきりだった。

それで僕らは都合のつくかぎり会っていた。前みたいに、くつたくなくいろんな話をしたり、飲んだり、笑ったりした。前と違うのはお互い秘密を抱えてしまつたことと、僕が彼を名前で呼ぶようになったことだった。

その日も授業が終わり、バイトのない日だったので、夕方電話を入れた。これから行つてもいいかって。そうすると、家にいるようだつたが2、3時間後にしてくれと言つ。

何?って聞き返すと、急な仕事が入つて、と言つたきり一方的に電話を切られてしまつた。訝しげに思つて、仕事つてなんだろう?と思つたが、彼がいつたとおり3時間程して彼のアパートに向かつた。

ドアをノックすると

「あいてるよ。」

返事がする。

部屋へ入ると、彼は机に向かって何か作業をしていく途中だった。ネイビーブルーのコットンのセーターを着て袖を肘までたくし上げて、銀のフレームの薄い眼鏡をかけていた。

眼鏡をかけた姿なんて初めて見た。彫りの深い横顔に薄いフレームがよく似合つて何だか知らない人みたいでちょっとどきつとした。「ごめん。今、FAX流したら終わりだから。」

「何? 仕事つて。」

「うん、これ。急に8時までにやつてくれつて電話が入つて。」

その用紙を手にとつて見ると翻訳の原稿だった。

「使用書?」

「そう。」

パソコンの付属品、ケーブルやUSBの取り扱い説明書の訳したものだつた。

「悟、こんなことしてたの。知らなかつた。」

「2年くらい前からかな。ちょくちょく頼まれて。何もないときはないんだけど、急に原稿をあげてくれつて言われる時がある。今日みたいにね。」

言いながら、FAXに原稿を流し込む。

「なんとか、間に合つたな。」

そういうながら携帯を手に取る。

取引先の相手みたいだ。仕上がって今FAXしたことを報告している。

「あと、郵送して終わり。」

「おまたせ。」

「うん。」

「どうした?」

「いや、すごいなあって。」

「これ?」

悟は原稿をひらひらさせた。

「だつて、もうそういう仕事してるなんて。」

「アルバイトだよ。」

「実務翻訳は数が多いからね。2年ほど前に翻訳会社に登録しておいたら、ぼちぼち仕事をくれるようになつて。製品の使用書やら説明書などのマニアルが多いけど。」

「専門知識がないとむずかしいでしょ。」

「そうだな。金融とかコンピュータ関係、税や法律関係など専門があるやつは強いよな。」

「悟はパソコンやネット関係、詳しいからいいじゃん。」

「まあ、そういう関係のものが多いけど、前は何でも来てたよ。お菓子のパッケージからおむつカバーの取り扱い説明書まで。」

それを聞いて思わず僕は吹き出してしまつた。おむつカバーだつて。

「でも、これからおむつカバーなんてお世話になるじゃない。」

生まれてくる赤ん坊のことを指摘して、笑うと

悟はむつとしたように

「所帯じみるような話題はやめてくれ。」

ごめん。なんとなく気まずい雰囲気が2人の間に流れた。何となくタブーにしたい話題だ。これからのことを考えるとちょっと憂鬱な気分になる。ほつておいても赤ん坊は成長し産まれてくるのだから。こうしていられるのも期間限定か。それはわかつていて飛び込んだつもりでも本当は現実を見たくなかつた。時間がくれば悟は東京へ行つてしまうのだ。家庭が待つていて。

気を取り直したように悟が何か飲むかと聞いてきたので、ビールをもらうこととした。ビールを飲みながらその翻訳のアルバイトのことについていろいろ聞いた。

彼は僕と同じで出版翻訳をしたかつたらしいんだけど、この世界では20代なんて箸にも棒にも引つかからない。30、40代でやつと駆け出し、50代になつてやつとこさ一人前。それでも出来るのはほんのわずか一握りだ。本の表紙に『訳・誰それ』なんて自分の名前が載るなんて夢のような話だ。

それに比べて実務翻訳は門戸が広い。医薬品から金融、パソコン関係など商品全般の説明書や取扱書、いろんなマーケティング、会計、税理関係の書類の訳やいろんな仕事がある。

専門的な知識がないと専門用語を訳すだけではアウトだ。彼はコンピュータ関係に明るい。ソフトの使い方はもちろん、ハード関係にも通じ、ネット、インフラ、情報工学すべてに通ずる。どこでそんな専門知識を得たのだろう。この文系の学校で。不思議な人だ。それでぼちぼちその方面の仕事をもらえるらしいけど、そうでないと登録している人なんてごまんといいるけど、アルバイトのようなちょっととしたものでも実際仕事をしている人なんてほんのわずかだ。それだけに専門知識もあり、迅速に仕事が出来る人に集中する。難しいのはわかつていたから彼はすごいなあと感心したんだ。学生なのに。

「それでも出版翻訳に比べたら仕事も多いし、門戸も広い。やううと思えばやれんことはないよ。何事も勉強だからね。いろんなことしておかないとと思って。」

でも、コース外れちゃつたからねと、彼はため息をついた。生活の為に外資系の会社に就職したことをいつていてるのだ。どの部に配属されるかわからんないから営業やつてたりして、なんて笑つた。

ふつきたのだろうか?なかなかふつきれるものではないよな。

「隆博。お前やつてみんな。」

缶ビールを一気に飲み干した後、急に悟が言に出した。

「え？」

驚いて聞き返すと、もう来年には卒業して東京へ行ってしまうので、辞めることを担当のコーディネーターに話すと、代わりに誰か出来る子がないか聞かれたといつ。

「えー。自信ないよ。」

「まず、やつてみたら。」

「でも、悟みたいに専門知識ないし。」

「よく言つよ。お前だつてコンピュータ関係強いんだろ。」

確かに好きでパソコンは良く使うナゾ。でも、と考えていると「とにかく、また考えてみるよ。俺も教えてやるからさ。」

「うん。」

「しかし、集中してやると目が疲れるな。」

眼鏡をはずし田の周りをマッサージし始めた彼を見て、悟が目が悪いなんて知らなかつた。」

「お前の前で眼鏡かけてたことなかつたけ？」

「うん。」

「車を運転する時と、夜だけな。昼は見えるんだけどな。俺、鳥田かな。夜なんか作業する時にな。よく見えん。」

ああ、車を運転したところを見たこともなかつたし、夜も飲み屋さんでしか会わなかつたから。

「何乗つてるの。」

車種を聞こいとしたら、何か思いついたような顔をして乗せてやる。ドライブしよう。」

と言ひ。

「え、今から？」

「鳥田でしょ。見えるの？」

「つるやこ。」

大丈夫かなあ、心配する僕を尻目に、やはり先輩面してさつたと

身支度を終未だ、ナーナルが立つ。

階下にある駐車場へ下りていくと悟が車を出してきた。

白のレガシーシーリングワゴン。300はするよなと思ひながら助手席に座る。

「いい車だね。」

「親父のお古さ。」

彼の父親は社名を聞けば誰でも知つてゐるような大会社の重役だ。やはり金持ちの坊ちゃんだな、僕も兄貴のお古だけどだいぶ前の型のレビンだ。この車とは大違ひだ。

「学生にしてはたいそうなに乗つてると思つてゐるだろ?」

「わかった?」

「ちょっと意地悪く言うと、

「ふん。親父には金を使わせておけばいいんだ。そのくらいしか子供にしてやることがないと思つてゐるみたいだからな。」

苦々しく言い放つたので、彼は父親とうまくいつていないのであると思ったが、人には家庭の事情がいろいろあるだろ?と聞き流しておいた。

「それでどこに行く?」

「江島は?」

「高速?」

「そうだな。宮尾のETCから乗るわ。」

そういつて彼はすぐ近くのETCから高速に乗つた。ETCのレンタカー通り過ぎる。夜8時をまわつてから車は少なかつた。それに今日は平日だし。そう思つてみると、夜間を徹して荷物を運ぶトラックが多く走つていた。

「鳥目大丈夫なの?」

「なんだ言つてる。」

「大丈夫だ。見えてるよ。」

「心配なら替わるか？」

「いや、いいよ。まかせる。」

「そう。」

馴れてる。しかも鳥田といいながら夜間の高速を140kmは出している。

「CD好きのかけて。ダッシュボードの中。」

そう言われてダッシュボードを空けてCDを物色する。ジャズ、映画のサントラ、洋楽、JPOP…。

「雑聴だね。」

「何それ？」

「ジャンル多すぎ。なんもあるよ、演歌以外。」

あはは、と笑つて彼は自分の物以外もあるから、乃理子がいろんなジャンルの音楽が好きだからと言つた。

ああ、そうか彼女の趣味もあるんだ。僕はその中からMonky Ma gicを選んだ。

これは?と聞くとそれは俺の趣味と答えた。

「でも、何で今から江島?」

「夜の海、いいでしょ。」

「はあ、意味ないよ、今から行つたつて。真つ暗だし。」

「だから、時々そういう意味のないことをするのがいいの。ストレス解消。」

「そうかなあ。」

「隆博はな、そういう意味のないことはしないつていうのね、なんだつける合理的主義か。意味のないことに対する意味があるかもしれないし、その時はわかんないけどな。無駄な時間も必要だよ。お前固いからな。もっと人生楽しめ。」

ま、確かにそうだな。自分の内面をぐさりとやられても、悟が言うとそうかなあ、なんて素直に思つてしまつ。他人に自分のことを言わるのは嫌なんだけど、彼にはそつは思はない。ただ、時々も

う少し口が悪いのを何とかならないのかと思つだけだ。

「そういう悟も突拍子もないことをするところが子供っぽいんだから。

」

そう言つと、違ひないつて笑い出した。

彼といつこうやりとつをするのは好きだ。心が通じる、気心が知れるつてこいつ感じ？なんだか嬉しくなつてしまつ。

宮脇のエスから江島までは高速で2時間半。でも悟の運転だとたぶん2時間くらいで行つちゃうだろ？。僕らの街からこけばん近い海岸線。里佳子ちゃんとも一度ドライブに出かけた。

里佳子ちゃん…。あの日以来会つてないな、と最後に会つた時のことをふつとと思い浮かべた。

扶美のことを言われた。忘れられない子がいるんだねつて。でも彼女は健気にもその子のことを忘れるまで待つていると言つた。だけどその時、僕は扶美とは別の自分の本当の気持ちに気づいてしまつたんだ。

ハンドルを握る彼の横顔をちらりと覗き見する。そして、視線をすぐに前方の車のテールランプに戻す。

でも僕はその気持ちに気づきたくなくて、反射的に彼女を抱きしめ、キスをした。曖昧な自分。この状態をどうやって彼女に説明しようか。僕は逃げていた。あれから彼女の誘いを曖昧に断つてはばかりだ。あんな行動に出た僕の気持ちを量りかねてているに違いない。どこかでちゃんと話をしなければ。それ以前に自分の気持ちをちゃんと整理しておかなければ。

やらなければならないことはわかつていた。このままでは駄目だ。だけど悟といつる時間が楽しくて、その時その時を楽しむことに夢中で、面倒なことを先延ばしにしている自分がいた。

「何考へてる？」

物思いにふけっている僕に気付いて悟が聞いた。

「別に。」

「ごめん。僕の悪い癖だ。人と一緒にいる時につい他のことを考えてしまう時がある。健二にも言われた。その時を楽しんでいないって。熱中してないってね。」

「何でもないよ。」

里佳子ちゃんには悪いと思いながら、僕の気持ちはすぐに彼と一緒にいられる時間を楽しむことに切り替えられた。

あれこれいろんな話をし、CDを取り替え、好きな音楽の話をした。途中で彼が怖い話をしよう、などと言い出し、高速道路を走っている時にルームミラーに血まみれの女の顔が移る話などを始めたので、僕は嫌がった。なのに、僕が嫌がると妙に嬉しがってどんどん話し続けるのだ。彼は怖い話が大好きで、夜遅い時間に会つていると必ず、ひとつふたつは話し始めるんだ。この癖だけはどうもいただけない。

あつという間に車は江島のHに着き、彼が途中で買い物をしようと/or>で、Hを降りてすぐに田に留まつたコンビニに入った。何を買つんだらうと思つていると、コーヒー やタバコ以外にウイスキーのビンやチーズやらオイルサー"ティンの缶詰やら買つだした。「何? 暗い浜辺で宴会でもするつもり?」

「よくわかつたな。」

と嬉しそう。

まじ? このくそ寒いのに。海まで走つたらその辺の24時間営業のファミレスで軽い物でも食べて帰るかな、なんて思つていたらそんなこと言い出すんだもん。

僕の迷惑を無視し、ハンドルを握つた彼がそのまま江島の海水浴場まで走つて行き、砂浜に車を乗り上げた。

それを見て僕は

(ああ、せつかくのレガシーが砂まみれ。なんてもつたいたい車の使い方するんだよ。)

心の中で悪態をついたが、彼は全く意に關しない。そして車のエンジンをかけたまま、車のライトを頼りに、その明かりの中で何やらその辺にある流木を集め始めた。

人気のない砂浜。時間はとうに12時を過ぎている。警察でも回つてきたら不審者で取り調べられそう。あっけにとられて突つ立つると、

「何やつてんだ。隆博。火を焚くんだよ。」

はあ、よくわからんなあこの人。

しぶしぶ流木を集めるのを手伝い、集めた流木を積み上げると、車のトランクから何やら取り出した。見ると、着火材と小型のガスバーナー。キャンプやバーベキューなんかで使うヤツだ。

「なんでそんなの持つてんの？」

「ああ、いつも積んでる。」

そういうえばこの人、放浪する人だった。前、聞いたつけ。日本全国、端から端まで旅した話。ルンペンさんに間違えられたり、不審者で取調べを受けたことなどおもしろおかしくしゃべるのを聞いた覚えがある。

「いいだろ。椎名誠の小説にこいついう道具を積んで放浪する話があつてな。鍋やら釜やらを積んで北へ北へと走るんだよ。あれ、おもしろくてやつてみたくてな。」

「で、今日は何？」

「あ、呆れてる？」

「別に。」

「別に、別にか。おまえほんと可愛げないな。つきあえよ。」

まるで小学生だ。不審火を起こして掘まらなきやいいけど。

悟はそんな僕に構わず、器用にガスバーナーを使い、あつというまに流木に火を起こした。焚き火がぱちぱちと燃え出す。

「大丈夫かな？」

「何が？」

「不審火を起こしてるって警察とか来ないかな？」

「もう、夜中だ。寝てるだろ。」

そういう問題か。

「民家からは離れているし、シーズンオフだ。問題ないだろ。」

確かに。この海水浴場は江島のいくつかある海水浴場の中ではあまりその名前を聞いたこともない小さな海水浴場で、メインの海水浴場からはちょっと離れている。周りに民家や店もなく、まるでちよつとした離れ小島だ。

むろん、海の家などもない。もっとも冬だからね、あつても閉まつてるけど。

「ああ、でもなんてくそ寒いんだ。」

手が凍りそうだった。風もさほど吹いていないとはいえ、12月の真冬の浜辺はきつかった。ありつたけの服を着、マフラーを巻いていても寒くて震えがくる。

僕が悪態を付くと

「すまん、すまん。ほら火にあたれよ。」

彼はちょっとすまなさそうに笑った。

砂浜は真っ黒な暗闇に包まれて何も見えない。建物の明かりや道路の明かりが遠くに見える。僕らが起こした焚き火の火だけが赤々と燃え、静まつた砂浜には波の音だけが響いている。

タイヤが半分は砂浜に消えているレガシーが悲しそうにこっちを向いていた。

僕らは火に当たりながら、ウイスキーを交互に回し飲みした。むろんロックだ。水も氷も無いからね。でも、それがかなり効いた。寒さと海の冷たい風でやられていた体が芯から、かーっと熱くなつてきた。チーズを食べ、オイルサー・ディンの缶を空けた。

何故か彼はマシユマロなんか買つてきたみたいで、その辺に落ちている木を細くナイフで削り、マシユマロを刺して火にあぶりながら食べ始めた。おいしいのそれ？って聞くとあぶつて溶けかけたところが美味しいなどという。焦げて煤で真つ黒になつてゐるのを、無理やり口に押し込まれた。ま、食べてみると美味しいかな。

「ほらスヌーピーの漫画であるだる。」こういつの。」

どつかの洋画でこんなシーンならみたことがあるかな。カウボーイが羊の晩をしながら焚き火の側で食事を取るシーンだつた。

「ふつ。スヌーピーの漫画だつて？」

僕は吹きだした。

「妹が好きでね。妹が持つていていたのを子供の頃読んだんだ。スヌーピーがウッドストックとキヤンプをし、こうやってマシユマロを火であぶりながら食べるのが美味しそうで、どんな味がするんだろうつて。1回やつてみたかったんだ。」

やはり相変わらず子供っぽいところがあるんだから。

「妹がいるの？」

「ああ。」

兄弟の話なんて聞いたことがなかつた。親のことも、家族のことはあまり話さない人だ。

「妹と弟がひとりずつ。」

「一番上？」

「そう。」

「弟は年子だから大学生3年。妹は高校生だ。」

それがきっかけで僕らは家族の話をした。僕の家はたぶんごく普通の家庭だと思う。両親に兄貴がひとり、妹がひとり。兄貴は社会人で結婚もしているし、妹は高校生だ。

兄貴は普通のサラリーマンでごく一般的な人だと思う。学生時代は野球をずっとやつていて、高校も野球の強いところへ行つてまあ頑張つていたんだけど、甲子園までは出られず、兄貴もその辺で諦めたのかな、普通に大学を出て普通に就職した。彼は野球で食べていきたかったと、飲んだ時に僕に話すことがある。今は、会社の野球部に属し、地域の子供らに野球を教えている。結局好きなことはやめられないみたい。

妹は私立の高校に通う、これまたごく普通の女子高生だ。最近の女子高生は派手な子が多いみたいだけど、妹はどちらかといふと地味な方で、まだ幼い。吹奏楽部に属し、部活が忙しいみたいで、休日もあまり家にいない。

両親はといふと、父親は自動車のディーラーでずっと営業をしていて、年相応にそこそこ出世もして何とか安泰だし、母親は近所のスーパーに長年パートで勤めながら僕らを育ててくれた。家族みんな仲がいいし、今はそうでもないけど子供の頃は休みの日には、よく海や公園に家族で出かけた。

僕は大学に入つて出たつきりだから、月に1、2回は家に帰つてくるようにと母親がうるさい。それでたまに週末家に帰り、兄貴の家族と妹と両親でご飯を食べる。そういう家庭だ。

彼が自分の家のことあまり話さないのは何故だろうと思つていたのだが、聞いてみるといろいろ確執があるらしい。父親は有名な大会社の重役であることは周りの者はみんな知つていてるけれど、それ以外のことはあまり聞いたことがない。

彼が僕に話してくれたのは、妹は可愛いらしいが、弟とは何かいろいろあるらしい。

父親が厳しい人で、割と自分の考えを押し付けるタイプらしい。

幼少の頃から躾や勉強に厳しく、子供を自分の思い通りに育てたいという思いが前面に出ていたらしい。

そうすると、思いつく展開はそれを嫌がって反発するか、もしくは、そのとおりに父親の理想像のような大人しい子供になるかのどちらかだ。

どうも、前者が悟り、後者が弟らしい。聞いてびっくりだけど、高校生になった時、どうにも親の監視が嫌で、家を飛び出したらしい。母親はそんな父親にあまり口答えも出来ず、ずっと従ってきたような大人しい人らしい。

「それで？どうしたの？」

「中学生の頃から、親父が嫌で、そんな親父にへつらうように大人しく従つている弟が鼻について、絶対高校になつたら家を出るんだと思って我慢していた。高校に行かず働いて家を出るつていたら鼻がひん曲がるくらい親父に殴られたよ。」

「やつは自分の敷いたレールを歩かせたいんだ。それがわかつていつから、どうしても反発してやりたかったんだ。それで家出した。でもこれは2週間ほどで連れ戻されたけどね。必死で勉強して、高校は特待生で入った。アルバイトをこつそり探しておいて高校1年の時、また家出した。何とか自分で食べてやつていけないかつて頑張つたけど、これも連れ戻された。そんな時、母親の兄貴が、つまり俺の叔父にあたる人が、そんな状況を見かねて俺の後見人をかつてしてくれたんだ。優しい人でな。子供がいなせいか俺のことを息子のように思つてくれていて、小さい時からあれこれと俺ら兄弟の面倒を見てくれた人で、この人には俺も懐いていて、信頼していた。」

「その叔父さんは？」

「もちろん、今も健在だし、今も俺の後見人。親父とはほとんど絶

縁状態でな。」

僕は砂浜に埋まつたレガシーを見て、

「でも、あれは親父さんに買つてもらつたつて。」

「うん。最近、ここ1年くらいかなあ。だいぶ親父も丸くなつて、俺が結婚するんだつて聞いてから優しくなつて、勝手に車を寄越したり、電話してきたり。少しずつだけど。そんな感じ。たまに、家にも帰るよ。ホント、たまにだけど。」

「そなんだ。」

だから、家族の話をするのを嫌がつたんだ。

「叔父さんが後見人を努めてくれたおかげで、高校も卒業出来たし、大学も入れた。感謝している。」

「叔父さんと一緒に住んで？」

「いや。確かに援助もしてもらつたが、バイトしてひとりで住んで卒業した。だいぶ、わがままさせてもらつたよ。自分が父親になろうとしている今、何をいろいろ反発してたのかなあつて。今になつて親父の気持ちも少しさはわかるような気がするよ。」

「たぶん感情表現が下手なんだね。親父さんは、一生懸命なりすぎるのかな。子供に対して。」

「そなかもな。」

「でも、隆博はいい家族に恵まれて幸せだな。」

焚き火がゆらゆらゆらめいて、火に照らされた彼の顔に笑顔が浮かんだ。優しそうな笑顔だ。そしてやっぱり寒いだろうと言つて、車から毛布を持ってきて僕にかけてくれながら、

「だからかな、おまえといふとほつとするよ。」

そんなふうに言わると少し照れてしまつ。僕こそ、一緒にいるのが嬉しい。みんなが憧れる素敵な先輩。こうして2人で一緒にいるから、自分の内面の話までしてくれるなんて信頼されているみたいで嬉しい。

「こうしていられるなんて嘘みたいだ。隆博は俺のことを受け入れ

てくれるわけないって思っていたから。」

彼は、ばつの悪そうな顔で俯いた。あの時のことを言っているのだ。

「…聞いてびっくりした。最初は、あんなことを言われるのは、初めてで、それに。

僕は口もつた。告白された後、彼を受け入れるかどうかかなり迷つたことを思い起にした。

「うん。すまない。」

悟は押し黙ってしまった。話題を変えようかと話を振つてみるが、なんだか上の空みたいだ。何か言いたいことがあるのかな？

「どうかした？」

「俺さあ。」

思い切つたようになに口を開いた彼が一気にまくし立てた。

「俺さあ、そういうの、本当は一番認めたくなかったことなんだ。」

(えつ?)

?そういうの。?

彼が僕のことを好きだと言つた晩の事を思い出した。彼が口ごもつて言いにくそうにしてるのは、僕らの関係のことだとすぐにわかった。迷いながら来た。そして今もこうやって一緒にいるのにどこかで迷つている。その感覚は僕にもわかるような気がした。だけど、それについて何かを答えてやれるかといつと、何も言えない。

僕は座つている脇の砂を手に掘んだ。

気まずい雰囲気が流れ、僕は口も聞けずにいたが、彼は構わず一気に話を続けた。

「高校の時、部活でラクビーをやつていた。結構強くてな。いろんな大会へ。いいところまで行つたんだ。練習も厳しくて上下関係も厳しくてな。でも、いい先輩がいっぱいいて、部活以外でもいろんなこと教えてもらつて、そういうの楽しくて。大会が終わると、飲むんだ。打ち上げ。その…2年の時かなあ。打ち上げでしこたま飲んで、酔つ払つた先輩が自分の部屋で飲もうつて。その先輩、親元から離れてひとりで下宿していて。好きな先輩だつたんだけど、かなり酔つてたんだろうなあ。」

そして少しの間口をつぐんで、意を決したように言葉を続けた。

「やられちまつたんだ。そん時。

びっくりして何も言えなかつた。

「ショックでだいぶ長い間立ち直れなかつたな。その後、そういうの忘れていろいろんな女の子とつき合つた。全く手当たりしだいだな。」

そして暗い海の方へ視線を向けて

「お前も知つてゐるだろ。複数の女の子とつきあつてたこと。節操な

「いろんなこと考えた。俺、そっちの世界の人間なのかなあって。

高校の時そういうことがあって、自分が自分で嫌になつて普通の世

界の人間じゃなくなつてしまつたような気がして、忘れたくて。で

も、結局お前に同じことをしてしまつた。嫌で嫌でしようがないの

に、本当は俺はそういう人間なのかなあって。今でもわからない。

（僕だつてわからない。）

（問われたらどう答えていいか知らない。扶美のことをずっと忘れられずにいた。今だつて忘れていない。なのに里佳子ちゃんとも切れていない。悟のことは好きだ。それは間違いない。だが、今まで女の子にしかそういう気持ちは抱かなかつた。）

返答に困つて、彼の肩に手をかけると、

「でも、隆博が受け入れてくれて嬉しかつた。認めたくないって思いながら、それでも自分の気持ちをどうすることも出来なかつたし。どうしていいかわからなかつた。隆博が受け入れてくれなかつたら、多分俺駄目になつたかもしれん。」

彼が小さな子供のように見えた。少し震えて、自分の気持ちに戸惑い、自分で自分を否定して、そして救われようとしているような幼い子供に。

彼が僕の目を見た。悲しそうな不安そうな目。

衝動的に自分の口を思いつきり彼の口に押し付けた。その反動で僕らは砂浜に倒れた。髪の毛や服に砂がつくのも構わず、むちゃくちゃに口を押し付けた。いきなりキスをされて息が出来ず、むせて咳き込む彼を押さえつけるようにして、何度も何度もキスをした。歯が当たる音がして、唇が切れて血が出てるのがわかつたけど、構わず僕らは砂浜を転がるようにして抱き合つた。

「いな。俺。お前にまであんなこと…。」

自分を否定していじめているみたいだ。

「そんな言い方…。」

そうしたかった。そうせずにいられなかつたんだ。

僕らは落ちていこう。それがどこかはわからないけど。もう、ひとりにはさせない。

悟は何も言わなかつた。放心したように僕にされるままだつた。波の音がした。砂まみれになつた僕らは、何も言わずにじつと長い間そのままの格好でいた。焚き火が燃えるぱちぱちといつ音を遠くに聞いた。

何が正しくて、何が悪いのか。その基準はじつに曖昧だ。世間ではタブーだとされていることが本当は善なのかもしれないし。良いこととされていることが人間の心を蝕んでいくこともあるに違ない。

僕らはその境界線にいた。「のまま」に留まることはふたりにとってはマイナスになることかもしれない。

マイナス要因とは、世間一般にいわれるタブーとされることを僕らは共有してしまつたのだ。

僕らに時間はない。少しづつ、少しづつ、時間がせまつっていた。僕らはそのことを忘れるように、忘れないがために、時間の許す限り一緒にいた。じつと毛布に包まって、お互いの体温を感じながら冬の夜があけるのを待つた。

一緒にいて何になる。体を重ねてそれが何になる。前の僕はそう思つて自分の心を封印していたけど、今はそれだけを心が欲してることだつた。

ふたりでいると何もかも周りのことを忘れてしまう自分がいた。悩みがあるなら話せと言つてくれた裕樹の顔も健一も、学校の授業のことや将来の夢さえ意識の外にあつた。このことが後になつて僕らをどう変えてしまうか。心にどんな影響を与えるのか、何もわからなかつた。今、ここに彼がいることだけが僕の心に充足感をもたらしていた。

芙美のことだ。自分の気持ちに素直になれず手放してしまつたも

の大きさに後悔をして、月日を過ごしたことを考えた。欲しいものを感じるということによつて、失うもの。それは必ずあるだろう。夢を見ている渦中の者にはそれが何なのか、どのくらいのもののか推し量ることは出来ない。すべて、夢が覚めたときに見えてくるものだから。

だけど、僕はその失くしたものの多さや大きさを見て、恐怖するだろうけど、でも欲しいものを欲しいと言つたことに関しては後悔しない。絶対後悔しない。悟もそうだと思う。ずっと、僕らが欲していたものはきっと同じものだったに違いない。

どうもあの晩以来、ふたりして風邪を引いたらしかつた。

当然といえば当然だな。酔つ払つていうつちはいいが、酔いが覚めた途端、冬の海の寒風にさらされ芯まで冷えて、おまけに砂浜に転がつていたんだから、風邪を引いても当たり前といえば当たり前の展開だ。

店内に心地良いジャズの音色が満ちている。

僕が鼻を啜りながら客のオーダーを聞いていると、オーナーが何してて風邪引いたんだと、聞いてきた。

僕は顔が赤くなつた。まさかこのくそ寒いのに、海辺で遊んでたなんて言つたら怒られる。オーナーは半分親代わりみたいなもんだから。親元を離れている僕の監視役だ。父親と彼は友人で、ここへバイトをさせておけば安心だつといふ母親の田論見は充分感じられた。

湯冷めしたみたいだと適当に返事をして、オーダーされたカクテルを客のテーブルへ持つていこうとしたら、ドアのチャイムが鳴る音がして客が入ってきた。

「いらっしゃいませ。」

振り向くと悟だつた。

「いやあ、いらっしゃい。や、いらっしゃい。」

オーナーの方が嬉しそうにカウンターへ手招きする。それを見て

僕はちよつとむつとした。
僕の客なんだけど。

そうなんだ、最近オーナーは彼がお気に入りみたいだ。どうも、音楽にも（何にでも秀でていると感心するばかりだが）詳しい悟とは話が合うみたいで、ジャズのことから始まって、いろんな話で盛り上がるみたいだ。だから彼が来るとオーナーは嬉しそうに話し込むので結局、僕に会いに来てくれたのにほとんど僕とは話らしい話も出来ない。だって、僕が客の相手からカクテルまで作らないといけないんだもの。オーナーが話し込んでしまって動かないからだ。悟は、今日は薄いグレーのシャツに、黒のウールのジャケットを着ている。

「どこへ行つて来たの？」

小声で聞くと、聞こえなかつたらしい。

「なんや。」

田尻に皺を寄せて笑顔をじわじわに向ける。その表情にどきどきした。

よそいきらしい服を指差すと

「ああ、用事があつて東京へ行つて來たんだ。」

それでか。いつもジャケットなんて着ない、ラフな格好の方が多いので、もの珍しくじつと見てしまう。彼は背が高くて肩幅もあるので、ジャケットを着るととてもよく似合つた。

オーナーもそう思つらしく、今日は男前だね。いつもよりもね。なんて言いながら、いつも彼が飲むソルティドッギを作りはじめる。東京へ行つたことをそれ以上詳しくは聞かなかつた。彼には彼のもうひとつ的生活があるし、いろいろと用事があるらしいがあえて詳しいことは彼も話さない。

「すみません。」

背後で客が呼ぶ声が聞こえた。応対に出て戻ると、やつぱりオーナーと悟は何やら楽しそうに話をしていた。

「オーナー、ギムレットとサイドカー。」

注文すると

「隆博、作れるだろ?」

僕に任せる気だ。ここ最近いつもなんだから。しょうがなくシェーカーを振る。そして、それからずっとオーナーは腰を落ち着けたままだつたので、諦めて僕は客の応対に追われていた。むすつとしたのが表情に出てたのかな。トイレに立つた悟が僕の側に来て、「むくれるなよ。後でうちで飲みなおそう。」と囁いた。

今日は客の入りが良く店内も華やいだ感じだ。クリスマスが近く、店内にはツリーが飾られ、電飾の飾りや窓辺に並んだポインセチアの赤が華やかな雰囲気を醸し出している。こここの店の客層は男性客が多いが、最近は若い女の子やカップルも目につく。

客の応対に追われながら、ちらちらとオーナーと彼の方に目をやると、オーナーが何かを彼に頼んでいるようだ。それに対し悟が、出来ないとでもいふうに手を振つて困つた顔をしてゐるのが見えた。

（何だるひ？）

そう思つても僕は忙しくその話の輪に入れないで遠くから見ていると、悟がしじうがないなあとでもいふうに肩をすくめ、オーナーに追い立てられるようにピアノの方へ向かうのが見えた。

（ピアノ？）

実は店の奥にまちよつとしたステージがあつて、グランピアノが置いてある。

ここ最近はやつてないんだけど、前は歌い手さんを頼んでジャズっぽいのや古い映画に使われたムーディな曲を（これはオーナーの趣味、？カサブランカ？でハンフリー・ボガードがピアノを弾きながら歌う？Time goes by?とか）ピアノで演奏しながら歌つてもらつたりしていた。

以前来もらつていたクラブ歌手の女性が故郷へ帰るから、と辞めていった辺りから、どうもオーナーのお眼鏡にかなう歌い手さんがいなくて、そのままピアノは埃をかぶつたままだつた。それでも時々は僕が掃除して、オーナーが調律もしていたので、たぶん使えると思うけど。

何でオーナー自分でやらないの？と聞いたことがあつた。だつて

一回レイ・チャールズをやつたのを聞いたことがあって、ものすごくうまかった。でも、オーナーは俺が歌手になつてしまつたら店のことは誰がするんだ?って言つて、聴くほうがいいなと呟いた。それつきりだ。

悟がピアノの前に座つた。

(弾くのかな?)

そう思つてオーナーの方を振り向くと、彼は腕を組んで満足げに悟の方を見守つていた。

鍵盤をたたいてちよつと音を合わせていた彼が、おもむろに鍵盤に指を滑らせながら歌い始めた。

Oh Danny Boy the pipes the pipes
are calling
From glen to glen and down the
mountainside
The summers gone and all the
oses falling
It's you It's you must go and
I must bide

へえ。僕は感心した。彼の甘い歌声に。こんな特技があるなんて知らなかつた。人前で歌うことなんて苦手そうなのに。

カウンターに戻りオーナーの顔を見ると、

「ダニー・ボーイか。いい声してるね。」

「何でもいいから好きなの一曲やつてつて頼み込んだんだ。」

歌つている彼を見て、映画?メンフィス・ベル?のハリー・ゴーリック・Jr.を思い出した。ダニー・ボーイはアメリカの古い古典でロンドンデリーの歌詞を変えたものだ。

ハリー・ゴニックJr.はジャズボーカリストでこの映画でデビューを果たした。

映画の中でのハリーの役は、第2次世界大戦中の1943年にナチスドイツの軍事基地を攻撃するため、イギリスから飛び立つ「B-17爆撃機メンフィス・ベル」に乗り込む若い兵士の役。その彼が兵士の慰安パートで白けた場を救うために、飛び入りでステージに上がり歌うシーンがあつて、その時彼がピアノを演奏し歌つたのが「ダニー・ボーイ」だ。甘い歌声と現役ジャズボーカリストの彼の歌にため息が出るような素敵なシーンだつた。古い映画だけ映画の好きな母親のデッキにあつたのを観たことがあつた。

... Sunshine or in shadow

Oh Danny Boy, Oh Danny Boy
I love you so .

最後のフレーズの“Danny...”と歌つといろで彼と目が合つた。

キイから目を上げたほんの一瞬、視線をふつと横に流すような動きがなんだかセクシーでどきつとした。

映画の中でのハリーもこのフレーズのところで、ダニーという仲間の若い兵士にじつと流し目をするシーンがある。そのシーンを思い出して僕はひとりでにやにやした。彼もあの映画を観たことがあるんだろうか。

「何にやにやしてるんだ。隆博。」

オーナーに声をかけられてどきどきしながら

「メンフィス・ベルって映画知つてます?」

「いや。」

「ハリー・コニック Jr.は?」

「ああ、知つてるよ。ジャズボーカリストだな、彼は。」

オーナーにその映画にハリーが出ていて、ダニー・ボーイを歌うシンがあるのだと説明すると、なるほどね。とうなずいた。

あちこちで若い女性客が悟のことを囁いていた。

“うまいわね。彼。” “素敵、声がいいわ。”

近くのカウンターに座っていた女の子が僕の袖を引っ張った。

「彼このスタッフ？新しい歌手を入れたの？」

「いえ、スタッフでも歌手でもないですよ。あれ、僕の先輩。」

「へえ、プロなみね。」

女の子は彼に熱い視線を送っている。僕は鼻が高かつた。

「しかし、うまいですね。彼にこんな特技があるなんて知らなかつた。」

「特技っていうか、これで食つてたらしくよ、彼。」

「えつ？」

驚く僕に説明しようとオーナーが口を開きかけたら、ちょうど曲が終わつた。ステージの方に視線を向けると、ピアノから離れようと席を立つた悟を、近くの席に座つていた女の子が2、3人彼を囲んで何やら頬み込んでいる様子だつた。悟は困つた顔をして首を振つていたが、あんまり熱心に女の子たちが頬むので、うんうんと頷きながら彼女たちが言うことを聞いていた。

「リクエストかな？」

オーナーが見ていると、悟がこちらに人差し指を立てて合図していた。

「もう一曲か。」

オーナーが頷きOKのサインを出すと、

もう一度ピアノの前に座つた。

I , m walkin' , yes , indeed .
I , m talin' , about you and me .
I , m hopin' , that you , 11 come bac
k to me .

さつきとは違つて、ちょっとアップテンポなメロディ。

彼が歌いだすと周りの女の子たちが黄色い歓声を上げた。

「ジャズ？」

「知らない聞いたことのない曲だ。

「古い曲だね。ファシツ・ドミノの? I, M Walkin, ?だ。悟くんよくこんな曲知ってるね。いくつだ? 彼。」

オーナーは感心するように僕に説明してくれた。ニューオリンズ生まれのピアニスト兼歌手のファシツ・ドミノの1957年の大ヒット曲で、R&Bを代表する一曲。アップテンポな楽しくなるようなメロディに、わかりやすい歌詞。すぐにメロディを覚えられそうだ。

深みのあるハスキーな彼の甘い声につつとりした。オーナーもひとこと「惚れるねえ。」と満足げだ。細い指でキイを叩き、マイクに向かう。ときおり前髪をかきあげながら歌う彼がとてもセクシーだ。

僕は店の壁にもたれながらその様子をじっと見ている。女の子たちが彼の歌う姿をじっと熱い眼差しで見ている。彼はそんな周りの様子など意に留しない様子で、自分の世界で音と遊んでいる。外では見せない子供のような無邪気な楽しそうな表情。リズムに身を任せ、音にすべてを委ねている。僕はじっとその表情を見ていた。

この時間も過去になつていくのだろう。人間の記憶なんて実に曖昧だからね。今この瞬間の悟の表情も、その着ている服も、奏でているピアノの音も、後で思い出そうとしても細かい部分まではもうしつかりとは思い出せないようになつてくるだろう。もうこのままでここで止まつて欲しいと思うような瞬間でさえ、すでにそう思つた瞬間に過去の物になつていくのだ。

What you gonna do when I say goodbye.
All you gonna do is dry your eye.
I'm walkin', yes, indeed.
I'm walkin', yes, indeed.

最後のサビの部分に入る。その時、ドアのチャイムが鳴つて客が入ってきた。

「いらっしゃいませ。」

2人連れの中年の男性客。一方のちょっと小太りな男性客が悟の方を見て、おやつという顔をした。知り合いかな？

カウンターしか空いていなかったので、カウンターでよいかと聞くと、それで結構だと頷いたので2人をカウンターへ案内した。小太りな方が連れの客へ何やら囁き、悟の方に目をやつたので、連れの客も首を回して悟の方を見た。

？へえ、やるねえ。？などと囁いているのをオーナーが聞いて、知り合いですか？などと聞いているみたいだ。

僕は離れた場所で客のオーダーを聞いていた。そういうしていると、歌が終わつて彼がこちらへ戻つてきた。戻つてくるのもひと苦労していたけどね。女の子たちが彼に携帯やメールアドを聞こうと必死になつていたから。

僕はますます面白くない。カウンターへ戻つてきた悟に、オーナーが？良かつたよ？などと言い、褒めていた。悟は鼻を啜りながら「風邪気味で、声があまり出なくてすみません。」

頭を下げた。

オーナーが僕ら2人を見て

「何やお前ら。2人して風邪引いて。怪しいな。」

「僕はどうせつとしたりけど、彼は、
「何言つてるんですか。澤崎さん、冗談つきつりますよ。」
などとけりりとしている。

オーナーが？カウンターのお客さん、悟くんの知り合いらしによ。
？と、声をかけた。

彼がそちらの方へ目をやると、小太りの方がやあ、といった感じ
で片手を挙げた。

「あ、森下さん。」

知り合いらし。

「どうしたんですか？」このお店、よくみえるんですか？」

森下さんと呼ばれた小太りの方が

「彼がいい店があるからつて連れてきてくれたんだよ。」

連れを指差すと、もう片方の男性客が、

「こんばんは。」

頭を下げたので、悟も丁寧に頭を下げた。

「何？水木くんはこの店で働いているの。」

さつきのピアノのことを言つてゐるみたいだ。

彼は恥ずかしそうに

「変なところ見られちゃつたな。」

「いやあ、僕が無理やり頼んだんですよ。彼ピアノやつていたつて
いうから。」

オーナーが口を挟む。

「いや、うまかつたよ。すごいね。」

そのやりとりを見ていた悟が、僕の方を振り返り手招きした。

彼らの側に行くと、

「森下さん、これ僕の後輩なんです。堀江隆博くん。」

僕を紹介してくれた。

「こんばんは。初めてまして。」

頭を下げる悟と、森下さんと呼ばれた彼が

「初めまして。よろしくね。」

スーツの内ポケットから名刺入れを取り出し、名刺をくれた。

名刺には『株式会社ダイナ・ランゲージサービス 第2営業課部
長兼翻訳コーディネーター 森下光雄』とあった。
(翻訳コーディネーター?)

会社名を見て驚いた。翻訳会社の大手だ。悟の翻訳の仕事先?
名刺を眺めていると、悟が勝手に僕を自分の後釜にと、森下さん
に売り込んでいた。

まだ、返事していないのに。僕が戸惑つた顔を向けると、悟はに
こにここと頷いた。

(大丈夫だつて)

(ええ、そんなあ)

2人して視線でそんなやり取りを交わしていると、森下さんが、
「堀江くん、やってみないか?」

と、声をかけてきた。

「僕、まだ勉強中で。」

「実践を積むことも勉強になるよ。」

「そうだよ、やってみるよ。俺も面倒見てやるから。」

と、悟。森下さんは続けた。

「水木くんは優秀でね。翻訳をやりたいという会社に登録していく
ださる人は『まんとい』るんだけど、その中でも彼は仕事を安心して
任せられる数少ない人材でね。納期はきちんと守ってくれるし、仕
事は硬い。学生さんなのにほんとよくやってくれてね。ずっとうち
は頼みたかったんだけど、東京へ就職するつてことを聞いてからほ
んと困つていてるんだ。」

「水木くんに前から君のことは聞いていたよ。出版翻訳がやりたい
つてことはわかっているけど、勉強のためにいろいろなことをするの
も身につくからね。実務翻訳は数が多いし、結構仕事があるよ。通
信、ネットワーク、コンピューター、特許、法律、証券などジャン

ルはいろいろあるけど、最初はあまり専門性のいらないものからやつてみて。堀江くんもコンピュータやネットワーク関係は強いらしい。水木くんと同じで。仕事が一番多いジャンルだからすぐに仕事をお願いできると思うんだけど。」

どうしようか？悟の方を見ると、

（やれ、断るなよ。）

きつい眼差しが飛んできた。それで、森下さんに、「じゃあ、一度お話を伺わせて下さい。」

そう言つと、年明けに会社に面接に来て欲しいといわれた。トライアル（試訳）をしてみてOKなら登録して、ということでお話は進んだ。隣にいる連れの彼も会社関係の人らしい。この人にも名刺をもらつ。

さて、彼らが帰つてから

（急なんだから。）

困つたふうに口を尖らせると、

（何言つてんだ。お前ならやれるよ。）

有無を言わせない口ぶりだ。

忙しくて結局店ではそれ以上話が出来ず、店が引けるのを待つて彼の家で飲み直すことにした。

深夜12：00過ぎ。彼の家のキッチンでオムレツとキノコのガーリックソテーを作る。東京から飛んで帰つてきたが、演奏を頼まれたり、翻訳会社の取引先の人にはつたりで、店でつまみらしいままも食べられなかつた悟が、腹が減つたから何か作れとうるさいのでキッチンに立つている。

にんにくをスライスし、フライパンの火を弱火にしてオリーブオイルでこんがり狐色になるまでソテーする。1回取り出し、エリンギ、シメジ、マッシュルームなどのきのこ類を入れ炒める。塩、コショウして取り出し、こんがり狐色にソテーしたガーリックを散らす。

次はオムレツ。ボールに卵を割りいれ、塩、コショウ、コンソメ、牛乳で味をつけ、たっぷりのバターを引く。卵を流し入れ、箸で寄せながら焼いていると、キッチンに入ってきた悟が、「すごいな。料理が出来るなんて。」

感心しながら僕の手つきを見ている。

「これくらいの簡単なものしか作れないよ。」

「でも、すごいわ。」

食い入るように僕のフライパンをぱきに見入っている。

そうなんだ。悟は全く料理が駄目なんだ。勉強、スポーツ、音楽、なんでもトップクラスの超人なのに唯一の弱点は料理だ。インスタントラーメンですらろくに作れない。かろうじて、カップめんにお湯を注いで食べるくらいだな。後は外食。

高校の時ひとり暮らしで料理もまともに出来ずどうしてたんだと聞くと、朝はコンビニ、昼は学食、夜は店で食べていた、と言つた。

「店?」

聞き返すと、

「そり。バイト先。」

「そつきのピアノ?」

オーナーが（これで食つてたらしいよ。）と呴つた意味を聞こうとしたが、聞けなかつた。そのことか？

「うん。高校の時、叔父さんに面倒みでもらつてはいたが、これは就職したら少しづつ返すつもりなんだけど。親父からは一銭ももらいたくなくて生活費の足しにバイトしてたんだ。」

「だけど、コンビニの店員や新聞配達なんかろくに稼げやしない。それでつてがあつてな。隣町のクラブで学校が終わつてから雇つてもらつっていたんだ。」

「未成年だろ?」

僕がよく学校にばれず補導もされなかつたもんだと、感心すると「まあ、いろいろとつまくやつてたからな。」

と、返す。

「客のリクエストに応じて歌を歌いピアノを弾く。あとは今の隆博と同じだな。客の注文を聞いてカクテルを作つたり、応対をしたり、そんな感じ。」

「でも、うまいよ。びっくりしちやつた。」

ピアノはどうしたんだと聞くと、母親が幼稚園の時から畠わせたらしい。歌は?と聞くと別に何もしてないと答えた。そして、母親にはこのことは非常に感謝していると言つた。そのおかげで親父に世話にならず、何とか高校を卒業出来たからねと、笑つた。

「や、出来たよ。食べるよ。」

「ああ。」

僕がリビングのテーブルに料理を運ぶと、彼がよく冷えたワインを冷蔵庫から取り出す。

「まだ飲むの？」

「他に何を飲めと？」

呆れた、店であれだけ飲んでおいて。まあ、いいけど。食べながらさつきの森下さんのことについてみた。

「ああ、それにしても変なところを見られたな。澤崎さんしつこいからなあ。」

眉間にしわを寄せる。とはいっても別にオーナーのことを非難してゐわけではない。

「昔を思い出しただろ。」

「まあね。」

「その時のバイト先のオーナーが、澤崎さんと同じくらいの年代の人でな。それで音楽のこととかいろいろ教えてもらつたから、澤崎さんと話が合うんだろうな。那人にはだいぶお世話になつた。飯を食わせてもらつたり、いろいろね。」

「それにしても懐かしい感覚だ。ああやつて人前で歌うのはね。」
ふつと笑つて、

「ああ、そういうばあ、あれなあ。前から頼んでおいたんだ。森下さんには。」

急に話を変える。就職の内定が決まった頃に、就職で東京へ行くので翻訳のアルバイトが出来なくなることを伝え、もし良かつたら自分の後をやらせたいやつがいるので仕事を紹介してやってもらえないかと、彼に話をしていたらしい。

「で、何で僕？」

「お前が一番見込みがありそうだと思ったからだ。」
と、真剣な顔をした。

「だつて、悟は僕のことほとんど知らなかつただろ。」

そうなんだ。夏にあの結婚のお祝い会で、飲みつぶれた彼を送つ

て行つたことがきつかけでこうなつたんだけど、それまでは学部内、ワークショップなどで悟に会つことは何度かあつたけど、話らしい話をしたことがない、彼が自分のことを知つていたことが驚きだつた。

「何言つてゐるんだ。お前は知らんかつただろうがな。俺はお前が1年の時からずっと見てたよ。」

珍しく顔を赤くする。それは意外だと聞き返すと、

「お前さあ、熱心に勉強してたしな。まず入学出来たことに浮かれて、サークルや合コンやらにうつつつを抜かす新入生も多いのに、お前真面目でなあ。」

それは自分がアルコールを分解出来ず飲めないので、あまりそういう行事に参加しなかつただけだと返すと、

「いや、俺わかるんだ。きちんと目的をもつて入つてきたヤツは。俺も必死に勉強したもん。まあ、俺の場合は親父に対する反抗心だけだつたけどな。とにかく勉強して学校を卒業して一人前になつて、早く自立したかったんだ。そして自分のやりたいことを叶えたかった。そのためにはとにかく何でも一番になりたかったんだ。」

この人は樂そうに何でも出来るみたいに思われてゐるけど、人の見ていな所でどのくらい努力していただろう。やっぱりすごい人だ。

「ワークショップでの課題さあ、みんな読んだよ。」

「僕の？」

「そうだ。」

知らなかつた。初耳だ。

「お前さあ、原文よく理解してゐるし、訳にセンスあるよ。文章は独りよがりでない論理的な日本語を使つてゐると思つたし、なんか透明な空氣みたいなものを感じるんだよな。それがひどく心地良いようだな。」

「何それ？」

「まあ、これは俺の個人的な感想だけど。それに、わからないとこ

ろは手間隙惜しまず、本当に丁寧にネットで調べたり、先輩らに聞いたりしてやつてるとこを見て信用出来るやつだなあと思って、ワークショップの課題を最初からずっと田を通させてもらつたよ。」

知らなかつた。全部読んでるなんて。あまり褒められる恥ずかしいなあ、と思いながら聞いていると、「まあ、それだけではないけどな。」

（何が？）

聞き返そうと思つたが、口をつぐんだ。何かを思い出すような遠い目をしたからだ。それにしても彼が僕のことを1年の時から見ていて、こんなに見込んでくれていたとは思いもしなかつた。ひどくそれが照れくさくて、しかし嬉しかつた。自分がどこまでやれるかわからないけど夢に近づけるかもしれない。なんだか胸がわくわくした。

「隆博は固いし、しつかりしている。この仕事は思つたより地味だからな。とにかく納期厳守。守秘義務は絶対だ。最終チェックは念入りにして。たぶんこんなことは言わなくてわかると思うけどね。お前は。あまり自信のない分野のものは断つていいからな。」

「断つていいの？」

「自信のないのをやつて迷惑がかかるといけない。自分の身の丈に在つたものから確実にな。」

それから、彼は仕事の事についてあれこれと教えてくれた。

納期厳守、守秘義務、最終チェック、手間隙かけずわからないことは納得するまで調べること。良い文章に触れて日本語の読み書き能力を高めること。専門分野を持つよつに勉強すること。訳文に自信のない箇所は明確にコメントをつけて提出すること。入手可能な資料を最大限要求すること等々。

面白いところではスラング的な述語や商品名は訳語を見出すまでに苦労したことや、意味不可能な長文の英文。ネイティブでも間違えるスペルなど、苦労もいろいろみたい。

でも、結局僕はやつてみることに決めたので、年明けに森下さんの会社へ行つてみることにした。この件に関しては悟が話してくれる。試験前やレポートの提出などに困ったときには、彼は面倒くさがらずに今まででも教えてくれて、とても助かっていた。今度の件も出来る限り教えてやるからと言つてくれた。

どうして彼は僕に目をかけてくれるのだろう。自分だって今が一番忙しい時なのに。可能な限りこちらにいて時間を作ってくれる。もうそんなに時間がない。充分わかりすぎるくらいわかっていることだ。それを彼も感じているのだろう。

酒で酔つたせいもあり、眠くて眠くて仕方ないのに、それに抗うようにしてお互いを求めあつ。そつと唇に触れる。ゆっくりと深い海の底へ、そこは暖かくてゆつたりとしていて、穏やかな時間が流れる。その心地良さに僕は身を沈める。

夢を見ているような感触だ。彼の体温を感じる。すると、徐々に自分の芯の中心がじんわりと熱を持ったように、熱くなつていいく。それと同時に、彼の肌も熱を帯びたように熱くなつていいくのを自分の肌で直に感じる。僕らはだまつてただ、その行為に没頭する。女の子のそれとは違つ。

徐々に波が押し寄せせる。小さな波が足元へ。少しづつ大きな波になつて、足元からあつという間に膝までの高さになり、腰を覆い胸につくまでになり、僕を飲み込もうとする。その波に呑まれまいと必死になつて岸壁にしがみついていると、それが苦しいのか心地良いのかわからなくなつていいく。どのくらいの時間が経つたのか、どこに自分がいるのかさえ、わからなくなつていいく。

いや、違う。この腕は彼の腕だ。そう、彼の腕の中だ。

終わると、彼はサイドテーブルの灯りをつけ、肘を突いて上体を起こしてタバコに火を点けた。

「隆博も吸うか？」

素直に1本もらう。今までタバコはあまり吸つたことがなかつたけど、彼とつき合つようになつて少しばかり吸うようになつた。

彼は黙つて紫煙の流れを見つめている。

「おもしろいだろ。タバコの煙つてさ、見てて飽きないよ。」

それからちよつと考へたように、じつと天井の1点を見つめながら

「年明けまで会えん。」

と、呟いた。

「ああ。」

と、だけ返事する。

クリスマスから年末年始にかけては乃理子さんの元に行くのだろう。

彼女の顔を思い出した。ふくよかで優しい顔立ち。彼女には何の落ち度もない。あの人は疑うことなく、悟の帰りを待つているのだろう。強い人だ。

頂点に達するとき、いつも思う。このまま悟を放したくない。どこへも行かせず、ここに留まらせることが出来たら、と思う。でも、それは無理だ。そのことを話したことはない。話すつもりもなかつた。

タバコの火を消して、眠りに着く。悟はいつも背後から僕を抱いて眠る。何故正面から抱いて寝ない。理由はふたりともわかっていた。僕の首に腕を巻きつけて、赤ちゃんを揺らすように、ゆっくり鼓動に合わせて僕の体を揺らす。その一定のリズムが心地よくて、うとうとと眠りに落ちていく。

ふいに彼が囁いた。

(隆博、東京へ来ないか？)

ぼんやりとした頭にその言葉だけははつきり聞こえた。でも、何も答えず、僕は眠っているふりをした。

(眠ったのか？)

彼は半分眠っているみたいな声を出した。それでも僕は何も答えなかつた。

学校も休校になり、今年もあと残りわずか。

裕樹は年末から正月にかけて帰省すると言つていたし、健一は何やら楽しい予定があるみたいだ。

聞くと、新しい彼女が出来たらしく、クリスマスから年末年始にかけてはデートで忙しいらしい。そんな話を聞いて、ふと里佳子ちゃんのことを思いだす。

結局あれから会つていない。普通に付き合つてているなら、健一みたいにクリスマスには食事したり、お正月には一緒に初詣に行つたりして過ごすのが普通なんだろうけど。

クリスマスもずっとバイトで忙しかつたから、それを理由に断つていたらぱつたり彼女から連絡がなくなつていった。でも、それで良かったのかもしれない。いや、それで良かつたんだ。

僕は自分から話をするのが苦手な方だから、彼女みたいに明るくて、いろんなことを話してくれる里佳子ちゃんが一緒にいて楽で、乐しかつたけど、だけど彼女の気持ちに応えられない以上、こんなふうにずるずるとはつきりしないまま付き合つていてはいけないところくらいわかつていた。

だけど、何となく寂しかつた。裕樹も健一もいない冬休み。悟も。部屋でうだうだと何をすることもなく過ごしていると、あつといつまに今年も後4日になつてしまつた。

どうしようか。たまには実家へ帰るかな、などと珍しくふと気弱になる。そこへタイミングよく地元の同級生から、お正月にみんなで集まつて飲むから来いよ、と誘いがあつた。大学や就職などで地

元を離れていくやつらが帰つてくるので集まろうとこうことりしこ。
僕の気持ちは決まつた。適当にバックに荷物を放り込むとアパートを後にした。

実家へ帰ると母親が忙しそうに大掃除をしていた。そして、僕の顔を見ると

「いやあね。この忙しいときに帰つてきたの。」

と仏頂面をした。でも、田元が笑つている。

「たまには帰れつて、いつも言つじやないか。」

バックを玄関先に放り出すと、

「もちろん、掃除手伝いに来たのよね。」

母が笑つた。

「別にいいけど。何?」

腰を落ち着ける間もなく、家中の蛍光灯を掃除しろだの、天井の埃を取れだの掃除の手伝いをあれこれと指図し始めた母親の手伝いを始める。

「親父は?」

「30日まできつぎり仕事よ。」

「よかつたわ。母さんひとりで大変だつたの。」

「千夏にやらせりやいいじやん。」

妹のことを言うと

「駄目よ。あの子もきつぎりまで部活があるのよ。年明けすぐに大會があるからね。」

吹奏楽のことだ。

「なんだ、間の悪いところに帰つてきたみたいだな。」

「あら、いいじやない。隆博が一番暇そうだし。」

「まあ、いいけど。」

蛍光灯を外しながら近くで窓拭きをしている母親と話を続ける。

「なあに。デートする彼女くらいいないの?」

「さあね。」

「あら、寂しいわね。可哀想に。」

けられら笑い出す。何が面白いんだ。まつたく。

「つるさいな。」

ちょっとむりとして言い返すと、

「そう、かりかりしないで。掃除が終わつたら」飯食べさせてあげるから。」

彼女は真剣に取り合わない。

まあ、いいけど。僕は母親にあれこれ指図されるまま、大掃除に没頭した。

でも本当はほつとした。ひとりでいるときのこと、里佳子ちゃんのこと、考えると不安になることばかりだ。でも、いつもやつて体を動かし、いつも冗談を言つている大らかな母親と、他愛もない話をしていると気が和んだ。

午前中一杯掃除にかかりきり、少し遅い昼食を母親と食べた。久しぶりに家の台所で食事をする。

「カレーだけといわよね。」

「うん。」

「昨日から煮込んであるのよ。」

母が皿に盛つてくれる。ジャガイモがいっぱい入つたカレー。僕の子供の頃から変わらない。それを母親と向き合つて食べる。母親とふたりで向き合つて食事をするなんて本当に久しぶりだ。なんだかこういうのもたまにはいいな。

「隆博。たまにはいいわね。ふたりでこつやつして」飯食べるのも。思つていたことを母親が口にした。

「今、僕もそう思つていた。」

母さんは嬉しそうに笑い、

「何日までいられるの?」

と、聞いた。

「学校が10日まで休みなんだ。別に予定はないからいつまでも

いいんだけど。」

「お休みはどこへも行かないの？」

「同級生で集まるんだ。まだいつかわからないんだけど。誘われたからそれで帰ってきたんだ。」

「そう。まあ、ゆっくりしていったら。いつも家にいないんだもの。

きっとお父さんも喜ぶわ。」

「うん。」

母さんは久しぶりに帰ってきた僕に始終満悦だった。

僕はふつと聞いてみたい衝動にかられた。

(僕がどんな息子でも、そりやつて笑って僕を迎えてくれる?)

母さんが

(何?)と田元を緩めた。

「ううん。何でもない。」

その夜遅く、父親が帰つて来て、千夏と喧嘩しながら母親の手伝いで食事の支度をしている僕を見てびっくりした顔をした。

「なんや、隆博、帰つてきたんか？」

「ううなお父さん。珍しいでしょ？」

母さんはにこにこ顔だ。

「お兄ちゃん帰つてくるとわかる、つむといいんだもん。」

「何喧嘩してるんだ。」

「卵の割り方が下手だとか、塩が多いとかいろいろつむといいんだもん。」

「手伝つてくれるのないいんですけどね。隆博が千夏のすることが心配みたいで。」

だつて、千夏は女の癖にやり方が荒くてと、父親に愚痴ると、「まあ、喧嘩せんようになんやれよ。千夏が母さんを手伝つているんなら、隆博はこいつちへきて俺の相手をせい。」

父さんは着替えながら手でグラスを傾けるしぐさをした。台所からビールを取り出し、グラスをふたつ持ち居間のテレビの前の自分の席に陣取る。この父の席も僕が子供の頃から変わらない。「あ、隆博は飲めんかったな。」

グラスにビールを注ぎうとして、はつとした顔をした。

「いや、少しふらになら飲めるようになつたんだ。」

と、言つと、

「へえ。まだびうした。」

父は、嬉しそうにグラスにビールを注いでくれた。父さんと向き合つてこんなふうにビールを飲むなんて初めてのことだ。この役は飲める兄貴の役だった、いつもは。

「父さんはねえ、隆博といっせつて飲めるのを夢見てたのよね。」

母さんがつまみをもつて居間へやつてきた。父さんの顔を見る。

「本当は、お前と孝一といつしで3人で飲めたらなあ、といつも思つてたよ。」

孝一は僕の兄貴だ。

「そつなんだ。父さんがそんなことを思つてたなんて知らなかつた。」

父さんは学校のことなど僕の近況をあれこれと聞いた。いつもならそれが煩わしく思うのに、今日は何だか父さんと素直にいろんな話が出来そうな気がした。

母さんと千夏が台所からおかずを持ってきて並べた。大掃除で忙しいのであまり手の込んだ物なんて作れないわよ、と言いながらも、母の得意料理が何皿も並んだ。シチューは僕の好物のビーフシチューだし、春巻きや、サラダや茶碗蒸しなど手の込んだ物ばかり。久しぶりに家族4人で食卓を囲む。

兄貴は結婚して別所帯を持っているのでいない。年末から正月にかけては帰つてくる予定らしい。

「ひさしひだわ。皆が揃つお正月なんてね。」

母さんは嬉しそうだ。たぶんこの分だと明日からまた張り切つておせち料理を作つたり、準備を始めるんだろうな。

「兄さんは元気？」

「ええ、たまに覗いてくれるわよ。うんとも、すんとも、言つてこないあんたとは大違ひね。」

「僕を睨む。」

兄さんは結婚して5年ほどになる。子供はまだいないが、子供好きな母親は早く兄貴の子供が見たいらしい。それから千夏の学校の話やら、母さんが最近始めたフラダンスの習い事の話やらが話題に上がつた。父さんは嬉しそうにそれを聞いている。あまりあれこれしゃべる人ではない。

その日はあつという間に終わつた。2階にある、高校卒業まで使つていた自室に母親が布団を敷いてくれた。

ずっと一緒にいるとうつとおしく思うもので、早くひとりになりたい、自立したいと焦っていた。母さんの干渉やまとわりついてくる千夏のことや、厳しくあれこれ口を出してくる父さんのことが嫌だと思うこともある。でも、こうやって久しぶりに家に帰つて来て思つのは、離れていると家族のありがたみがわかるもんだなあといふことだった。母さんの始終嬉しそうな様子がなんだか嬉しかった。布団に入ると急に、大掃除の疲れが出たのか眠たくなってきた。久しぶりにぐっすり眠れそうだ。

大晦日の晩になつて、携帯に里佳子ちゃんからメールが入つた。

『今夜は雪になりそうですね。良い年を迎えてね。』

短い一文。急に彼女が何をしているのか気になつて仕方がなくなつた。

反射的に彼女の番号を検索する。3メールで彼女が出た。

「隆博君！」

驚いたような大声が耳に響いた。

「ごめん。ずっと連絡しなくて。」

謝ると、

「つうん、大丈夫。バイト忙しかつたんでしょ。え、今日はどうしたの？」

実家に戻つていることを伝えると、彼女も実家で掃除の手伝いなどをしていたと言つ。

急に思いついて、

「あ、夜さ、同級生と集まるんだ。初詣行つてみんなと飲むんだけど。良かつたら一緒にどうかな。」

同級生のやつらは皆、彼女を伴つてくるらしい。それを聞いてやはりふと里佳子ちゃんの顔が浮かんだのは否めない。そこへタイミングよく彼女からのメールだ。

「そうなの。行つても大丈夫？」

「全然平気。迎えに行くから。」

実家から彼女の家までは割りと近い。駅まで迎えに行くから、待ち合わせ時間を決めた。

携帯をきつてから、僕は自分の不可解な行動に考えを巡らせた。みんなが彼女を連れてくるから、里佳子ちゃんを誘ったのか。タイミングよくメールが入ったからそうなったのか。それとも、僕は彼女をまだどこかで求めているのか。それは恋人として、友達として。

どういう感情なのか自分でもはつきりわからなかつた。でもやはり彼女のことはどうどこかで好きだと思っているのだとは思う。

夕方になつて兄貴が義姉さんを伴つて帰つてきた。2日までいるそうだ。その夜、皆で食卓を囲み、紅白歌合戦を見た。母さんはかいがいしくいろいろな物を作り、義姉さんと千夏がそれを手伝つた。僕ら男性陣はとにかく飲んでばかりだ。

10時近くになつて、駅まで里佳子ちゃんを迎えて行つた。その足で、同級生の家にふたりで赴く。もうすでに何人かの同級生が集まつていて、それぞれが彼女を連れてきているので、華やいだ雰囲気に包まれていた。何年ぶりかで会うメンバー、だけど昨日も会つていたかのようにすぐに打ち解け、楽しい時間を過ごせる。

やはり、昔の仲間はいい。そして、皆で初詣に出かけ、また家に集まつて飲んで過ごした。こんなに何も考えず楽しんだのはひさしぶりだ。いつも楽しんでいるつもりなのに、今日は本当に楽しかつた。近況を報告したり、昔のばか話をしたり。正月はそんな感じで地元の友達に会つてしまつたり飲んだりして終わつた。

合間に母さん孝行をした。家族でも初詣に行つて、母さんを初売りにデパートへ連れて行つたりした。

そして正月休みが終わり、兄貴は帰つていき、父さんは仕事へ、千夏は学校へ出かけていった。僕も家でじろじろしていたが、そろそろ大学も始まるし、帰ることを母親に伝えると、ちょっと寂しそうな顔をしたが、すぐに気を取り直し、？また近いうちに帰つてき

なさいよ。
？と笑つた。

学校が始まって一週間ほど経つある日。

久しぶりに悟から連絡があった。年末に話のあつた翻訳のバイトの話。森下さんから会社に来てくれるよう電話があつて、翌日伺うと返事したと言つ。

まったく、いつも僕の予定なんか聞かないんだから。
急いで履歴書を買いに走つた。早速、机に向かつて履歴書を書き、入学式に着たスーツを引っ張り出し、指定された場所へ向かつた。オフィス街。初めて足を踏み入れる場所だ。悟が車で送つてくれた。「一緒に行つてやりたいけど、子供の面接じゃないんだからな。俺はここまでだ。森下さんにはよく話をしてあるから後はちゃんとやれよ。」

そう、言い残して帰つていった。彼もなんだか忙しそうだ。

それで、目の前のビルの15Fにある彼のオフィスへ向かつた。僕の顔を見ると森下さんは愛想よく笑つて応接室へ通してくれた。そこで履歴書を渡し、簡単な筆記試験と適正テストを受ける。

「まあ、形式だけだけどね。」

彼は笑つた。そしてトライアル（試訳）を持つてきてくれるよつにと、A4紙何枚かの用紙を社名入りの封筒に入れて僕に渡した。「それでOKならうちの会社に登録してもらつから。出来れば長いつきあいになるとうれしいんだけどね。」

「よろしくお願ひします。」

頭を下げた。

「また登録時に仕事の流れとか、契約のこととか細かい話はその時にね。」

と言い、帰ろうとする僕を階下にある喫茶店に誘つてくれた。仕事とは関係のないプライベートな話を彼はし、僕にも学校や家族のことなどを聞いた。

あまり面識のない人とプライベートな話をするのは好きではなかったが、人懐こそうな彼なら何となく安心できた。彼はこうして人とコミュニケーションを計り仕事を円滑に進めていこうとする人なんだろうなと思った。帰ると留守電に悟から電話が入っていたので、電話をかける。

「お、どうだ。大丈夫か？」

「子ども扱いだな。」

「いやあ、そういうわけではないが、紹介した手前心配でな。」

「大丈夫だよ。今日は面接と適性検査やテストなどだけで、トライアルを見てみないと登録させてもらえないんだから。」

「そうだな。確かにそんな感じだつたな。」

「で、いつまでに？」

「一週間後。」

「そうか。手伝つてやりたいけどトライアルはダメだな。間に合つようになれるよ。」

「わかった。」

森下さんが喫茶店に誘つてくれたことを話すと、愛想のいい人でよく話を聞いてくれるし、面倒見がいいから仕事がやりやすい、と悟は話してくれた。

「数あるコーディネーターさんの中でも一番つき合ひやすい人らしいから。ま、わからんところは彼に聞いてな。」

用件だけ言つて電話が切れた。久しぶりなのに。そつけない。

ま、いいか。何かに熱中してゐる方が楽だ。今の僕には。シャワーを浴びトライアルにかかる。意外と難なく出来た。ま、これで手こずつていては話にならんがな。それでも、誤訳がないか慎重に何度も見直す。訳した表現がいまいちだと思う箇所は納得行くまで調べて直す。そして最後に何度も見直す。出来た。

一週間を待たずにトライアルを持つて彼のオフィスを訪ねる。？

早いな。？と森下さんは感心してくれた。そして2、3日のうちには連絡をすると言つた。

早速、翌日に電話があり、OKだから登録に来てくれと言われる。登録に行き、仕事の契約や流れ、注意点やいろんな話をし、書類を数枚記入し、オフィスを後にした。

？ぱちぱち簡単なからやつてみてくれ。なるべく質の良い原稿をまわすから。？と森下さんは人懐こい笑顔で見送つてくれた。

「そうか。良かつたな。」

「ああ。」

数日後、トライアルが通り登録してきたことを報告すると、悟は嬉しそうに笑つた。

？でも学業を第一にしてな。？

？そりだらうね。あんたにみたにスーパー・マンじゃないからあれもこれも出来ないよ。？

？隆博なら出来るさ。？

彼は満足そうに笑つた。

会う時間となるべくやり繕りしてくれてはいたが、彼は忙しそうだ。卒業を間近に控えてすべて単位を取つていた彼は、大学に出向くことはもうほとんどないが、住む所を探したり、乃理子さんも出産まじかだし、あれこれと忙しい。でもまあ思うような家が見つかつて契約をしてきたと話した。

彼女のことを聞くと、ま、なんとか順調だ。4月が出産予定だと話してくれた。でもその話をするとき、彼は僕の目を見ない。やましい話をするみたいに、なるべく触れたくないみたいだ。気持ちはわかる。僕も別に聞きたい話ではない。それは僕らが離れて行く日がそこまで来ていることを実感させるからだ。

最近は、悟に会う日がめつきり減つた。忙しいのはわかっている。彼はおなかの大きな奥さんを抱えている。就職に出産。すぐに家庭

持ち。変わることのない事実。わかつていたはずだ。そう、僕は期間限定の恋人だ。彼の。多分。

わかつていても納得がいかない、腑に落ちない、モヤモヤとしたブルーな感情に振り回される日々。それを誰にも言つことすら出来ない。そして里佳子ちゃんのことだって曖昧にしていいわけがない。物分りのよい彼女に僕は甘えたままだ。

何をしても手につかないし、最悪な気分だ。なのに、日常は否応なしにめぐつてくる。

部屋に帰るとFAXが山積みになつていて、何だこれはと、FAXの紙をめくつてみると、早速仕事の依頼だった。

僕はため息をついた。すると間髪いれず、森下さんから電話が入つた。

「今、FAX流しておいたんだけど、どう?」

「はあ。」

「急で悪いんだけど、頼めるかな。」

頭の中に悟の言葉がちらついた。

(とにかく最初は何でも引き受け自分を売り込め。出来ません、なんて口が裂けても言つなよ。)

「はい。やつてみます。」

「そう、助かったよ。もし、わからない」とかあつたらすぐ電話してね。社にはずつといふから。」

森下さんは愛想よく言つた。

「はい、わかりました。ありがとうございます。」

それで僕は辞書を引き、悟にPCに入れてもらつた翻訳ソフトの力も借りながら、依頼を受けた原稿の翻訳に取り掛かつた。それまで悟のことなどで一杯だつた頭の中がだんだん整理され、落ち着いていき、仕事に没頭できるようになつた。

気がつくと何時間も経つていた。熱中しているとあつと一瞬に時間が経つてしまつ。こんな時、没頭出来ることがあるといつこと

はなんとありがたいことかと、しみじみと思つてしまつた。いろんなことが気になるけど、今の時点は自分がどうしたいのかを時間をかけて考えてみる方がいいのかもしれない。

仕事が一息ついて、キッチンでコーヒーを入れる。お腹が空いたけど、冷蔵庫には何もないし、食べに出かけるには時間が遅すぎる。時計を見る。午前2時を回っている。食事は諦めることにして、タバコの火を点ける。

以前の僕は酒も飲まないし、タバコを吸うこともなかつた。悟とつきあいだしてからだ。以前の僕はもういないので、そんなことをぼんやりと考えてみた。悟と関係を持った自分。僕はもう前の僕には戻れない。

里佳子ちゃんを騙している気分になる。彼女は、扶美のことを忘れない僕を待つてていると言つた。確かに今までそうだつた。扶美のことがあって、いろんな女の子と付き合つても真摯になれない。だけど、今の僕には悟がいる。悟との付き合いが扶美のことを乗り越えさせたのだと想つ。でも、得たものはすぐに僕の手から離れていく。いつもそう。悟との付き合いもあと僅かだ。彼は僕から離れていく。どうすることも出来ない。

大晦日の晩、里佳子ちゃんを同級生の集まりに連れて行つた。当然、皆は僕の彼女だと思っている。友達に紹介した手前、彼女も僕との付き合いはステディなものだと思ったに違いない。僕にそこまでの深い意味はなかつたのだけど

悟のことを考えると苦しくなる。逃げるように僕は彼女と会つた。屈託のない彼女の笑顔を見ると確かにほつとした。はつきりと答えが出せない僕を彼女は責めることすらしない。気まぐれな僕の誘いにも嫌な顔ひとつせず、付き合つてくれる。あんなにいい子なのに。自分が嫌になる。

そんなある日。僕は里佳子ちゃんと駅前のファッションビルにいた。

服が欲しいという彼女に付き合ってビルの中を隈なく歩き回り、やっと気に入ったファーの飾りがついたニットを手に入れた彼女と、地下のカフェでコーヒーを飲んで休憩した後、ビルを出て、駅前の大好きな交差点で信号を待っていた。

休日の曇下がり、かなりの人手が出ていた。人の波に埋もれるような小柄な彼女の手を引き、青信号に変わった交差点に足を踏み出した時だ。

前方にひときわ目立つ長身の男がいた。人の波にもまれるようここちらに向かってくる顔を見て、思わず声が出そうになつた。

悟、言いかけて僕は言葉を失つた。急に交差点の真ん中で立ち止まつた僕の手を彼女が強く引いた。

「ね、立ち止まつたら危ないよ。」

人の波が僕の肩に無遠慮にぶつかってくる。里佳子ちゃんは訝しげに僕の顔を見上げた。

悟もこちらに気がついたようだが、ふと視線をはずし、隣の人影に何やら声を掛けている。混雑する人並みが彼らの前から離れると、僕の視界の中に大きなお腹をしてゆっくり歩いてくる乃理子さんの姿が見えた。悟の手には、大きな紙袋。市街に何店舗があるベビー用品を扱うチヨーン店のロゴが眼に入った。

喉の奥が熱くなつた。否応なしに現実を突きつけられる。大きなお腹をした彼女の手を引いた彼はどこから見ても幸せそうな所帯持ちそのものだ。いったい僕は何なんだ。

体中の血が足から頭に上つたようで、顔が熱くなり、体中が熱いのに、冷たい汗が背中に流れるのが気持ち悪かつた。だけど、隣の

彼女に気づかれぬよう平常心を装い、

「ごめん。行こうか。」

そう言つた自分の声がどこか不自然で上擦つてゐるのを感じた。

里佳子ちゃんも気がついたらしく、

「どうかしたの？大丈夫。顔、真っ青だよ。」

歩きながら、僕の顔を覗き込んだ。

「大丈夫。」

悟がゆっくりとこちらへ近づいてくる。彼は僕に気づかない振りをして通り過ぎた。すれ違うとき、垣間見た彼の表情が心なしか色を失つてゐるように見えた。僕はその肩を掴んで、罵声を浴びせたい衝動を必死で堪えた。

？何でなんだよ。奥さんもいるのに、子供も生まれるのに。何で僕なんだよ。？

心の中で叫んでいた。ろくすっぽ顔を合わせることも最近は出来ないのに。幸せそうにベビー用品なんか揃えて。

わかつていたつもりでも、現実として乃理子さんの幸せそうな姿を見て、愕然となつた。自分の心は自分でわかつてゐるつもりだった。彼が東京へ行つてしまつまでの間。納得して飛び込んだつもりだった。自分の心がどう動くのか、どういった行動に走るのか、自分のパターンは判りきつてゐるつもりでいても、本当はわからないことだらけだ。自分の心なんて。こんなに動搖するなんて、思いもしなかつた。

交差点を渡りきつたところで、急に身体が諭諭と震えて、止まらなくなつた。気持ち悪くて吐きそうだ。今にも道路に膝をつきかねない僕の様子を見て、里佳子ちゃんが肩を抱いてくれた。

「どこかで休もうか。」

「いい。大丈夫。」

これ以上、平静さを保つていられなかつた。

「ごめん。気分が急に。ここで別れていい？」

彼女は心配そうに小さく首を縦に振った。僕は彼女の返事を待たず、その場を走り去った。

いつも心の片隅に彼がいた。心と体がいつも彼を求めていた。日常の喧騒にそれは埋もれて、時々意識の表面に現れる。心を思ひに任せる時もあれば、無理にそれを意識の下に押し込めようとする時もあった。その感情に弄ばれることができひどく苦しくて、何とかそこから逃れようと、日々の営みに没頭するのだが、その意識はいつも僕を支配していた。そんな毎日が楽しく、甘美な瞬間のつなぎあわせでもある反面、それは地獄に落ちた者にしかわからない苦闷と背中合わせの毎日だ。

だけどお互い顔を合わせた瞬間、そこにあるのは心の深くから沸き立つよくな喜びだけだった。

心が通じ合っていると思えるその瞬間。彼が僕を見る。あの笑うとくしゃくしゃになる田もと。

それを手に入れられるなら、地獄の使い間が僕をたぶらかしに来たとして、それが何だというのだ。そんな気にさせてしまう彼の存在が僕の中では悪魔であり、そして天使もある。罪悪と背徳にさいなまれて、のたうちまわり、苦しみ、それでもこの想いを手放すことは出来ない。

彼女と別れて、人混みの中をあてもなく彷徨い、深夜にやつと自分の部屋にたどり着いた。

部屋の明かりをつけ、ベッドに腰を下ろす。ひどく疲れた。体中の力が抜けてしまったようだるくて仕方がない。このまま何も考えずに眠ってしまえたら楽だろうな。

夜の街を歩いていても、思い出すのは乃理子さんの手を引いて、信号を渡つてくる悟の姿だ。想像の中で、里佳子ちゃんを連れていない僕が、悟の肩を掴んで、交差点の真ん中で思いつきり殴り倒して、罵声を浴びせかけている。

?どうしてだ。何故僕なんだ。行ってしまうのに。乃理子さんも赤ん坊も捨ててなんていいのに。捨てるつもりもないのに。春になつたら何事もなかつたように、東京で新しい生活を始めるつもりなのに。?

本音だ。今まで口に出そうとも思わなかつたけど、今日の彼らの姿を見たら、急に自分が惨めになつた。悟はどういうつもりで、僕に好きだと言つたんだ。

嫉妬だ。僕は嫉妬している。嫉妬なんて、やきもちなんて、女の子の持つ感情だとずつと思っていた。僕には無縁のものだと。思ひもよらない自分の本当の感情に驚いて、戸惑つっていた。

悟のことが憎い。憎くて、そして悔しくてたまらないのに。

なのに会いたい。会いたい。会いたい。

視界が薄つすらと滲んでぼやける。会いたくてたまらない。何故、僕はひとりなんだ。

携帯に里佳子ちゃんからの着信が何件か入つていた。メールにも、僕の体調を心配するメッセージが入つている。もちろん、それに返信をする気力すら残つていらない僕は、ベッドにうつ伏せになり、部屋のダウンライトの明かりをぼんやり眺めていた。だいぶ経つてから、暗い部屋の中に電話の留守電のランプが点滅して光つていることに気がついた。留守電が何件か入つているようだつた。よろよろと立ち上がり、留守電を聞くためにスイッチを押す。

ああ、どうしよう。何件か入つているうちの2件は森下さんからだつた。そのメッセージを聞いて僕は現実に引き戻された。

(堀江くん。連絡が欲しいんだけど。頼んでおいた原稿どうかな?明日の締め切り間に合つよね。いつも締め切りより前に届けてくれるから、今回ちょっと心配でね。君のことだから大丈夫だと思つけど。何かあつたらすぐ連絡してくれ。)

頼まれていた原稿がまだ仕上がつていない。明日の午前中までに届けなければならぬ。里佳子ちゃんの買い物に付き合つた後、部

屋に戻りすぐに取り掛かれば間に合ひたかをくくっていた。だけど、今日のあのアクシデントのことで、すっかり原稿の事を忘れていた。でもそんなこと理由にならない。今からでも何とか間に合せなければ。

そう思い直し、デスクに向かう。原稿に取り掛かつて数分もしないうちに、自分の胸の中にモヤモヤとした思いが湧き上がってきた。（こんなことして何になるんだ。）

翻訳の仕事は僕の夢だ。だけど、悟の後釜として任されたこのアルバイト。何で一つの後を僕が引き受けなければならないんだ。自分が出来なかつた夢を僕に押し付けているに過ぎない。悟の自口満足だ。そんなのに何で付き合わなければならんなど。馬鹿らしい。

原稿を投げ捨てた。自分が自暴自棄になつてゐることはわかつていたけど、今は何も考えずに眠りたい。もうどうでもよくなつていた。

そう思つて、ベッドに突つ伏した瞬間、携帯が鳴つた。

(誰だ。こんな時間。)

(悟。)

彼からも何回か着信があった。今日のことだらうか。だが、出たくなかったし、出たところでまともに話なんか出来る状態ではなかつた。

携帯を放り出して、布団を頭から被つた。何回か着信音を聞いていたが、その電話はしつこくずっと鳴り続けていた。僕はベッドからはいすり出し、仕方なく電話に出た。

「いるんなら出ろよ！何回電話させるんだ。馬鹿野郎！」

鼓膜が破れるかと思つくらいのでかい声でいきなり怒鳴られた。

「何だよ！こんな時間に。」

「だいぶ前から何回も電話をしているのに、そつちこそ何だよ。」

「今、話をしたくない気分なんだ。又今度してくれ。」

「今度してくれじゃないよ。お前、どうなつてんだ。」

電話をしてきたのは、今日の駅前でのことかと思った僕は勘違いしていることに気がついた。

「何のこと？」

「原稿だよ。原稿！」

「何で悟がそんなこと言つてくるんだよ。」

「俺んとこへ電話があつたんだよ。森下さんから。最近、締め切りぎりぎりだし、声色が元気がないつて、心配して。それでも何とか間に合つていいみたいだつたから放つておいたんだけど。今日は、明日締め切りなお前から連絡がないし、電話してもずっと留守電。携帯へ電話しても出ないし、留守電をいれておいても全く連絡がないつて。何かあつたんかつて。お前にしたらそんなこと一度もないからどうしたのかつて。それで俺が電話しても全く連絡がないし、どうなつてるんだ。」

「…もう辞める。」

「何を！」

「このバイトもう辞める。」

「何言ってんだ。」

「もうどうでもいいんだよ。こんなことしてたって何の意味もない。」

「原稿どうするんだよー間に合つのか？..」

「間に合わないからってそれがなんだって言うんだー。」

話しながら僕は苛立ちがピークに達するのを感じた。今日のことで何か言つてくるのかと思つたら、仕事のことだ。僕の気持ちなんかあいつ、全然わかつていなんだ。

乱暴に携帯を切り、床に投げつけた。そしてベッドに潜り込み、今度こそ誰が電話をしても出ないつもりだつた。携帯は死んだように静かに床に転がつていた。頼むから今日は寝かせてくれ。誰も邪魔をしないでくれ。

数分もしないうちに、うとうとと眠りに引きずり込まれ、心地よい静寂が訪れた。

が、その静寂をドアの激しいノックが引き裂いた。僕は飛び起き、叫んだ。

「誰だ！ 何時だと思ってるんだ！」

「何時じやねえよ！ 早く開ける！」

悟だ。めちゃめちゃ怒つてる。声を聞いただけでわかる。僕は咄嗟にドアを開けて、

「いい加減にしてくれ。バイトのことはあんたには関係ないだろう！」

と叫んだ。

次の瞬間、目の前を火花が散つた。ものすごい勢いで殴られ、玄関に積んであつたシューズケースが倒れて靴が散乱した。口の中が切れて拭つた手が真つ赤に染まつた。起き上がるうとする僕をなお

も彼は胸倉を掴んで殴った。僕はそれを手でさばきつて、思いっきり懇親の力で彼を突き飛ばした。

「いい加減にしてくれ。いきなり何だよ！」

「辞めるつてなんだよ！穴をあけるなつてあんだけ言つたじやないか！」

「もう辞めるんだよ！原稿なんてどうでもいい。」

「どうでもいいじやすまないぞ。仕事をなんだと思つてるんだ。」

「仕事、仕事つてうるさいよ。あんたは自分の夢を俺に押ししつけてるんだ。自分が出来なかつたことを俺にさせようとしてるだけなんだ。」

そう言つた瞬間、また思いつき殴られた。

玄関の薄明かりの下で見た悟はすごく怒っていた。今まで見たこともないような厳しい顔だつた。そしてすごく悲しそうだつた。その顔で彼は僕をじつと睨んだ。その目を見ていられなくて思わず目を逸らした。僕は急に弱気になるのを感じた。

「穴をあけるのはいけないことくらいわかつていい。だけど……。」

出来る状況じやない。それに今からじや間に合つわけもない。

悟もわかつていたはずだ。今日のことで、僕がショックを受けていたことくらい。だけど、彼はそのことには触れず、

「隆博。とにかく森下さんに迷惑かけられない。どんな理由があるうといつたん受けたものは、ちゃんと間に合わせないと。」

彼は大きな手で、僕の肩を掴んで立ち上がらせ、自分も服の埃を払つた。

僕は頷いた。

「でも、間に合わないんだ。やつていなくて。」

デスクに散らばつた原稿を集めると、

「見せてみる。」

彼に原稿を渡すと、

「何時までだ。」

「明日の昼までに。」

腕時計を灯りの下で見る。午前1時30分を過ぎている。
「間に合ひつか。間に合わせよう。」

悟は原稿を半分に分け、片方は自分がやるからと言った。そして今回だけだ、とつけ加えた。そして僕の使つていらないノートパソコンを開けると黙々と作業に取り掛かりだした。それを見て僕も机の上のデスクトップを開け、原稿に取り掛かることにした。

彼の方をちらりと見やると銀のフレームの眼鏡をかけ、ものすごい速さでキイを打っている。辞書や参考資料もあまり見ない。そのあまりの速さに驚いてしまった。

「何やつてるんだ。早くやれよ。」

叱責が飛ぶ。

「うん。」

僕らは明け方まで言葉も交わさず、黙々と作業に没頭した。白々と夜が明け、カーテン越しに太陽の光が差しだしても、僕らは黙つて原稿に向かっていた。そうこうするうちに彼のキイを叩く音がとぎれた。

「よし、出来たぞ。」

悟が僕の方を見た。

「どうだ。」

僕も最後のページを訳して終わったところだった。

「あと、見直して清書だな。」

プリンターで打ち出したものを悟が最終チェックをしてくれた。その間にコーヒーを入れる。カーテン越しの淡い光の中で、熱心な眼差しを原稿に向かっている悟の姿を見て心底ほっとした。

信用出来る。彼なら。そう思った。

「ま、いいんじゃないか。こんなことはこれきりにして欲しいけどね。」

そう言って僕が入れたコーヒーを受け取る。彼がコーヒーを飲ん

でいる間に清書して、プリンターで打ち出し、バックアップを取る。彼がいてくれるおかげだろうか、僕は自分がだいぶ正常さを取り戻して落ち着いてきたのを感じる。

「シャワー借りるわ。」

「ああ。」

「昨日はずつとバタバタしてて飛んできたから、風呂も入っていい。全くお前にはかなわんよ。」

そう言って浴室へ消える。

「悪い。ありがとう。」

「何?なんか言ったか?」

シャワーの音で聞こえなかつたらしい。改めて言うのは恥ずかしい。そのままにしておいた。

それから一睡もしていない僕らはとりあえず仮眠を取り、原稿を持つていくことにした。ベッドを使えと言つたのに、悟は遠慮してソファーでかまわんと言つて毛布に包まつた。風邪を引かさないようにあるだけの毛布を着せて、僕も数時間眠ることにした。それから起き出し、身支度を済ませ、会社まで原稿を届けた。車に乗ってきた彼に乗せて行つてもらい、なんとか締め切りの時間に間に合つた。

「心配していたんだよ。電話も?がらないし。」

森下さんは僕の顔を見ると、本当に心配をしてくれていたんだとわかる人の良い笑顔を浮かべほつとした表情をした。

「申し訳ありません。」

「どうしたの?」

悟に殴られて腫れた頬を見て彼が言つた。

「何かあつたのと聞きたいけど、プライベートなことだからね。無理には聞かない。でも、原稿だけは間に合わせてね。僕は本当に堀江くんのことかつてるんだからね。でも、何か困ったことがあつたら、プライベートなことでも何でもいいから話して。待つてるから。」

「
彼に答えるためにもこの仕事は続けていきたいと思った。
よく考えたら、悟に頼まれたからやっているわけじゃなくて、自分
がやりたいことだからやっているのだと思った。昨日はちょっと
自棄になってしまったけど。反省する思いで彼に頭を下げ、社を後
にした。

「間に合つたか？」

車に乗り込むと話がそう聞いてきた。

「うん。」

そしてちらりと僕の頬に手をやつた。

「腫れてるな。」

そして僕の頬に触れ、運転席から身を乗り出して顔を近づけてきた。

「やめろよ。人が見てるよ。」

森下さんの会社のほんのすぐ側の路肩に車を止めていた。オフィス街でサラリーマンが行きかう路地だ。

「見てたっていい。」

遮る様に彼が言った。彼の唇が僕の唇に触れると泣きそうになつた。軽いキスをして体を離すと、

「お前が自棄になつてるの、俺のせいだろ。」

そう言つて運転席に身を沈めた。

「タバコある？」

「うん。」

シャツのポケットからタバコを出して、僕の方へ放り投げた。それを受け取り、タバコをくわえ火をつける。僕はタバコを吸いながら窓の外を見た。午前中のオフィス街。スーツ姿のサラリーマンやOLが忙しく行きかう。タクシーの群れ。

僕らだけが普通に回るこの世界から遠ざかっているように思えた。

「昨日連れてた子、彼女？」

ふいに悟が口を開いた。里佳子ちゃんのことを言つてゐるのだ。

「あの子は。」

口もつた。だけど、彼女だったら何だつて言つんだ。

「どうでもいいことだ。僕が付き合つてゐる子だとしても、悟には関係ないことだ。」

彼が何か言いたそうに鋭い視線で僕の方を見ていることに気がついたが、窓の外を凝視したまま、僕は続けた。

「悟はいつたいどういうつもりだ。あんなお腹の大きな奥さんまでいるのに、何を好き好んで僕と付き合つてゐる。」

言つてからしまつたと思った。こんなこと最後まで言つつもりはなかつた。弱い自分。悟を責める言葉しか思いつかない。責めたところでどうなるものでもないのに。

「乃理子さんのことわかっているつもりだつたけど、實際目にしたらたまんないよ。」

理性で抑えることが出来ない。語尾がきつくなつてゐることも充分わかつてゐた。

悟は一言も発しなかつた。じつと微動出せず、僕の横顔を見ているのがわかつた。彼の視線が痛いほどだつた。どんな表情をしているのか。見るのが怖かつた。

どのくらい沈黙が続いたのか。彼は黙り込んでゐる。僕もそのまま黙り込んだ。

先に沈黙に耐え切れなくなつたのは僕の方だつた。

「ここでいい。歩いて帰る。」

車を降りようとした。車のドアノブに手を伸ばした僕の腕を掴んで、

「送つていく。」

彼が言った。

「いや、いい。」

「送つていく。」

「いいよ。」

何度もかそんなやり取りをしてゐるうちに、僕は段々ライラとしてきた。

ひとりしてくれ。自分はもう数ヶ月もたたないうちに東京へ行きた。

つちまうんだね。僕のことなんかどうでもいいはずだ。

「いって言つてゐるだ。僕に構うな。ちと東京でもじこでも行つちまえよ！」

声を荒げた。

次の瞬間、手が飛んでくると思った僕はさつと身を除けたが、彼は殴つてこなかつた。重苦しい沈黙があり、彼の方を見ると、悟はハンドルを抱え込むようにして運転席に突つ伏していた。

？泣いてる？？

彼は押し殺した声で泣いていた様だつた。

悟は腹から搾り出すような苦しげな声で言つた。

「つらくないつて、俺がつらくないつて思つてるのか？」

声が震えていた。

「俺が何とも思つていないつて。つらくないつて。平氣な顔してお前と別れて東京へ行つて、それでいいと思つてゐるつて、隆博はそう思つてゐるのか？」

僕は答えられなかつた。自分のことで精一杯で悟の気持ちまで考へてなかつた。いつも強氣で平然といろんなことをやつてのけて、僕といふ時もいつも笑つていて、だから苦しんでゐるなんて、悲しい思いをしているのは僕だけだと思つてゐた。

悟が泣いてゐるのを初めて見た。胸が痛かつた。

彼は運転席に突つ伏したまま、顔を上げずに続けた。

「このままどこかへ行つてしまいたい。何もかも捨てて、乃理子も赤ん坊も。」

「お前だけいたらい。」

垣間見えた彼の本音。僕は何も言えなかつた。その身体に手をかけてやることすら出来なかつた。僕も一緒だ。本音を言えば僕も同じだ。僕たちを残して世界は回つていればいい。僕らは取り残されてい。だけど、現実は僕らを甘やかしてなんてくれやしない。

現実は僕らの間を流れる大きな川だ。僕らはその激流を見て立ちはだかる。

「この思いを今すぐ捨てることが出来たらどんなに楽だろう。それが出来ないことはイヤというほどわかつてゐるの。」どうして一緒にいられないんだろう。好きなのに。

つらいのはそういうことだ。好きなに一緒にいられない。求めているのにそれを得ることが出来ない。そしてお互の気持ちを知つていてるのに、それを酌んであげることが出来ない。お互の気持ちが一緒にたどり着くところがない。どんなに心の底から相手を思つても、相手に對して何もしてやれないことが一番つらいのだ。

次の講義の為、教室を移動していた時だった。

「隆博！」

名を呼ばれて振り向くと、振り向きざまに殴られた。渡り廊下に無様に尻もちをついたまま、鉄拳の相手を確かめると健一だった。

「健一。」

口いっぱいに鉄くさい嫌な味がして、唾を吐き出すと地面が真つ赤に染まった。

「いきなり何するんだ。」

「お前さ、いい加減にしろよ。」

走り寄つて僕の胸倉を掴んだ健一が仁王のよつな顔を近づけてきた。

「何のことだ。」

訳がわからず聞き返すと、

「おまん、理由も言わずに里佳子ちゃんと別れたんだってな。」

すぐに事情は飲み込んだ。だからって何で逐一健一に言つていくんだよ。あの子も。自分のわがままを棚にあげて、僕は胸の中で舌打ちをした。

あの朝、原稿を届けに行つた帰り道、彼女に携帯をかけた。

？もう会えない。？

？何故？何があつたの。？

？ごめん。本当にごめん。？

手の中の小さな機械から、彼女が何かを言つているのが聞こえた。罪悪感が一杯に胸の中に広がる。それから逃れたいがために僕は急いで通話ボタンを切つた。

もう何も考えなくなつた。彼女に落ち度なんて何もない。ただただ僕のわがまだ。誰からも離れたかつた。ひとりになりたかつた

た。

「彼女は理由を知りたいって言つんだ。このあいだ会つた時もおまんの様子がおかしかつたから、心配して。」

あの日のことか。あれからあの子に会つていなからな。

健一から目を逸らしたまま、黙り込んでいると、

「何やつてんだ。」

人並みを搔き分けて裕樹がやつて來た。

派手に倒れた物音を聞きつけ、喧嘩だと誰かが叫び、あつという間に人垣が出来た。それすら意に關せず、健一は僕を詰問していた。その場に裕樹が飛び込んできた。

「こんなところで何やつてんだよ。」

裕樹は僕の腕を掴んで立ち上がり、健一の背中を押して、その場を後にした。

講堂の裏口に僕ら3人は顔を付きあわせて立つていた。

「で、何。今日の喧嘩の理由は。」

健一が眉根に皺を寄せたまま、

「裕樹だつて知つてるだろ。例の彼女のこと。」

「ああ、あれか。」

裕樹も事の次第は知つてゐるようだつた。

だからつていきなり殴らんでも、とその場の雰囲気を和ませようと軽い笑い声を立てた。

「いや、僕が悪いんだ。」

僕はふたりに素直に頭を下げた。

「おまんさ、最近おかしいわ。里佳子ちゃんに、おまんから別れるつて言われる前に何かあつたんかつて聞いたら、その前の日にデート中に、おまんが気分が悪くなつたつて真つ青になつて帰つたつて。で、何か思いつくことはつて聞いたら、駅前の交差点で、お腹の大きな奥さんを連れたひときわ目のつく長身の男がいたつて。それを見ておまんの様子がおかしくなつたつて。」

「で、それさ、水木先輩だろ。背が高うて、めちゃめちゃいい男つていつたら、俺んらの周りつて、あの人しかおらんやろ。」

図星で、僕は何も言えず黙つた。

健一は仏頂面のまま続けた。

「前も怖い先輩に誘われて行かないかんつて、『デートすっぽかしたんやで。それも水木先輩やろ。それに俺んらの誘い、ここんとこ続けてドタキヤンしたやろ。それやつて水木先輩や。』

健一たちから飲みに誘われて、出かけようとした所へ悟から電話が入つたことがあつた。彼に会つ為に、急に誘いを断つたことが数回あつた。

「彼は僕の顔から視線を外さないまま、
『どうこいつや。おまんの行動、訳わからんわ。』

「言われてもしょうがない。だからって言えない。悟と僕のことを。ふたりとも親友だと思う。今まで隠し事ひとつしたこともない。何でもお互いのことは話していたけど。

「まあ、俺んらのことはええけど、里佳子ちゃんに理由も言わんと勝手に会えんなんて言つて、それまでだつてええ加減あの子振り回して。おまん男やろ、しゃつとせんな。」

「理由を言え。理由を。」

健一が僕の肩を掴んで揺すつた。

自分のいい加減さがあの子を苦しめている。悟が春には僕から離れていつてしまつたことがつらくて、あの子と本気で付き合おうかと思つたこともある。だけど、それはただ単に苦しい思いから逃げたいがためだ。本当は。そんな理由。里佳子ちゃんに申し訳ない。当たりました。誰からも責められて当然だ。そして、やっぱりそれすら出来ず、理由すら言わずに勝手に別れを切り出した。いい加減な自分。

そんな自分とは対照的に悟は乃理子さんと幸せそうにしていた。又交差点でのふたりの様子が目に浮かんだ。

でも、あの時悟は言った。

「このままどこかへ行ってしまいたい。何もかも捨てて、乃理子も赤ん坊も。お前だけいたらい。？」

苦しそうに。

どの悟が本当なのだろう。あれが本音なのだろうか。

そう思つた途端、胸を力任せに思いつきり殴られたように苦しくて、涙が滲んだ。

その様子に驚いた健二が、

「扶美のことやないやろ。」

里佳子ちゃんを振り回している理由。滲んだ涙の理由。それを健二は扶美のことだと思つたらしい。僕が何年もそのことから立ち直れずに、夢遊病者のようにふらふらと真夜中に健二を尋ねていつたりしたことを彼は思い出したに違ひない。あの頃の僕は不意に泣き出したり、訳のわからないことを呟いたりして、周りの人を困らせていた。

「違う。扶美のことじゃない。」

僕は首を振つた。反射的に悟のことが口をついてでかけた。

「本当は僕はみず・・・」

他に好きな人がいる。水木先輩とつきあつている。

言いかけた僕の口を塞ぐように、裕樹の大きな腕が肩を包んだ。

「？」

微かに耳元で裕樹が囁いた。

「健二、理由はお前が聞いてどうする？ 隆博が直接その子に言わないといかんや。お前がそこまで首を突っ込むことじゃないだろ。裕樹の気迫に、

「まあ、そりやねうや。？」

彼は納得した。

「隆博もいろいろあるんやろ。後は俺に任せてくれ。？」

裕樹がそう言うと、健二は、

「わかった。後はおまんがあんばようしてや。」

そう言つて講堂の角を曲がつて去つていつた。

「裕樹。」

裕樹の顔を見ると、

「細かいことはよくわからんけど、言ことくこともあるや。無理して言つことないよ。」

その時、直感的に彼は知つてゐるんだと思つた。健一は何でも口に出したり、行動に示さないとわかつてもられないけど、裕樹は何も言わなくとも、察してくれたり、勘が良く気持ちの細かいところまで酌んでくれる機悟さがある。

？何で、水木先輩よ。もつすぐ子供も生まれるんやに、あんまり飲んで歩いとんと、奥さんに愛想つかされるんやないか。隆博。おまんええんか。？

立て続けに焼酎をお代わりしていた健一が、真つ赤な顔をして僕に絡んできた。

あの時も3人で飲んでいたところへ、悟から急に電話が入つて居酒屋を後にしようとした時だ。

悟が待つてゐることが気掛かりで、絡んできた健一をどうしようかと困つてゐると、

？ええ。行け。？

悪酔いしてゐる健一の腕を掴んで、裕樹が笑つて田配せをしてくれた。

ああ、たぶんあの頃から裕樹はわかつてゐるんだ。きっと。

「健一もそのうちわかつてくれるやうつし。」

彼は僕の肩に腕を回したままそう言つた。

僕は学食のテーブルの向かいで、？何をやらかしても友達でいてくれるか。？と聞いた時、？たとえ、お前が泥棒をしても、殺人をしてもだ。俺がお前を嫌いになることはない。そうすることには何かしら理由があるだろうし、俺はお前を知つてゐるつもりだ。？そ

う即答してくれた裕樹の男らしさに確信に満ちた笑顔を思い出した。

「ありがとう。」

裕樹の顔を真正面から見て、はつきり口に出した。

彼は首を振って、

「俺んらはいいけど、彼女には理由をちゃんと言つた方がいいぞ。言いにくいかもしれんが、逃げちゃいかん。」

僕の気持ちは決まった。後に誰かが見守ってくれてる。自分のこと理解してくれる。それが何て心強いのだろうと思つた。

「そうだな。裕樹の言つ通りだ。」

この冬一番の寒波が通り過ぎた後、構内は真っ白な雪に覆われていた。

講義を終えた僕は久しぶりにゆっくり構内を歩いてみると、講義を終えた僕は久しぶりにゆっくり構内を歩いてみることにした。

石造りの大きな正門をくぐると、すぐ右脇に事務局があり、図書館、講堂がある。まん前に南校舎、その左脇に西校舎、少し歩くと、東校舎があり、研究室塔が並んでいる。その奥にエルム、つまりハルニレの木が聳える森がある。それを抜けると、学生の交流会館があり、そこを左に折れると延々と続くポプラ並木がある。所々にベンチがあり、学生らが話をしたり、本を読んだり、昼飯を食べたりしている。

ちょうど適度な距離の良い散歩道で、夏の新緑の季節には、短い夏を惜しむように、ポプラの木々が鮮やかな緑の葉をつけ生き生きと輝いている。そのポプラ並木を通り抜けると、ちょっとした池があつて、数羽の鴨やアヒルが水面をうろつうろと餌を啄ばんだり、水中に潜つたりしている。

僕は夏場の新緑の季節にこのポプラ並木を歩くのが好きだ。どこもかしこも構内は緑で覆われる。木々の下を歩けば、田中でも強い日差しを感じることはない。木漏れ陽がゆらゆらと顔を照らし、心地好い乾いた風がシャツの中を通り抜け、髪を撫でていく感触が好きで、よく歩きに来る。授業の合間をみてこの散歩コースを楽しみ、池まで行つて鴨たちに餌をやり戻つてくる。

この地方は夏が短い。一年の大半を雪で覆われる。先日まで降り積もつた雪が道の脇に押しやられ、溶けかけたアイスクリームのようになつていた。

並木道まで歩いてみよつかと迷いながら、エルムの森を抜けたと

「ところで、4、5人の同じ学部の先輩たちに会へわした。頭を下げて挨拶をして脇を抜けようとする」とする

「おい、隆博。」

声をかけられた。

振り向くと、その集団の中に悟がいて、彼らと別れ、さうに歩いてくるところだった。

原稿を届けに行つた朝以来、会つていなかつた。

「どうしたの？学校で会うなんて。」

「もう授業はないんでしょ。」

並んで歩きながらそう言つと、

「ああ、もう最後だからなあ、構内を歩いて見納めしようかと思つて。後、ちょっとした手続きとか、しないといけない用事があつたんで。」

さつさと一緒にいた先輩のうちのひとりが、じつを向き大声を上げた。

「おい、悟。来れるんだろうな。」

「ああ、後でな。」

そういつて手を振つて答えていた。僕は去つていいく先輩らに頭を下げて見送つた。

「何？」

「うん、後で飲み会。」

「最後？」

「ああ、まあそーカなあ。」

僕は急に寂しい気持ちにとらわれた。

「なんや、元気ないな。」

「いや、別に。」

「寒いなあ、お前こそ何してるんだ。」

「ちょっと池まで歩いてみようかと思つて。」

「授業は？」

「もう終わつた。寒かつたらいいよ。悟、戻れば。」

「そつけないな。」

「だつて。」

「そつが、もう学校へ来ないんだ。最後に構内を見納め、最後にみんなで飲み会。そんな話を聞いて、悟はもう去つてしまふんだなと改めて思い、そして自分の置かれている状況を考えたらとてもハイな気分になんてなれるわけがない。」

「まあ、いいわ。俺も見納めや。ポプラ並木を歩いてみる。」

「そう言つて僕の髪の毛をくしゃくしゃと掻んだ。元気のない僕を元気づける為か。」

「氣を取り直して歩き出すと、すぐに並木道にたどり着いた。雪で真つ白になつたこの並木道もなかなか精悍な感じがしていい。道の脇には先日まで降り積もつた雪が押しやられていたが、今朝から降り続いた真新しい雪が真つ白な雪の道を作つていた。それらが光を受けて所々きらきらと光つていて。誰もいない。誰も足跡をつけていない。」

「だいぶ積もつてゐな。」

「悟が言つた。」

「そうでもないさ。」

「冬の間外を歩く時、この辺では膝まであるスノーブーツを履くのが常識だ。中心部の街へ行く時は滑り止めのついた靴かスニーカーでいいけど。そういうわけで、今日の僕たちも例外に漏れずスノーブーツを履いていたので、雪道を歩くのがどうと云ふ事もない。」

「先に歩き出そうとすると、」

「ちょっと待つた。俺が先だ。」

「悟が僕を遮つた。」

「何で？」

「訝しげに立ち止まつた僕には氣にも留めず、先にどんどん歩き出した。」

「足跡のついていない道に、一番乗りで足跡をつけるのは気持ちが

いいなあ。」

などといつている。

そうか、何もついていない雪道に一番初めに足跡がつけたかっただけか。相変わらず子供っぽいところがある。

「また、隆博呆れるだろ？？」

振り返っていたずらつ子の口の端をあげた悟を見て、ああ、あきれているよと首を振った。彼はにやにやと笑つてこる。

そして彼の所まで追いついていき、又並んで歩き出す。ふくらはぎの辺りまで雪が積もっていた。なかなか歩くのが大変だ。

「戻る？」

彼に聞くと

「いや、いいよ。たまにはいつのもの面白いよ。」

と笑つてゐる。そして次に急に真面目な顔をして

「そういえば、あの…。」

と口ひりもつた。

「何？」

「バイト。辞めちゃうのか？」

翻訳のバイトのことか。

僕は首を振つた。

「あの時はちょっと田舎になつていただけだ。よく考えたら、自分がやりたかったことを引き受けただけだ。悟はチャンスというか、きっかけをくれたんだ。」

あの時は、悟が自分が出来なかつたことを押し付けただと思つた。だけど、違う。押し付けられたからやつてるんじゃない。自分の夢なんだ。将来、やりたい仕事に繋がることだ。

「そうか。良かつた。」

悟はほつとした笑顔を見せた。

「心配してたんだ。隆博がもう辞めてしまつと言つて出すかと思つて。

「

「大丈夫。森下さんもよへしてくれるし。」

「そうか。」

今日の悟は言葉少なんだ。

何かを思いつめているようだ。少し硬い表情をした横顔を見て、そう思った。

それに気づかない振りをして、僕は黙つて歩いた。この雪の日に、構内のこんな奥まで歩いてくる人もいす、当然、雪掻きもしていらない道を、歩くといつよりも押しやるようにして進むと、数分で池に出た。

池は凍つっていて、むろん鴨もアヒルもいない。枯れた草や木の上に雪が積もつていて、冬枯れの寂しい雰囲気をかもし出していた。池の脇にちょっとした急ごしらえの東屋があつて、自販機がぽつんと一台だけ置いてある。

「しかし、こんな所まで歩いてくるとさすがに凍えるわ。」

「こんな物好きは僕らくらいだろうね。」

悟はポケットから小銭を出してコーヒーを買い、僕の手に渡してくれた。手袋を外し、凍えた指先で暖かいカップの感触を楽しむ。ふたりして凍つた池の水面を眺めながらコーヒーを飲んでいると、

「こないだは殴つたりしてごめん。」

悟がすまなそうにつぶやいた。

「いいんだ。」

「俺、お前の気持ちを考えなさすぎていた。バイトを辞めるなんて自棄になつていたのは、何故かわかつていたのに。」

僕は首を振つた。

「だけど、ひどいことを言つた。僕は。」

現実としてどうしようもないことを口にしたんだ。聞けば悟だつてつらいことくらいわかつていたのに、自分の気持ちを抑え切れなくて、言つてしまつた事を後悔していた。原稿を届けに行つた帰りのこと。

「隆博に責められて当然なんだ。」

「彼は肩を落とした。僕はその姿を見て、急に寂しさことりうわれた。

「それに。」

悟は迷ったように池の湖面に視線を泳がせた。

彼が何を言いたいのかわかつたような気がした。でも、言わせたくなくて、彼のコートの袖を引き寄せた。

「ちょっと、コーヒーこぼれ・・・」

言いかけた彼の口を塞いだ。冷氣で冷たくなった頬はすぐに熱で熱くなる。

彼の気持ちを確かめるように舌で弄ると、それに反応するように彼の熱い吐息がすぐ側に感じられた。

顔を離すと、珍しく顔を赤く上気させている。

「急にびっくりするよ。」

いつも彼のリードだ。僕から彼を求めたりしたことはない。積極的な僕の反応に驚いていることが手に取るようになる。

「ぼれたコーヒーが雪の上に茶色い染みのよう広がる。それに視線を落とした悟は黙り込んでしまった。

たぶん言いたいことはお互いいっぱいあるだろうに、だけど実際は何ひとつ口に出来ない。その中のひとつでも言ってしまえば僕らの関係の終わりを示唆することになるかもしねりないと、お互い神経を尖らせていいのかもしねりない。

先のことなど何も考えたくない。いつもやつて雪の降る湖面を一人で見ていることだけが大事なことのようになる。ただ、ひとつだけわかることは、こうして悟と一緒にいると、僕が欲していることは彼と一緒にいる時間だけなのだとわかる。

黙り込んだ彼の横で、僕は冷静に考えを巡らせていた。

もう、これで学校も見納め。ふたりでこの池に来ることももうない。なのに、悟は何故、別れると、もう会えないのだと、僕に告げないのだろう。僕だって聞きたいわけじゃないけど、実際もうこう

していられる時間なんてあと僅か。どちらが先に流れていく時の無常さを口にするのだろう。僕はその時、冷静でいられるだろうか。

自信がない

不安な胸の内のように薄い灰色に曇った空から、細かい雪がちらちらと舞いだした。

「雪降ってきたな。」

悟が空を見上げる。

「そうだね。戻ろう。」

自販機の横にある「み捨てに」、カップを丸めて捨てる。帰り道を歩き出してふと後ろを振り返る。東屋に佇んだまま、悟が動かない。

「どうしたの。雪がひどくなるよ。」

「隆博。」

「うん。」

「一週間、いや3、4日でもいい。出られないか?」

雪が、彼の頭の上に白い綿のように舞い降りる。あの時、彼が僕のバイク先に来た夜。髪の毛についた雪を反射的に振り払おうとして思わずひっこめた手。僕は彼の方へ歩み寄り、髪の毛についた雪を手でつまんだ。白い結晶は瞬時に僕の指先で溶けて消える。

「悟の好きな旅?」

「ああ。」

一瞬の間を置いて僕は言った。

「いいよ。出られるよ。」

（あ、もう時間だ。急がなくちゃ）

大慌てで荷物をかばんに放りこむ。

（でも、何なんだ。この持ち物つて？）

デスクのサイドライトの灯りの下で、もう一度悟に手渡されたメモを見て、荷物の確認をする。

「防寒用長靴、登山用ウェア、ザック、手袋、帽子、雨具、サングラス、フリースのズボンやスパッツ、etc…」

（防寒用長靴？？ 登山用ウェア？？？）

（どこへ行くつもりなんだ？）

何だか嫌な予感がした。どこへ行くか聞いても教えてくれないんだから。それでもとりあえず指定された物を揃え、荷造りをする。だけどどう見ても山へ行く装備だ。兄の孝一は野球の他にもスポーツは何でもござれだ。登山も彼の守備範囲だから、殆どの荷物は兄貴に借りた。

でも、山かあ。3月とはいまだ冬だよ。今。本当かな。

そこへ階下に車が入ってくる音がした。アパートの窓から覗く。悟のようだが、車が違う。だが、カーテンを開けて様子を伺つた僕を認めてか、小さくフォンを鳴らす音がした。やっぱり悟のようだ。だけど、アパートの外壁のすぐ横に止まっているのは赤のエックストレーリルだ。

外灯の下の艶のある赤色のボンネットを見て、僕の脳裏にあの日彼女がつけていた赤い小さなピアスが浮かんだ。

？これね。母が18歳の誕生日にくれた物なの。？

里佳子ちゃんはドロップ型の小さなルビーを指で触りながらそう言った。

「だからあの日必死で探してたのよね。」

2年ほど前のサークルのバス旅行のこと。途中のサービスエリアでトイレに立った僕がバスに戻るうしたら、サービスエリアの売店で這うようにして必死に何かを探している女の子の姿が田に入つた。

？どうしたの。？聞くと、田に涙を滲ませて彼女は、？ピアスを片方落としたの。？そう言つた。時計を見ると集合時間になるところだった。僕はバスの運転手に事の次第を告げ、待つてもらうように言つて、すぐに売店に戻つた。ふたりして床を舐めるように探しにいたら、売店に繋がる通路に奇跡的に赤い小さな石が転がっているのを見つけた。

集合時間には10分ほど遅れたが、みんなのブーリングに？だつて急に腹が下つちゃつてさ。？と僕は舌を出した。

「ああ、あれか。」

里佳子ちゃんに言われるまでそんな事件があつたことなどすつかり忘れていた。あの時の女の子が彼女だつて事も全然気づいていかつた。

「嬉しかつたの。一緒に探してくれたこと。遅れた理由も自分のせいにしてくれて。」

彼女が別れ際に話してくれたこと。僕を何故好きになつてくれたのかつて。こんな曖昧でいい加減な自分を好いてくれて嬉しかつたことを最後に伝えたら、そう応えてくれた。

彼女と会つた。例の水族館で。アシカのショーを見るつて言つたのに結局行つてなかつたから。最後にアシカのショーを見て、水族館の喫茶店で話をした。

正直にすべて話した。扶美のこと。それから悟のこと。

「じゃあ、私いつまで待つっていても出番なさそうだね。」

彼女は少し口の端に笑みを乗せて、寂しそうに言つた。

「もういない人なら、いつか隆博君がその人を忘れて私の方に来てくれる日も来るかもしれないって思つたけど、現実存在している人

で、しかも忘れられなかつた人を忘れさせちゃうほど凄い人なら、
勝ち目なさそうだもんね。」

そうおどけて見せた。

そして言いにくそうにテーブルについたグラスの水滴を指でなぞりながら、

「あの、隆博君つてゲイ・・・なの？」

当然そう思うだらうな。僕は慎重に言葉を選んだ。

「わからない。こんな気持ちを抱いたのは初めてだから、自分も戸惑つてゐる。今まで女の子にしかこんな気持ちは抱かなかつた。」

里佳子ちゃんは困惑した表情で首を縦に振つた。

そして視線を僕からはずして、

「ああ、あの人か。交差点で会つた背の高い人。だからあの時隆博君変だつたんだ。でも、てつきりお腹の大きな女の人の方がと思つちゃつたけど。」

あの時の僕の様子がおかしかつたことに合点がいったみたいだつたが、女性の方が相手だと思つたらしい。当然だらうな。

？でも、何だかいろいろ複雑そうだね。？

僕は悟と乃理子さんは詳しく述べて彼女に話さなかつた。彼女も察して聞こうとはしなかつたが、複雑な事情があることは想像がついたに違ひない。だけどそれ以上そのことには触れず、

「でも、やっぱりちょっとショック。」

そうため息をついた。

僕は返す言葉もなく黙つたまま、コーヒーに口をつけた。彼女も黙つてカップを手にし、そして思い切つたように顔を上げた。

「だつて、大晦日の晩、あんなふうに友達に紹介してくれたのは、もう私を彼女だつて思つてくれてたんだつて、私、勝手に勘違いしてたから。」

胸を突かれた。ショックだつたのは相手が悟だからだということだと思つていたら、彼女にとつてショックだつたのは、ステディな

付き合いだとみんなに認めてもらつような行動を僕が取つたことだつた。

自分の軽はずみな行動に顔から火が出る思いだつた。

「ごめん。僕が深く考えずに行動していただからだ。」

「いいのよ。」

彼女は指で耳のピアスを確かめるように触れ、

「少しの間でも隆博君と一緒にいられて良かつた。」

そう言った。

最後まで彼女は優しかつた。本当に僕には勿体無い人だつた。

赤のボンネットと彼女の耳にぶら下がつていたルビーの色が重なる。アパートの階段を下りながら目にする赤色に、あの日の彼女の寂しそうな笑顔を思い出す。後ろめたさみたいな感情は拭いきれない。結局、僕は又ひとり女の子を傷つけたことに間違いない。

そして、今夜彼と旅にでる。彼も彼女を置いて。何といって出できたのだろう。臨月の乃理子さんを置いて。僕らはふたりして後ろめたい思いを引きずり、逃避行のような旅に出るのだ。だけど、半ば僕は開き直りのようなさばさばした気持ちだつた。だつて何を責められても彼といる時間は後残り僅かなのだから。

アパートのエントランスを出て、エクストレイルに近づくと、悟が降りてきた。

「車、違うね。」

「うん、つれの。」

僕の荷物を後ろのハッチバックに入れながら彼が答える。

「大丈夫だつた？」

「何が？」

水銀灯の下で、目元に皺を寄せて微笑む悟。

「出でこられた？」

「あ、ああ。」

僕の問いの意味を考え、一瞬の間をおいた後、そう答え、

「そつだな。ちょっと泣い顔はされたけビ。」

正直に答える。

「ま、いいよ。早く乗れよ。この時間なら高速も空いている。あつといつ間だ。」

言われたとおり、助手席に座りシートベルトを締める。

車に一步乗つてしまえば、僕らは現実の世界から全く別の世界へ移動してしまうことが出来る。車という密室の世界。車を走らせるエンジン音や、車道の湿つた雪の振動やカーステレオから流れる音楽。ほとんど車の走っていない国道。時折、通り過ぎる対向車。ぽつん、ぽつんと現れる24時間営業のコンビニやファミレスの明かり。そんなものを眺めていると、この世界には僕と彼しかいないような気がする。

学校やバイトのこと、締め切りが近づいている原稿や、そんな諸々のことがすべて現実味を失っていく。こうして悟と2人でいる世界の方が、本当の世界なのではないかと錯覚をしてしまう。確かに2人でいる世界も現実の世界には違いないのだが。でも普段の生活の感覚とは違う。夢を見ているような、そんな感覚。

すぐ近くのETCから高速に乗る。ETCのレーンをくぐり、合流地点の手前からアクセルを吹かし高速道に滑り出すると、その感覚はますます増していく。

真夜中の高速道路。非日常的な空間。前を走る車のテールランプだけがいやに鮮やかに目に映る。規則正しく、定間隔に並んだ高速のナトリウム灯のオレンジの灯りが、ちらちらとフロントガラスに反射する。真っ暗な車内で、カーステレオのイコライザーや鮮やかなグリーンで音楽のリズムを刻んでいる。

「タバコ吸つていいか?」

ダッシュボードを指差し、悟が聞く。

「ああ、いいよ。」

ダッシュボードからタバコを取り出し、火をつけてやる。

「すまん。」

紫煙の流れ、吸い込む時に赤く点るタバコの先を何の気なしに眺める。そしてタバコを吸う彼の横顔を眺める。細い指。大きな手。「何？ 隆博も吸えば？」

視線に気づき彼が言葉をかける。

「いや、いい。」

「しかしひさしひだな。こんなにしてふたりで出かけるのって。」

「ああ、ひさしひだ。なかなか会う暇なんかなかったもんな。」

このところ会つてもほんの数時間一緒に食事するくらいしか時間がなかった。だから楽しみにしていた。悟とふたりで出かけること。ゆっくりと旅に出かけるなんて、思いもしなかった。

そう、旅。そういえば行き先つて？

「あ、そういえば行き先つて？」

「行き先？」

「どこへ行くつもりだ？」

「あれ、言つてなかつたけ？」

悟がすつとんきょうな声を上げた。

「聞いてないよ。」

「ああ、そうか。」

「それに何？あの持ち物？それにこの車。四駆でしょ？何か嫌な予感がするんだけど。」

悟は噴出しそうになるのをこらえて

「うん、うん、当たつてるかも。お前のそのいやあな予感。」

「いやに嬉しそうだ。」

「もういいかげんに教えてくれたつて。」

「そうだな。うん。まあ、とりあえずそのサービスエリアで休憩しよう。」

そう言つて、サービスエリアに寄るために左のローンに車を滑らせる。

真夜中のサービスエリア。むろん、中にある売店や食堂なんかはシャツターが下りている。

自販機で「コーヒー」を買おうと中に入ると、それでも数人の人たちがたむろしている。そのほとんどは真夜中の高速を走る長距離トラックの運転手だ。

僕らは彼らの脇をすり抜け、中の休憩所のテーブルに陣取る。そこで悟がおもむろに地図を取り出して、僕の目に前に広げた。

「行くとこ。ここ。」

指をさす。コーヒーを飲みながら彼のさした方向へ目をやり、思わず「コーヒー」を噴出しそうになった。

「えっ…ここ？ 何しに行くの？」

「うん、いいだろう。絶景だよ。」

驚いている僕を尻目に、彼はゆっくりとした動作でタバコに火をつけ煙を吐き出す。

自分の腕時計を見る。腕時計の日付は3月15日をさしている。彼の指差した大郷高地は3月中旬でも雪深く、GWまで雪に閉ざされる。大郷高地はG県とN県の境に位置し、三方連邦から北アルプスまでの雄大な山脈を一望出来る有数の景勝地だ。夏は観光客や登山客でじつた返す。一転して冬になると雪も多く交通規制がかかるため、訪れる人も少なくひつそりとしている。冬山登山を目指す少数のクライマーたちの聖地だ。

僕が言いたかったのは、何故この寒いのに、さらに寒い所へ行くのかとういうことと、悟はどうか知らないけど、僕は冬山なんて全く初めてで、ほとんど登山らしい登山なんてやつたことがないのに。無謀すぎるのもどうかしている。それで絶句して口も聞けずには僕に対して、悟が言った。

「まさか俺と一緒に、かけ流しの露天風呂が有名な老舗の温泉旅館でのんびりするとか、歓楽街で豪遊する旅とか、そんなの思つてなかつただろう?」「

そりや、そんなことは思つていなければ、極端すぎだ。

「雪ひどいだろ。」

「うん。でも何回か行つているから。」

「えつ? 何回もつて?」

「叔父さんの別荘があつてね。高校の時以来行つてないけど。」

「叔父さんの別荘つて? 例の?」

僕が聞いたのは親代わりに面倒をみてくれている後見人の叔父さんのことだ。

「そう。」

「でも、山かあ……。」

尻込みする僕を無視するかのよつ、彼は勝手に今回の旅についての計画を話し始める。彼の計画によるとこうだ。

「そのまま高速を北上し、中谷ICで北越道に入る。そこから200キロ近く走つて福井県に入る。甚悦ICで降りると、すぐ叔父さんの別荘がある別荘地に入る。そこで泊まつて次の日は釜トンネルまで車で行き、その先は冬季通行止めだ。それでそこから歩いて大梨平まで出る。その距離40キロ。もちろん1日では無理だから途中はテント泊。

テント泊だつて?凍つちやうよ。全く。その先に悟がお勧めの山があるらしい。どうも、彼はそこで樹氷の森を見たいらしい。雪を被つた三方連邦の絶景を眺めたり、雪中キャンプを楽しんだり。何度も叔父さんと一緒に訪れ、楽しい思い出がある地なので、又どうしても行きたくなつたのだと。面白うだとは思つけど、寒い、考えただけで寒すぎる。

僕が黙つてその計画を聞いていると、

「気がなさそうだな。」

にやにやした。僕の反応を楽しんでいたみたいだ。

「だつて…」

そう言つと、彼は黙つて地図をしまい席を立つた。それを追いかけるよじて外へ出ると、

「気がないなら帰つていいぞ。」

彼が振り返つた。

「そんなこと言つてないよ。」

急に悟が立ち止まり前方を指差した。

「あのトラックの運ちゃん。ヒッチハイクしろよ。帰れるぜ。」

見ると、僕らの住んでいた県のナンバーのトラックが前方に停まつていた。

トラックの持ち主とおぼしき人物が荷物の点検をしていた。

「お~い。」

悟がトラックの運転手に向かつて手を振り始めたから、

「止めるよ。しじうがないな。」

慌てて腕を掴むと、彼は振り返つてにやにやしながら

「行くだろ?」

「いつも強引だね。」

半ば呆れてそう答える。

「だけど本当に冬山なんて経験ないんだ。お遊びのよつな登山なら兄貴に連れられて2、3回行つたことがあるけど、それだつてついぶん前の話だ。」

それまでおどけて笑つていた彼が、急に真面目な顔をして言つた。

「大丈夫。俺がフォローするから。」

いつも彼のペースだ。半分呆れて、それでも半分はそんな強引な彼のペースに引っ張られることを楽しんでいた。観念して雪山登山と雪山キャンプにつき合つこととする。

「運転代わらうか?」

「頼む。」

キイを受け取る。車に乗り込み、キイを回す。

車のデジタル時計の文字を見る。夜中の2時を少し過ぎたところだ。アクセルを踏む。四駆だから出足は重いけど、合流地点に滑り込み本線に乗ると、あっという間にスピードメーターの針は120キロを指す。

「結構加速するね。」

「ああ。」

「雪道も?」

「大丈夫だ。だけど一般道は雪が結構あるだろ? から高速降りたら代わるよ。」

「うん。」

そう言つて悟は又タバコに火をつける。その様子を見て、「眠いんだろ。寝てもいいよ。」

たて続けに何本もタバコを吸うのは彼が眠くてたまらないときだ。

「ごめん。」

「いいよ。僕は大丈夫だから。IC降りたら起こすよ。」

「うん。」

彼はタバコの火を消すと、リクライニングを倒して寝息を立て始めた。

カーステレオのボリュームをワンランクダウンする。追い越し車線を大量に荷物を積んだトラックが何台も連なつて通り過ぎる。僕はスピードを落とし、自分のペースで運転を楽しむ。

ひとりきりの時間。隣では彼が寝ているが。

非日常的な空間で、ひとりカーステレオの微かな音量に包まれて、加速する車の振動に身を任せせる。真夜中の高速を走りながら、思いを巡らせる。

叔父貴の別荘だつて? どんな人なんだろう。別荘を持つてるなんてすごいな。雪は深いんだろうか。どんな所なんだろう。

彼が言うには、その叔父さんっていうのがかなりの趣味人で、山

登り、キャンプ、アウトドア全般、カメラや無線やいろんなことに興味があつて、昔から子供の悟を連れていろんな所へ行つたらしい。今回の大郷高地も何度か叔父貴に連れて行かれたらしく、冬になると雪の中でキャンプをしたり、近くのスキー場でスキーをしたりしたらしい。高校2年の時以来、行つてないらしいが、その雪原と樹氷が急に見たくなつたらしい。

彼は、東京へ行つてしまつと、今より遠くなつてしまつからなかなか行けなくなつちゃうしな、とぽつんとつぶやいた。

東京か。いつ発つんだろう？

あれからそのことについて悟は何も言わない。

いろんなことを思つていろいろにあつとこいつ間に、甚悦工工まで15キロとの表示が見えてきた。

「悟。」

声をかける。

「うん。着いた？」

「あと15キロだ。」

「うん。」

声がまだ半分眠つている。

表示に従つてレーンを左に寄り、出口に向かつ。ETCのレーンを越え、一般道に出た後ファザードを出し、路肩に車を止めて悟を起こす。

「熟睡していた。悪かったな。」

「いや、全然。」

僕は出かける前に夕飯の後、少し眠つていたから眠氣を感じることもなかつた。

悟は運転席に腰掛けるとナビに目的地のキーワードを入力する。

「道、わからないの？」

「だいたい覚えていいけどね。5年経つていいだろ。それに5年前は高校生だったから自分で運転してないからうる覚えなんだ。」

すぐにナビが目的地の別荘地の道順を案内し始めた。
「よし、行こう。」

高速を降りて、ものの10分もしないつむじ別荘地の看板が見えてきた。

「」「?」

「うん。」

看板の表示に従つて道を折れると、別荘地に上がつてゆく道が見えてきた。暗くて周りがよくわからないけれど、林に囲まれた別荘地には何件かの別荘が立在している。さすがに道は細く、登り坂ばかりで雪も多い。

「冬は四駆でないと上がれないね。」

「ああ、昔おじさんと来た時にたまたま叔父さんがセダンに乗つてきて、まだ初冬だったから雪もそんなにないだらうって、たかをくくついたら結構雪があつて。車が登り坂をどうしても上がつて行かなくつて。」

「で、どうしたの?」

「皆で押したんだよ。叔母さんや妹や弟と。」

「ああ、そうなんだ。兄弟と一緒に?」

「小学生だったな。俺そん時。よく覚えているよ。あの頃はセダンばっかりだったし、今みたいに四駆に乗つている人つてあまりいなかつたから。叔父さんは先端だったんだよな、ジープみたいな乗りつていてよく乗せてもらつた。」

「そりなんだ。かつこいに叔父さんだね。」

悟は鳥田だと言いながらも、夜の雪道を難なく車を走らせ、あつとこつまにその叔父さんの別荘に着いた。

「たぶんこれだつたと思う。」

懐中電灯を持って車を降り、その建物を灯りで照らしながら彼は言った。

灯りに照らされた建物は、じゅんまりとした黒い木材で出来た口グハウス風の建物で、入り口まではちょっとした橋を渡つていくよう感じになつてゐる。その下には小さな小川が流れているみたいだ。今は雪があつてよく見えないけど。そして出窓があつて玄関先にはちょっとしたポーチがある。きちんと雪掻きがされてあつて建物の脇には積んだ雪がうずくまつてゐた。

「すごい。いい別荘だね。」

「そう? だいぶ来ていなかから荒れているかと思つていたけど、吾郎さんがきちんと管理してくれてるみたいだ。」

「吾郎さんつて?」

「うん。こここの別荘地の管理人で叔父さんの友達なんだ。」

「隆博も明日会えるよ。」

明日つて? と聞くと、吾郎さんはこの別荘地から車で20分ほどの所の集落に住んでいる。山へ入るのにスノーシューなどの装備を彼の所で借りることになつてているのと、挨拶がてらに訪ねると約束をしているのだと、悟は言つた。

「いい人物だよ。温和で面倒見が良くてね。あと、その奥さんの文さんが又おもしろい人だから、きっと隆博も好きになるよ。」

? 文さん? と言つたところで彼が思い出し笑いをしたので、その吾郎さんという人より、文さんという奥さんの方に僕は興味を持つてしまつた。

「ま、とりあえず中へ。」

そう言って、玄関先にある木彫りのモアイ像をひっくり返すと鍵が出てきた。

「何でモアイ像?」

「さあ、叔父さんの趣味なんだ。じゅうじゅうの。遅くなるつて言つたから、吾郎さんがここへ鍵を置いてってくれたんだよ。」

悟が鍵を開けて玄関先の電灯をつける。

促されて中へ入ると、最初に目に飛び込んできたのが暖炉と、一枚板の木材で作られた大きなテーブルだ。

「すごい、暖炉だ。」

「初めて見る？」

「うん。」

その暖炉に近寄るとほのかに暖かい。

「この暖炉何だか暖かいよ。」

彼も近寄り手をかざす。

「たぶん吾郎さんが来て、暖めておいてくれたんだろうな。確かに面倒見の良い気のつく人物らしい。」

部屋の中を見回す。奥に小さなキッチンがあつて、右手にバスルーム。上にロフトがあつてそこで眠れるようになつてているみたいだ。壁にかけてある時計を見ると4時を回つていて。

「荷物は明日にしよ。そのまままでいいよ。」

そう言つてロフトに上がり、悟は早々に毛布に包まつた。僕も同じようにして荷物を床に放り投げ、着替えるのもそこそこのして布団に潜り込んだ。五郎さんがきちんと用意してくれていたらしく布団の中は暖かく、気のせいいか阳に干した枯れ草の匂いがした。すると、ものの2分も経たないうちに隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。

（もう寝てるや。）

よほど疲れているんだなと思った。

ここ最近は一緒にいても、ふと見るとどこかにもたれかかつてうとうとしていることがある。だけど、その寝息を聞いていると、僕の方は段々目が冴えてしまつて眠れなくなつてしまつた。

「悟。」

声をかけてみたが、ぐつすり眠り込んでいるみたいだ。

布団を抜け出して彼の側に行つてみる。そつと、頬に触れてみる。夜の冷気にひんやりとした頬の感触が手に残つた。そのまま頬に口を寄せる。その気配に気づいたのか、

「… 隆博。」

彼が薄つすらと目を開けて僕を見た。

思ったより深く眠り込んでいるのではなかつたみたいだ。

「「じめん、起こした。」

「……」

返事の代わりに彼が僕の首に手をまわす。

「会いたかった。」

それが合図だつた。

抱きあつと、僕らはお互ひどく遠い所にいて、やつとあるべき所に戻つてきたような感じがする。抱きあいながらいろんな考えに揺さぶられ続ける。過去のこと、現在のこと、一週間後のこと、一ヶ月先、半年先…もつとその先のこと。頭に浮かぶいろんな思いは、押し寄せる快感の波に呑み込まれ消滅する。今ここにあることだけを考える。そのことにのみ集中する。だけど、こつしている時間の中に、時折、僕はひどくあせりのようなものを感じる時がある。手を入れているのに、それがすぐに消えてしまつゝ不確かなものに思えて…。

そうだ。飢餓感だ。心の中に湧き上がる飢餓感は消しようがなかつた。

（僕をこんなふうにしたのはあんただ。）

心の中で叫んでみる。

だけど、その叫びは呑まれ続ける。夜の闇の中に、彼の息遣いの中に。僕は苦しくてたまらなかつた。だけどこんなに甘くて幸せな瞬間が他にあるだらうか。

恋をするといつこと。それと体の関係を持つといつことを切り離して考えることは難しい。心を手に入れた、心が通じたと感じることが出来たら相手の身体も欲しいと思うのは当然のこと。ぎりぎりの一歩手前までどうするか迷い、苦しんで、その先を飛び越えてしまつたら？お互に繋がっているという充足感。一時の快樂に身をゆ

だねる刹那的な時間。その先に何もないじゅうことを僕らは知っているのに。お互いを求めずにはいられない。

その先に何もない？ そうだろうか。本当に何もないのだろうか。こうしていることは本当に無意味なことなのだろうか。無意味なことだとしたら何故僕らはこのことで苦しみ、罪悪感にさいなまれて、それでも喜びを見出すのだろうか。まだ見えてこない。もうタイミングリミットはすぐそこまで来ているのに。

どれほどの時間を一緒に過ごしてもその答えは見えてこない。ただひとつわかっているのは、僕らにはもう時間がない。今度会う時は、僕らはまた違った関係で会うことしか出来ない。

それとももう一度と会えない。そう思つと、胸が苦しくなる。

ロフト上の灯り取りの窓から射す光で目が覚めた。ぴーんと張り詰めたような山の冷気が頬を刺す。窓を見上げると、もうすいぶんと口が昇っているみたいだ。時計を見るともう寝近い。

「悟。」

声をかけてみるが隣で彼はぐっすり眠り込んでいる。昨日あのまま眠ってしまったから彼は上半身裸のままだ。毛布もかけずに。

（よく風邪ひかんなあ。）

彼の頑丈さに感心する。

毛布をかけてやろうと、背中越しに毛布を引きあげ、僕ははつとした。

明るい陽の下で見る彼の上半身の左のわき腹に、みみず腫れの様な古い傷を見つけたからだ。今まで明るいところで彼の裸を見たことがなかつたのでちつとも気がつかなかつた。

（火傷？）

人差し指の長さほどの傷が複数残つている。

（何だろう？ひどい傷跡だ。）

そう思つて眺めていると、階下でどんどんとドアを叩く音がした。

（誰だろう？）

出て行つていいのかどうか迷い、彼を揺さぶるよつこにして起こす。

「うん。起きる。起きるよ。」

「悟、下に誰か来てるよ。」

「あ、本当か？」

彼はシャツを引っ掛けるとロフトの階段を下りて玄関先に向かつた。

「はい？」

ドアに向かつて彼が声をかけると、その人物は大きな声で

「おい、俺だ。」

と叫んだ。

「あ、吾郎さん。」

悟がドアを開けると、50代と思しき白髪まじりの中肉中背の男性が玄関先に飛び込んできて悟に抱きついた。

「悟、待つとたんだぞ。」

「ちょっと見ん間に大きくなつて。」

「いやだな。吾郎さん。俺、もう社会人だよ。」

子ども扱いされて彼はちょっと嫌そうな顔をした。が、もちろん目は笑っている。

吾郎さんと呼ばれた人物は、それは嬉しそうに、いつ着いたんだとか、もう最近くになるのに家に来ないからどうしたのか見に来たのだと、いろんなものを用意しておいてあるとか、そんなことをしゃべっていた。

よほど親しい人物らしい。そう思つてちょっと遠慮をしてロフトの階段に腰掛けて様子を見ていると、悟が、

「隆博。」

「こちらを向いた。

「」の子が悟の後輩か。

吾郎さんは、人懐こそうな笑顔を僕に向けた。

「ここにちは。お世話になります。」

頭を下げる悟が紹介してくれた。

「堀江隆博だ。」

「そうか。隆博くんか。悟がいつも世話になつとるな。」

「何言つてんだよ。世話してんのは俺なんだよ。」

彼は吾郎さんに向かつて悪態をついた。

「なあに言つとるが。きままなお前さんにつき合つて、こん雪があるところで山に入るなんて。奇麗な。いい後輩やな。」

彼は悟の性格や行動を知り尽くしているらしく、放浪癖があることや、あちこちでふらふらとキャンプや寝泊りなど奇怪な行動をす

ることを話した。

それで以前、冬の海に連れて行かれて、火を焚き宴会をしたこと
を話すと、

「やつぱつ。こきなりやし、この子は強引やでびつへつするやうひ
な。」

「いや、別に。馴れました。」

もう返すと、

「馴れんとこの子とはつき合えんやうひな。」

吾郎さんは快活な大きな声で笑った。腹にあれこれ思わな「よつ
な人の良い豪快な印象を受けた。

「で、あとで家来るんやろ？文が首をなげつして待つといむが。」

「うん。昨日着いたの遅かつたんで今まで寝てたんだ。だから街へ
出で、ちよつと買い物をしてから寄ります。」

「よし。」

そしてその後、吾郎さんは別荘で過ごすのに必要な物やら、食料
やらを用意しておいたことを話し、薪が積んである場所を教え、あ
れこれと世話をやき帰つて行つた。

吾郎さんが帰つていくと、

「ここから車で少し行つたところに街があるんだ。そこで明日の買
い物をしてから吾郎さんの家に行こ。食事とか用意してくれてる
みたいだから。」

悟はそう言つて着替え始めた。着替える時に又ちらりと見えた脇腹
の傷跡が気になつたけど、僕は口をつぐんだ。

そして街へ行く車の中で明日の詳細を聞いて、必要な物を買い揃
えるために駅前にあるパーキングに車を止めた。

古い城下町で、こぢんまりとした駅も古風で何となく雰囲気があ
る。日にしRが数本停まるだけらしい。駅に沿うようにして並んで
いる商店街を歩く。綺麗に雪掻きがしてあり、歩道には雪がなく歩
きやすい。木彫りの人形や漆器などを扱う民芸店が何軒か並んでい

る。

近くに温泉があり、そこは古い湯治場らしく、土産物を見ながら歩いている観光客もちらほらといる。その並んだ土産物屋を過ぎると、地元の人が買い物をするとみえる食料品店や、金物屋、本屋、床屋、喫茶店などが軒を連ねている。

歩きながら悟は続けた。

「足何センチだっだけ？ 確か俺と一緒に思ったから、靴は俺のいいし、吾郎さんちにスノーシューとストックはある。テントもやこで借りるし、買い足すのはあれとこれと……」

悟はそう言いながらまるで住みなれた街を歩くみたいに、あちこちの路地を入り、商店街を右往左往する。ビルにどんな店があるのか頭の中に入っているみたいだ。

「よく迷わないね。」

そう声をかけると、

「うん、小学校の時から叔父さんと何回も来ているから。それにこの街は5年前とさほど変わらないよ。」

そう言って必要な物を手に取り、あつとこつまに買い物を済ませた。そして商店街の端まで来ると、

「文さんにお土産を買つていいくよ。」

と言ひ、一軒の和菓子屋さんの暖簾をくぐる。さつしつとした古い木造のたたずまいが老舗の店らしい。

「何を買つの。」

「文さんは、ここの中の羊羹とそば饅頭が好きなんだ。」

そう言つてショーケースを覗き込む彼の表情が、今まで見たこともないような表情だつた。

何て言つていいのかな。

お母さんにお土産を買つてこくよくな、ちゅうとほにかんだよな。

「両方買つてこいつかな。こんなに食べれないと怒られちまうか

な。」

それでも結局、栗蒸し羊羹とそば饅頭の両方を彼は注文した。その様子を見て、僕は文さんという人を想像した。どうも彼は文さんに母親の面影を見ているらしい。母親ともあまり縁がないような彼が、嬉しそうに菓子なんぞを買っていく女性とは…。優しくておつとりとした感じの品の良い老婦人が目に浮かんだ。

「何にやにやしてるんだ?」

その様子を興味深げにじろじろ見ていた僕に気がついたらしい。「だつて、すごく嬉しそうなんだもん。それに女の人に何か買つている姿つて、初めて見るし。」

「何言つてるんだ。俺はフリーストだぜ。女性に対しては誰にでもこうなの。」

そう言つて、菓子の包みを店員からひつたくるようにして店をさつさと出て行つた。照れている彼の様子がおかしかつた。慌てて走つて追いかける。

「待つてくれ。」

相変わらず足が速い。

「遅いぞ。」

追いついた僕を横目でにらみながら

「何だか嬉しそうだな。」

「だつて。」

何だか僕は陽気になつてしまつた。何故だろう。たぶん悟が嬉しそうだからだ。

さつきの吾郎さんと会つた時も、きっと心を許している人物なのだろうと容易に想像ができた。そういう氣のおけない人たちに会うのを、彼は楽しみにしていたのだと思う。彼が嬉しいと感じている様子を見るのは、僕にとつても嬉しいことだからだ。

パーキングに車を取りに行つて、吾郎さんの家に向かつ。吾郎さんの家はその商店街からさほど遠くない集落にあつた。

「しかし家が少ないね。」

田んぼや畑が連なる県道を走つていくと、ぽつん、ぽつんと家が見える。住宅密集地に実家がある僕には珍しい風景だ。

「まあ田舎だからなあ。」

「今買い物した街までみんな出でくるの。」

「そうだらうな。」

「車がないと不便だね。バスとか通つてるのかな。」

「そうだな、1時間に1本くらいだらうな。今はどうかな。昔はほんと不便だつたよ。だいぶ良くなつたかもな。」

「いつ頃から来てるの。」

「初めて来たのは小学4年生の時かな。確か。」

「それからちよくちよく夏休みとか冬休みとか。」

「ふうん。」

そんな話をしていると集落が見えてきた。瓦屋根がどつしりとした古い民家ばかりだ。庭が広くて蔵のある家もある。その中の一軒が吾郎さんの家だった。大きな母屋と脇にちょっととした離れと物置があつて、家のすぐ前に畑があつた。家の前の広い庭に車を止めて、車の音を聞きつけた吾郎さんが玄関から飛び出してきた。

僕らを見ると

「やつと来たわい。」

と顔をくしゃくしゃにした。

「もう飲んでたんでしょう。」

悟は車から降りながら彼に尋ねた。確かに吾郎さんの顔はほろ酔い加減に赤く上氣している。

「まあ、待ちきれんくてな。それにもう口も暮れる。」

時計を見ると午後4時をまわっている。

「ほれ、早よう。隆博くんも中に入つて。」

吾郎さんに促されて玄関の引き戸をくぐる。さすがに田舎の古い民家だ。広い土間の続きに座敷が見えた。

「広いお家ですね。」

「なんか、古いだけよ。文がいつも掃除が大変だとこぼしとるよ。」

吾郎さんと話しながら土間で靴を脱いでいると、

「やつと来たか。」

女性の声がした。振り向くと、座敷の続きになつてゐる台所の方から初老の女性が顔を覗かせた。

年齢は吾郎さんより上なんだろうか。後ろで結んだ髪の毛には白いものが混じつてゐる。田が大きくて顎がきゅつと締まつた顔は猫を連想させた。背は吾郎さんよりだいぶ低いみたいで小柄な女性だ。僕は頭を下げた。

「おひ。隆博くん。これが女房の文だ。」

「堀江です。お邪魔します。」

「この子が悟の連れてきた子か。」

「そうだ。隆博くん。遠慮せんと早よつあがれ。」

靴を脱いで座敷に上ると、文さんが僕の鼻先まで顔を寄せてじつと僕の顔を眺めた。初対面で顔をまじまじと見られてどきどきした。何と言葉を發していいのかわからずそのままいると、

「睫毛長かね。」

「はあ?」

「なんちゅう睫毛が長いんよ。」

「そうですか?」

「うん。女の子に間違えられんと?」

(わ、言われた。)と思つた。

実は睫毛が長いのはコンプレックスだった。あまりこのことには触れたくないんだけど、小学生の時はよく女の子に間違えられた。

しかも当時家の近所に、母親の友達が美容院を経営していて、よそに連れて行かれては髪の毛にパーマをあてられたり、セットさせられたり。つまりおもちゃにさせられていたんだな。母親に当時のことを聞くと、

「いかつい孝一と違つて、ほんとに隆博は小さい時は可愛くてねえ。千夏のほうが、じついくらいで。だからお母さん樂しくって、隆博が女の子だったら良かつたのにって思つたくらいよ。」 だつて。

だから中学になつたら髪の毛も短くして、野球部に入ったの。ずいぶんその姿については言われなくなつて、睫毛が長いコンプレックスも忘れかけていたのに。こんなところで指摘されるとは何も言い返せずにびっくりしたまま立っていると、吾郎さんが借りるスノーシューやストックなどを納屋で物色していた悟が玄関の引き戸をくぐりながら、

「文さん。あんまりいじめないでくれよ。」

と声をかけた。

「ああ、悟。元気そうで何よりや。」

吾郎さんほどのオーバーアクションではないが、それでも彼女は嬉しそうに語の首に腕を回した。その文さんの背中をせんせんと叩きながら、

「隆博は神経細いからな。いきなり文さんの毒舌になつていいけんよ。」

「毒舌？ ホントのことを言つたままでや。うちはこれでも褒めたつもりやけどな。」

「褒めたつて？ 男に向かつて女の子に間違えられるやつて？」「綺麗な顔しとるつて、うちは褒めたつもりや。」

文さんはそっぽを向いた。悟は僕の顔を見て大笑いしている。

「そんなんふうに思つて見たことなかつたけど、確かに隆博は綺麗な顔しているな。」

僕がむすつとしている

「そむくれるなよ。あれで文さんはお前のこと気に入つたみたい

だぞ。」

「あれで？」

と小声で返すと、

「ああやつて最初からぶしつけに物を言つのは、その人を氣に入つたという証拠なんだ。」

「俺も最初はわからんかったけどな。」

文さんが近づいてきて

「何を2人でこそこそしゃべつとる。」

悟の頭を叩いた。

「だつて最初はびっくりするよ。文さんの物言いじやあ。」

「何、言つとる。」

文さんが憤慨した。

そこへ吾郎さんが来て

「そつそつ、文にはびっくりして当たり前や。悟も初対面で文にいろいろ言われてなあ。あれ小4の時やろ。隆司に連れてこられた時。ああ、隆司つてこいつの叔父やけどな。何を文が言つたか忘れたが、氣に障つたんだろうなあ。悟が怒つて出ていってしまつて、俺んら泡くつて夜道をずいぶん探して歩いたことを覚えとるよ。」

「え、そなんですか。」

「ほんときつい子でなあ。全然しゃべらんし、口つことんかと思つたよ。いつも生傷がたえん子でなあ。」

(生傷?)

そこで文さんが吾郎さんをたしなめるように目くばせをした。

「お父さん、早よつあつちで飲むもん用意せんか。」

僕がちらりと悟の方を見ると、

「そつだよ。昔の話はいいよ。恥ずかしいことばっかりだ。それより喉が渴いたよ。早くなんか飲ませてよ。」

そう言つて顔を赤くして少し酔つ払つてゐる吾郎さんの腕を取り、座敷の方へ向かつた。

「おう。隆博くんもこいつ来て飲め。」

「はい。」

僕もふたりに続いて座敷の方へ行こうとするが、文さんががばつと僕の腕を掴んだ。

「隆博はうちを手伝え。」

「え？」

「夕飯の支度。」

「はあ。」

（で、何で僕が？）（しかもいきなり呼び捨て？）

と思ったが、文さんは僕の顔を見て、いたずらっ子のよくな嬉しそうな顔でにかつと笑った。やはり気に入られたってこと？

エプロンをしてタオルで頭を巻いた文さんの後に続きながら僕は思った。なるほど悟が思い出し笑いをするはずだ。僕が想像していた上品で優しげな老婦人のイメージはおもいっきり壊れていた。でも初対面で言いたい放題。なかなか面白そうな女性だ。

文さんと一緒に台所に入ると

「ほれ。」

と言つて彼女がエプロンを僕に放り投げる。

「いいですよ。」

エプロンを返せりうると

「服が汚れるやう。」

無理やりエプロンを首からかけよつとする。が、文さんの身長じや僕の頭まで手が届かない。その様子を台所の入り口にもたれかかつて悟が見ていた。

にやにや面白やうに見つめている彼に向かつて

「何見てんだよ。」

悪態をつくと

「いや、いいコンビだなあと思つて。」

「なんじや、悟。お前も手伝つんか?」

「やだなあ。俺が料理全然出来ないの知つてんでしょ。」

苦笑いしながら、彼はさつき買った菓子の包みを文さんに手渡す。

「おう、これは金蝶堂の。」

彼女の口元から笑みがこぼれる。

「いつもの。羊羹とそば饅頭。」

「おお、すまなんだな。」

やはり好物みたいだ。嬉しそうな文さんが僕に向かつて

「うちは甘党でな。ここのが一番や。」

「後で頂くで、悟。仏壇へ飾つてくれ。」

と言い、包みを悟の方へ渡した。

「うん。」

そのやり取りを見ていると母子みたいだ。田尻の下がった彼の表情を見ていると特にそんなふうに思う。仏壇のある座敷へ行こうと

して悟が振り返つて言った。

「やつやつ、文さん。隆博は料理すごく上手だから。何でも出来る

「おひ、せつか。」

嬉しそうに、文さんはがばつと前歯を見せた。

僕はそんなことはないと手を振って見せたが、彼女は早速包丁を
僕に持たせ、あれこれと指示をし始めた。

(やれやれここまで来て料理しないといけないなんて。)

心の中でため息をつきながら、指示された蓮根の皮を剥いている

「今、やれやれ何でこんなヒド料理をしないかんのや」と、思つた

「いや、そんなこと。」

（うん。なかなかの人物。）

卷之三

つきはきと手際のいい文さんの横で指示された通りに手伝つてみると、文さんはあれこれと僕のことを聞いてきた。学校のこと、専攻している学科や勉強している内容。将来は何の仕事につきたいのかとか。家族のこと、兄弟のこと。悟とのつき合いのこと。彼女は快活ではつきはきとし、毒舌ではあるがコーモアがあり、自分たちの生活のことなどを話し僕を笑わせた。

話していると、彼女が頭の回転の速い賢い人物であるのがわかる。悟が彼女を好きな理由が何となくわかつた。

だいたいの下ごしらえはしてあるらしく、2人でやつていいせい

「さ、後はお盆に乗せて運ぶだけやな。」
かあまり時間もかけずに何品かの料理が出来た。

卷之二

僕はお盆に料理を乗せながら気がついた。

（そうか、文さんは僕に料理を手伝わせたいわけじゃなく、僕がど

んな人間かみたかっただんだな。）

なるほど、悟が連れてきた人物がどんな人間か彼女は興味があつたみたいだ。それだけでも彼女がどんなにか悟のことを可愛がつているかよくわかる。

ふたりはだいぶ出来上がりしているらしく、座敷の方から吾郎さんの豪快なしゃべり声が聞こえてきた。

「それで、東京へはいつ？」

「うん、25日には。この旅行が終わったら。4月に入つたらすぐ入社式があるし。」

「そうか、ぎりぎり今までこひきにおるんやな。」

「ああ。」

（25日？）

東京へ行く日。僕が聞かなくてはいけないと思いながら先延ばししていた事を、吾郎さんが聞いていた。聞くとはなしに聞こえてしまつたが、その日にちを聞いて急速に僕は現実に引き戻された気がした。

（すぐだ。あと10日。）

一瞬立ち止まつた僕の様子に文さんは気がつかないふりをした。そしてわざと大きな声で、

「おまたせ。」

そう言つて座敷のガラスの引き戸を開けた。

顔を真つ赤にした吾郎さんがこっちに向かつて

「おつかれさん。隆博くん悪かつたなあ。手伝わせてしもつて。」

「いいえ、別に。」

「悟の言つたとおりや、この子は料理がつまこなあ。手際がいいし。」

「そりだろ。俺もよう、飯作つてもらつたから。」

「そりだろ。この子嫁さんにもらつたらどうや。」

文さんは冗談を言つた。そうしたら吾郎さんが笑いながら

「文。悟はもう嫁さんをもらつたりじごだ。」「え、いつ？」

文さんも吾郎さんも、そのことは今日初めて聞いたみたいだった。

「夏に入籍だけした。」

文さんは悟に近づいて、又頭をぽかりと殴り
「なんでそんな大事なことをさつわと言わん。」
と怒つた。

「ごめん、恥ずかしくて。」

「なんか恥ずかしいか。」

「だつてこれらしいわ。」

横で吾郎さんが、お腹が膨らんでいるゼスチャーアーをした。

文さんの強い平手打ちが飛んだ。
ぱしーんと音が鳴つた。

「痛。」

僕は文さんの顔を見た。怒つてこむよつた、泣き出しそうな複雑
な表情をしていた。

「まあまあ文。ええが。」

「だつて順序が逆じや。それにまんだ就職もしどらん子供や。」

「まあ、そつだが、もう卒業で就職先も決まつとい。心配いりんよ。」

「

吾郎さんがフオローした。

「氣楽そうなことを言つおつて。」

悟は文さんの言つことを真撃な表情で聞いている。

「そんديつ産まれる。」

「4月。」

「来月か?」

そこでまた文さんの平手が飛んだ。

「嫁さん放かつてこんとこまで来たんか?」

「許可もらつてるよ。」

「

悟が子供のような表情をした。

「まあいいが、文。悟も所帯持つたらそんな遊んどれんし。せつか
く来てくれたんやし。」

「まあ、そうやけど。」

「文さんは大人しくなつた。」

そして真剣な厳しい目を向けて悟に聞いた。

「ほんでお前さんは幸せなんか。」

悟は黙つて頷いた。

文さんはさつき僕にしたみたいに、鼻先まで顔を近づけて彼の目
をじつとのぞきこんだ。悟はきちんと正座してぴくりとも動かさず
に文さんの目を見ていた。

文さんは何を感じ取つたんだろう。彼が僕に話した？ 迷い？ を彼
の目に見たのだろうか。それとも？

「まあ、いい。実際の生活は厳しい。大変なことばかりやし、人の
親になるのは並大抵のことでないぞ。」
とだけ言つた。

「うん。」

悟は短く答えた。僕はそのやりとりを見ていたが、悟の表情から
は何も読み取ることは出来なかつた。

「まあ、めでたいことやせじ。乾杯するわ。」

吾郎さんが陽気に言った。

「隆博くんは手伝いで、まだ何も飲んぢらんしな。彼はコップにビールを注いでくれた。

「ありがとうございます。」

コップにビールを受けると

「かわいせうに。初対面でいきなり手伝わされてなあ。喉かわいたやう。」

吾郎さんが文さんの方を向いた。

「ええが、この子たち気に入つたわ。」

（ほり、やうだる。）

僕の方に悟が田へばせをした。

文さんはここにひと、さつきとはうつてかわつた柔らかい表情で、料理を僕らに取り分けてくれた。

「これ何ですか？」

小皿に乗せられた、大きな雑魚のよつな魚の唐揚げを僕は指差した。

「稚々子や。」

「ちちこじへ。」

「魚？」

「そうや。から揚げにして佃煮にしたもので、この辺の郷土料理だよ。」

悟が説明した。食べてみると香ばしくてとても美味しい。

「酒のつまみじゃな。これは。」

「この辺で捕れる魚なんですか？」

聞いてみると、吾郎さんは釣りが趣味で、だいたい魚は自給自足らしく。

「この稚々子は夏になるといこの辺の川ではさようさん捕れてな。網を持って行つて、すぐうと面白いようて捕れる。それを佃煮にして保管しておき、冬場に食べるんだよ。」

吾郎さんと文さんは、家の前の畑で自分たちが食べる分の野菜を作り、釣りをして、だいたいは自給自足の自然の生活を楽しんでいるらしい。別荘地の管理などで外貨を稼ぎ、必要な物はさつき僕らが買い物をした街まで行き、買ってきて生活をしていると言つた。

「彼の叔父さんのお友達なんですね。」

悟に聞いたことを尋ねてみると、

「ああ、隆司とは元の職場の同僚でな。」

「そうなんですか。」

「T市にある商社に勤めていた。あれ47歳の時やつたなあ。ああいうサラリーマン生活が性にあわんくてな、どうしたもんかと悩んだつた時やつた。ちょうどリストラの波が押し寄せてきて、早期希望退職者を会社が募つたんや。こりやいわと俺はさつさとやれに応募して、たんと退職金をもらつて辞めて田舎で暮らさうと。文にはだいぶ反対されて離婚寸前になつたけど。」

「結局、お前さんが押し通したんや。」

文さんは呆れ顔をした。

「それで、前から住みたかつたこの土地に引っ越してきて、つてもあつてな。今の別荘地を格安で譲り受けたんだ。その管理とこいつやつて自給自足の農業生活でなんとか食べているんだが、この生活が俺には合つてると思つてる。」

「うちはこんなへんぴなとこ嫌やつたんやけどな。」

「でも、文だつてすぐに馴染んだんやんか。」

「さうか?」

「こいつは色が白うて弱々しくてなあ、こつち来てからせん。こんな丈夫になつて強うなつたんは。」

「ええ、この人が弱々しいつて?」

前の文さんの姿が想像つかなかつた。

「でないとやつていけえへんかつたんや。」

僕は文さんことを、猫のよつた感じの女性だと思つたが、なるほど、若い時はたぶん線が細くて纖細な感じの女性だつたんだろうと思つた。田舎の生活で大変たくましく、強くなつたんだろうと今の文さんを見て納得した。

座敷の円卓の上に並んだ料理を、文さんがあれこれと取り皿に取つてくれた。中でも美味しいと思つたのは、お豆腐をステーキにして、鉄板に長芋の擦つたのを流し込んだ物だつた。ちょっと豆腐が硬くてしつかりとした食感で、美味しいと彼女に言つと、それもこの辺の料理だといつた。

嫌いな食べ物はないのかと聞かれたので、別にないと答えると、

彼女は

「ええことや。悟は好き嫌いが多くてな、大変やつたんやで。」

悟は罰の悪そうな顔をしたが、それを聞きながらもくもくと黙つて食べていた。

「おお、そうやな、だいぶ治つたけどな。あれは別荘地を管理し始めて2、3年経つた頃からやなあ、隆司が悟を連れて来始めたのは文が何作つても箸をつけんくてなあ。ほとほと困つたよ。」

「ええ、そんな我儘だつたんですか？」

僕は笑つた。だつて、今だつてあれはまずい、これは嫌だと食べ物に関してはうるさいんだから。鰻はダメでしょ、スペゲティだつて僕は大好きだけど、悟は嫌いだし。あと何だつけ？

「あんまりこいつ家庭料理みたいな食べたことなかつたんだよ。それだけだ。」

彼は反論した。

「まあ、来始めた頃はほんととつつきにくい子でなあ、きついし、しゃべらんわ、食べんわで。でもこの辺の生活が面白かつたんやうな。そのうちに馴染んでね。この子の兄弟やら、その辺の近所の

子供やら連れて、夏は川へ泳ぎに行つたり、釣りをしたり、冬はその辺の山に入つてクロスカントリーやらスキーをしたり。隆司には子供がおらへんかったもんで、悟のことをたいそう気に入つていて、ほんとの子供みたいに夏も冬も連れて遊びに来ておつたからなあ。

「叔父さん、今は？」

悟が答えた。

「仕事で海外出張。イスタンブールだ。もう3年はあるね。」

「そりやな。」

吾郎さんが答えた。

「隆司がおらん間に悟が結婚したんて聞いたたら、びっくりするやろうな。」

「うん。一応手紙では知らせた。」

「そりやか。」

そこで吾郎さんはちよつと眞じよびんだ感じで、彼に聞いた。

「親父さんは？」

「うん。承諾してる。」

「そりやか。」

「最近、どうなん？」

文さんが聞いた。

「うん、普通。」

「結婚のことはなんて。」

「うん、喜んでくれたよ。」

親父さんはうまくいっていないうことを聞いたことがあった。それでも結婚が決まった頃から少しづつではあるが行き来していると言つていた。たぶん、ふたりもそれを心配しているんだろう。

「そりやか。」

そこで、文さんは興味津々で相手の女性のことを尋ねた。それについて悟は簡単に答えただけで、あまり深くは説明しなかった。

「文さん、ビールないよ。」

彼は空になつたビンを指差して、追加をねだつた。

「はい、はい。」

話を変えようとした彼の意図が僕にはわかつていた。

文さんがビールを取りに行って席に戻ると、今度は僕の話題に話を振られた。

「隆博くんは悟と同じ学部なんやで？」

吾郎さんが聞いた。

「ええ。」

あまり学部内では顔を合わせても話したことはほとんどなくて、ワークショップで回席したのがきっかけでのつていたと説明する

と、

「まじめなヤツでな。新入生でも、飲み会やサークル、合コンなどで遊んでるやつは結構いるのに、ほんと真面目に勉強してて、ワークショップでもす”い成績良くてな。俺んら上のヤツからも評判が良くてな。礼儀正しくて。」

悟が僕を褒め始めたので、

「やめてくれよ。そんなんじゃないよ。飲めなかつたからそういうのに出なかつただけだって前言つたじゃないか。」

そう言つと、

「え、こんだけ飲めるのにか？」

吾郎さんがびっくりした。

「それを飲めるようにしたんだよ。俺が。」

悟が自慢げに言つた。

「悪いことばつか教えよつて。」

文さんがまたぽかりとやつた。

「そんなことないですよ。先輩は勉強もスポーツも何でも出来るし、下の者にも面倒見が良くて、僕ら後輩連中の間では人気あるんですよ。結構勉強も見てもらつたし、今のアルバイトだって。」

「アルバイトは何を？」

「俺が前やつてたの引き継ぎさせたんだ。」

「翻訳のか。」

「ええ。」

「隆博は翻訳家になるのが夢なんだ。だから田標を持って勉強している。遊び半分で親に金出して貰つて、のんべんだらりと来ている連中とは違うよ。」

「あんまり褒めると後で何かあるんかなあつて思つちやうよ。」

「別になんも。褒めて悪いか。」

悟が目を細めた。

吾郎さんが

「まあ、だいぶ褒めとかんと明日の強行ツアーヒマツキ合つてもらえんからなあ。」

笑つて彼を叩いた。

「そりかな。えらいかなあ。吾郎さん。」

急に心配そうに悟が訪ねた。

「うん、今年は雪が少ないから、そんなに積雪はないと思つたさ。」

隆博くん、雪山は？」

「初めてです。」

神妙に答えると、

「山は？」

兄貴に連れられて行つた山の名前をいくつかあげると、登山もたしなむ吾郎さんはふんふんと聞いており、おもむろに「でも、雪山は初めてだとあんまり傾斜のひどいところはやめたほうが無難かも知れんぞ。」

と答えた。

「そうかなあ。」

「うん。」

そしてふたりして地図を広げて明日のルート変更の話をし始めた。それを脇で聞いていると、台所で作業をしていた文さんが来て、

「あれんら話していのうちに風呂に入らんか?」

と尋ねてきた。

「風呂? いいんですか?」

「今沸かしておる。入つていけば帰つて寝るだけだから楽だ。」

「風呂からあがつたら美味しい林檎をもらつたから、むいてやる。それに悟にもらつた菓子を食べないかん。」

好意に甘えることにした。

文さんに案内されて風呂へ行く。勝手口から裏へ回るよう言われたので、家の外にあるらしい。風呂のある建物は別になつていて、トタンと木板で囲つた小屋が見えた。文さんに促されて中に入ると、なるほど、釜風呂だ。初めて見る。

「すうい。」

感心すると、

「こういう風呂は初めてか?」

「ええ。」

ひとりで入るにはちょっと大きめで、丸い橢円形の鍋を連想させるような、内部が少し赤茶けたような鉄の釜の風呂桶があり、脇にすのこが敷いてあり、脱衣場が作つてある。風呂桶の真横に窓が作つてあり、そこから外をのぞくと、下に薪をくべるようなかまどが作つてある。

「毎日沸かしているんですか?」

尋ねると、

「うん、結構大変なんでな、夏場は毎日沸かしておつたが、冬場は2、3日に1回くらいかな。」

「そうですか。」

「うちが下で薪をくべてやる。湯加減が少しぬるいかもしれん。」文さんは風呂桶の下に板を敷いて入るように指示して外へ出た。熱くなつた釜底に足が触ると火傷をするからだ。言われたとおりにして風呂桶に身を沈めると、鉄の匂いなのか何なのか、何ともいえない香ばしきような、草のよつなかぐわしい香りがした。湯が柔

らかくて身体の芯まで暖まるよつた感じがした。

「湯加減はどうや?」

外から声がした。ぱちぱちと薪が燃える音がした。

「いいですよ。」

「少しぬるいか?」

「もう少し熱い方が好きだな。」

「そうか。」

文さんが薪をくべる音がした。

「どこの温泉よりもいいですよ。こんなお湯初めてだ。」

「そうか、普通の家庭用のホール一釜よりこいつの方が暖まるからな。」

「うちもこへ来て、こんな風呂は手間がかかるし、改造して普通の家のよつた風呂にしようとあの人と言つたんやけど、あの人はこの風呂が気に入つていて。そのうち、うちもこの風呂が気に入つな。冬はほんと暖まつて湯冷めしにくい。」

確かにじんわりとゆっくり身体の芯から温まるよつた気がする。僕は薪をくべてくれる文さんと、窓越しに話をしながら湯船につかる。

か

「文さん?」

「うん。」

「先輩は…。」

「悟と呼んじるんじやろ。」

ああ、聞こえていたのか。それで僕は言い直して

「うん、悟はいつも友達とか誰か連れて来ていたんですか?」

「そうじやなあ。高校2年くらいが最後やつたかなあ。それまでは部活の友人やら学校の友達やら連れてきおつたが。近所の子供たちもおつたし、隆司と2人で来る時もあつたし、いろいろやな。」

「そうですか。」

「悟はいつも大勢の人に囲まれてゐる。学校でもそうでした。僕な

んかはどちらかというと人に囲まれていると疲れてしまう方で、2、3人の仲間といの方が気が楽でした。だから、人気のある人でいつも大勢の人に囲まれている悟が僕のことを覚えていて、ちょくちょく僕がバイトしている店に遊びに来てくれたのがとても意外で。

「どうか。だけどあの子は寂しい子や。」

「確かに大勢の人に囲まれていることが多い。うちに来る時も友達を何人か連れてきて。でもうちはいつも気になつておつた。」

「何がですか？」

「心がそこにはないんや。」

「えつ？ 心が？」

僕は聞き返した。文さんは言った。

「ああ、人に囲まれて楽しそうにしていても、心ここにあらずっていうのかな。心底楽しんでいない、心はそこになくてどこかに行ってしまつていてるような、そんな気がして。」

僕はいつも仲間に囲まれていた悟の姿を思い出してみた。

「皆に人気があるて、スポーツも勉強も音楽も、何もかもスーパー・マンみたいに秀でていて、そんな人なのに？」

「それがあの子の鎧だと、思つたことは？」

僕ははつとした。海辺で聞いた話。僕に抱かれて放心したように、砂の上に寝転がつていた彼の表情を思い出した。

「うちはあるの子が可愛い。うちらにも子供がおつた。女の子で小学校3年やつた。一人っ子やつたんやけど、ここへ来る前に事故で

「文さんは沈黙した。そつだつたのか。」

「ここへ越して来て、隆司があの子を連れてきて。うちは悟に自分の死んだ娘を思つとたんやろうな。それもあつて可愛くて。」

「僕は聞いてみた。」

「ここへ来たばかりの時は、だいぶ今とは性格が違つたみたいですね。」

「うん。きつい目をして、無口で、大人なんか信用しとらんというような顔してうちんらを受つけんかつたな。だいぶ長い間。」

「それを叔父さんが？」

「隆司には懷いておつた。うちんらが隆司にとつて気の許した友人であることが、悟にもだいぶわかるようになると、うちんらにも懐くようになつてきたが、初めて会つた時のあの子のきつい目が忘れんくてな。」

「そうですか。」

きつい目。人を信用しない目。そんな目をした子供の頃の悟を僕は想像してみた。そしてそれと同時に脳裏に浮かんだのは朝見たあの古い傷跡。温まってきた僕は湯船から出たり入つたりしながら、聞いてみようかどうか迷つていたが、思い切つて聞いてみることにした。

「文さん、変なこと聞いてもいいですか。」

「何や?」

「文さんは子供の頃から悟のこと知っているんですね。」

「もうやな。」

「最初に悟郎さんが悟のこと、生傷が絶えん子やつたって言つたんですけど、あれは?」

文さんは黙つた。聞いてはいけないことだったんだううか。僕はばつが悪くなつて気まずい雰囲気を打ち消そうと、「いや、やつぱりいいですよ。それより、もつお湯のへりの熱さでいいですよ。」

と笑つた。すると文さんは代わりにこう答えた。

「隆博。お前さんになら話しても悟はかまわんと思つてゐるだらうと思つから、話すわ。」

「あの子がここへ来始めた頃、悟を風呂に入れようとして着替えを持つてきた時に、見たら、体中に細かい傷がついておつたんや。すぐによく思つて、隆司にそれとなく聞いてみたら、あの子の親父さんが。」

(ああ、やつぱりそうか。)

子供に自分の敷いたレールを歩かせようとする威圧的な父親の姿が目に浮かんだ。反発していた彼に親父さんは面白くなかつたんだろつ。

「腹の傷跡は?」

「見たんか?」

「ちらりと。いつ頃の傷?」

文さんは答えた。小学校高学年くらいの時の話らしい。彼の母親が浮気をしていたのが発覚したらしく、それに激昂した彼の父親が母親を責めたらし。その時に母親に手をあげた父親に反発した彼

に矛先が向かつたらしいが、詳しいことはそれ以上文さんも知らない。母親は従順で父親の言いなりになるような人だつたらしいが、暴君である夫から連れ安らぎを求めたかつたんだろう。その母親をかばつた彼に、妻に向けるべきの怒りを彼に向けたのか。

「隆司がそのことをずっと気にしておつた。自分には子供もないし、悟をひきとりたいと何度も、何度も、あれの父親と話をして。」

「何故、お母さんは悟を連れて離婚しようとしたんですかね。」

「わからん。あれの母親のことは、隆司はあれの母親の兄弟だから、だいぶ母親にも説得したとは思うがな。とにかくあの子の父親は首を縦に振らんくてな。中学を卒業した時に、隆司が後見人になつてとにかく父親の元から離したんや。それが悟の希望でもあつたしな。」

「そうですか。」

そんなつらいことがあつたんだ。そんなところはおぐびにも見せずについつも明るくて、強気で。でも、時々ふつと寂しそうな、疲れたような顔をすることがあつた。彼の心の内の闇を見たような気がした。

窓の外で薪がぱちぱちと燃える音がする。窓の外から夜の冷気が入り込んで、遠い所で何がが鳴く様な音が聞こえた。少しの間僕らはお互い口を聞かずに黙り込んでいた。すると、文さんが思い切つたように声をかけた。

「隆博。」

「はい。」

「うちなあ、今日お前さんに会つて思つたんや。」

「何をですか？」

「さつき、あそこでみんなで食事をしておつた時に、悟がじつとお前さんを見つめつた。あんな目をうちは初めて見たよ。長年、悟を見て來たけど、あんな安心したような顔を初めて見た。大勢の人々

囮まれていても心はここにないことをすつと氣にしておつた。でも、今日はあの子の心はここにある。それがはつきりわかつたよ。」
彼女は言葉を区切つた。

「どうしてなのかも。」

僕はちょっとの間、答え様子がなく黙つていた。何と返事をしていいものか。彼女は知つてゐる？頭の良い勘の鋭い人物に見受けられる。僕らの関係を気づいているのか。

黙つてゐる僕にさらに彼女は話を続けた。

「隆博。悟にはお前さんが必要だと思つ。支えになつてやつてくれ。」

「風が木々の間を通り、又遠くの方で鳥のよくな鳴き声が響いた。」

僕は言つた。

「はい。」

とだけ短く答えた。複雑な気持ちだった。

風呂から上ると2人は碁を並べていた。

「どうだつた？ 風呂。」

悟が聞いてきた。

「すごく温まるね。初めてだよ、ああいつお風呂。」

「そうか。」

文さんが来て彼に言つた。

「悟も入つてきな。」

「うん。」

そう言つて彼が席を立つたので、僕が吾郎さんの碁の相手をすることになつた。

「腹はふくれたかな。」

「ええ、文さんは料理が上手ですね。どれもおいしかつた。」

「ほうか。」

「田舎の飯ばかりで若いもんには口に合わんかと心配しどつたが。」

「

「こえ、そんなこと。」

畠をしながら吾郎さんは明日のことを話し始めた。

「わざわざ、地図を見ながらコースを少し変えさせたでな。あいつ、やつぱりちょっと強行なコースを立ておった。」

（やつぱり。）

「隆司と何回も行つているコースだけど、雪山をやつたことのないもんにはちょっとえらいこと思つてな。」

「助かりました。」

そう笑うと、

「天気も悪くないみたいだし、ほんとに真っ白で綺麗だぞ。」

「吾郎さんも？」

「ああ、わしも隆司と何回か行つてみたことがある。」

「そうですか。」

吾郎さんは明日必要な装備は揃えて車に積んでおいたと話した。そして、明日途中まで同行する旨を話した。

「でも、何から何まで。」

「いや、かまわんよ。あんなことに車を留めておいたらバッテリーが凍つてしまわ。しかも借りた車らしいが。」

彼の話では、別荘地から釜トンネルの手前までは車が入れる。そこから先は、車は通行止めなので、トンネルの手前に車を留めて行くつもりでいたのだが、日帰りならいが途中でテントを張るつもりなら、夜あの場所に置いておくと寒さでバッテリーが凍つてしまうことがあるらしい、それを心配してやけで車で乗せて行つてやるというのだ。

彼と明日のことを作れこれ話していると、悟が風呂から上がり来たので、文さんが果物をむいて持つてきた。そしてさつきのお菓子を食べながら、お茶を飲んで話をしていると夜も更けてきたので、僕らはそろそろおことますることにした。明日は5時前に吾郎さんが迎えてくれるらしいので、あまり夜更かしするのも良くないと思つて。

車に乗り込むと、後ろのハッチバックにはテントやらスノーシューやらの装備がつんでいた。

「忘れ物はない？」

と聞くと、

「ああ、吾郎さんと一緒に積んだから大丈夫だよ。」

彼が答えた。

文さんと吾郎さんは庭先まで出て見送つてくれた。お礼を言つて車に乗り込むと、吾郎さんが家の中に入つていく姿がルームミラー越しに見えた。でも、文さんは僕らの車がうーんと遠くまで、その姿が見えなくなるまで庭先に立つて見送つてくれた。それを僕は車のサイドミラー ですつと見ていた。

文さんの姿が見えなくなると、僕は悟に文さんの話をした。

「おもしろい人だろ？。」

「ああ、想像していた感じとはずいぶん違つたけどね。」

「どんな想像？」

「悟が目尻を下げてあの店で菓子を選んでいる姿を見て、ずいぶんと上品で優しげな感じの老婦人を想像していたんだ。でも、いきなり初対面で呼び捨て。？隆博、台所を手伝え。？だもん。」

悟は大きな声で笑つた。

「うん、うん、いつもあの調子なんだ。ぶつきらぼうに見えるけど、口も悪いけど、とても優しいんだ。本当に人のことを細かいところまで気を配つて考えていてくれるしね。面倒見も良いし。」

ああ、彼は本当に文さんのことが好きなんだな。

「悟は文さんに似てるね。」

「どこが？」

すつとんきょうな声を上げる。

「口が悪いところ。」

「ああ、違いない。」

ひと呼吸おいてつけ加える。

「面倒見が良いところもね。」

そう言つと彼は照れたように横を向いた。

別荘に着くと、僕たちは明日の荷物を確認し、早々に寝床にもぐりこんだ。田覚ましを3個も並べて。

「起きられるかな、自信がないよ。」

「何で？」

「飲みすぎたよ。」

「あのくらいでか？」

だからあんたみたいに強くないっていうの。彼もだけど吾郎さんもかなりの飲兵衛だな。そう思いながら布団にくるまつていると、あつといつまに眠りに落ちた。

案の定、次の日の朝、頭が少しがんがんした。

「一日酔い？」

僕の冴えない顔色を見て、悟が聞いた。彼は今起きたばかりの僕と違つて、もうすでに身支度を整え、すつきりした顔でコーヒーを沸かしていた。

「大丈夫か？」

コーヒーの入ったカップをキッチンのカウンター越しに僕に渡しながら、彼が聞いた。

「うん、何とか。」

「すぐに吾郎さんが来るぞ。早く用意しろよ。」

「うん。」

コーヒーを流し込み、顔を洗いにバスルームに行く。歯を磨き顔を洗つてタオルで顔を拭いていると、そらきた。玄関のドアをどんどん叩く音がする。着替えながら様子を伺つていると、やつぱり吾郎さんだ。まだ約束した時間より早い。せつかちなのは吾郎さん似か? 血族でもないのに、せつかちなのは吾郎さん似、口が悪く、面倒見が良いのは文さん似。笑いが込み上げてきてくすくす笑つて

いるとい

「おい、吾郎さん来てるだ。早くしろよ。」
と叱責が飛んだ。

「「めん、すぐ出るよ。」

外には吾郎さんのピックアップが停まっていた。

「おはよう」「やあこます。」

声をかけると、

「おお、おはよう。大丈夫か？ 昨日はすごいぶん飲ませてしまつたが。」

「吾郎さんが僕の顔を覗き込んだ。

「大丈夫だなあ？ 隆博。」

背後からやつて来た悟が僕の手にザックを押し付けた。

「ああ、「めん。」

ちょっと酒が残つてゐるみたいだ。荷物を忘れるなんて。

「じゃあ、行こうか。」

悟のエクストレイルに吾郎さんが乗り込んで言つた。彼が助手席に座り、僕は後部座席に座つた。

まだ、夜明け前で道は暗く、明かりのない別荘地の細い下り坂を吾郎さんは馴れたハンドルをばきでどんどん下つていった。

「やつぱり道凍つとるわ。」

「もう3月の半ばなのに？」

僕が聞くと、

「この辺では3月はまだ冬だよ。」

悟が答える。

細い道をどんどん下り県道に出る。車がぼちぼち走つてゐる。県道を15分くらい走ると、前方に古い大きな、今にも崩れ落ちそうなトンネルが見えてきた。

「あれが釜トンネルだよ。」

なるほど。トンネルの数メートル先に車を何台か止めることが出

来るスペースがある。ちらほらと僕らみたいなトレッキング客が荷物を出したり、装備を身につけたりしている。そのスペースに吾郎さんは車を止めた。ここまで道は綺麗に除雪されていて、路肩には50センチほどの雪が積もっている。こんなに雪があるのかと感心して見ていると、

「この辺の雪で感心してどうするんだ。奥はもっとあるよ。」

彼が言いながら僕のザックにスノーシューをくくりつける。事前に装備の使い方などを聞いていた僕が「まだいいの？」

と聞くと、

「トンネルの中を出て、しらぬだの池までは整地されているから雪はないよ。スノーシューをつけるのはその先でいい。」

吾郎さんが付け加えた。

「トンネル内は所々凍つてるからな、気をつけ。」

僕らが準備を済ませたことを確認すると吾郎さんは帰つて行つた。

「さ、行こうか。」

嬉しそうに悟が笑顔を見せた。いつもこの池になるとホントに嬉しそうな顔をする。

東の方向から太陽が昇り始める。うつすらとした日の出の光が、岩を穿つて掘つたトンネルの表面を映し始める。

僕はザックを担いで思わずその重さにびっくりした。出遅れた僕を振り返つて、

「ちょっと荷物が重いか？」

と聞いた。

「いや、大丈夫だ。」

テント泊なので20キロくらいはあるかもしない。

「しらぬだの池まで行こう。そこで重かつたら俺が少し持つよ。」

冬期通行止めで硬く締まつたゲート脇を抜け、トンネルに続く口

ツク・ショードに入ると、半円形となつたトンネルの入り口が現れる。

トンネルの内部に入る。電灯はついているが、所々切れている箇所があつて、トンネル内はうつすらと暗闇に包まれている。暗い湿つたトンネル。上からぼちやん、ぼちやんと音を立てて水が落ちてくる。雪はないが、やっぱり所々凍つているみたいで、足をすくわれそうで怖い。幅員の狭くなつたトンネルは大きく右へ曲がり、そして左へ大きくカーブする。その傾斜のきつさに驚いた。息が上がる。荷物の重さが肩に食い込んでくる。かなりしんどい。

「大丈夫か。」

彼が声をかけるのに

「うん。」

何とか返事を返す。荷物を担いでいるせいか結構暑い。

「かなり勾配がきついね。」

と返すと、

「クラシック状に屈折して続くので、実際の距離より長く感じるかもしれない。」

汗もかかずに彼は答えた。

「凍つているけど、アイゼンをつけるまでもないだろう。でも転ばないよう気をつけて。」

「ああ。」

一面に凍つっていた場合のために、軽アイゼンをザックの上部に入れて出発したが、このくらいなら必要ないと彼は言った。それでもアイゼンをつけてあがつてくる人たちもいるみたいで、カツーン、カツーンとアイゼンが路面を打つ音が後方から聞こえてくる。

僕がしんどそうにしているのを見て、彼は歩調を少し緩めた。歩きながら、トンネルの内部を見回す。岩を穿つて掘った名残として、むき出しの岩肌部分がいくらか残つている。トンネルの上部の岩肌には水がたまつていてるらしく、水漏れの音が続き、所々大きなツラ

ラがぶら下がつていい。

「もうすぐだから。」

前方から彼が声をかけた。

トンネルの出口を出ると、上洞門に出る。かなり長い洞門内の舗装道を歩くと、やつと洞門を抜けた。そこを抜けると舗装された県道に真っ白な雪が積もっていた。日は昇つていて、朝日に照らされ一面の雪がきらきらと光っていた。暑さと急勾配のせいで息が上がった僕はそこで一息ついた。

そして前方を眺めると真っ白な雪を被つた荒々しい感じのする山がそびえ立つていた。

「すうい。」

声を上げると

「聖岳だよ。」

と、ペットボトルから水を飲みながら悟が答える。

「へえ。」

「このトンネルを抜けてこの聖岳を見ると、大郷高地へ来たんだなあという実感がわくよ。」

彼が答えた。そこで聖岳を眺めながら僕らはひと息いれることにした。

この先は左へとカーブして緩やかな林道を30分程歩く。大きく張り出した屋根を右へと回り込み、笹とシラカバ林の平地を過ぎる。すると下り加減のスロープの先から三方連邦がゆっくりとその壮大な姿を現す。誰もがその雄大で美しい山々の姿を目にすると、息を呑み、感嘆の声を上げる。すばらしい絶景だそうだ。

ひと息入れた後、又歩き始める。呼吸も落ち着き少し余裕の出てきた僕は、歩きながら彼に聞いてみる。

「夏はどんな感じ？」

「夏は夏でいいよ。緑が本当に綺麗で、日が痛いくらいだ。」

彼の叔父さんがこの場所が好きで、毎シーズン何回か訪れている。

つまりそれに彼も同行しているから、冬以外にも春、夏、秋と訪れていることになる。そのどのシーズンもそれに素晴らしいと語った。

「これから先に、まだいい景色を見るこの出来るスポットがある。

「そうか。」

左へ右へと緩やかに大きくカーブして続く林道からはさつきの聖岳がいろんな角度をとつて僕らの前にその姿を現す。

その聖岳を眺めながら歩いていくと、笹とシラカバ林で覆われた平地が見えてくる。その先を抜けて少し下りになつてているスロープを歩いていくと、その例の三方連邦が見えてきた。

「すうじー！」

思わず歩いていた足が止まる。こんな綺麗な山々は初めて見る。誰も足を踏み入れてはならない神の領域。朝日に照らされて神々しいまでの輝きを放つ山々。太陽の光が当たる角度によつて山肌に陰影が出来ている。雪を被つた渓谷のその白い部分が、切り立つた象牙の肌を連想させる。まだ上方には靄がかかつていて、その稜線ははつきりとは見えない。緩やかに、時には荒々しく、手を繋いで広がる釣屋根。自分の方に迫つてくるようなその存在感に圧倒される。

「山が動いている。生きているよ。」

「おもしろいこと言つたな。お前。」

悟が鼻で笑つた。

だつて見ていると、朝日が少しづつ本当に少しづつだけど、その照らす角度を変えていく。それがまるで山が生き物のように動いているように思えるんだ。

ばーっと見とれている僕に彼が説明する。

「俺のこの指の先、わかるか？」

「あれが西三方だ。その横に並んでいるのが奥三方。そして前三方だ。」

彼の指差す方向を目で追う。すばらしい大パノラマだ。

すばらしい被写体を、腕の良いカメラマンがその卓越した技術で写真に収めた物を見て、なんて綺麗なんだろう、なんて素敵なんだろつて思うけど、実際にその景色を見た感動は、写真で見た時の感動とはるかに大きな違いがある。実際、その場所に立つてみるとみないとでは雲泥の差だ。その景色の中に立つてみて、現実、その場の空気を吸い、風を肌で感じ、その時の気温、つまり熱いとか寒いとかを感じる。そうゆう視覚以外の五感で実際感じるものって、

本当に凄いと思つ。今の僕は五感全部でこの景色を堪能していた。

「す、」いね。」

又、声に出してみる。

「さ、きから隆博は？す、」い、す、」い、つてそれしか言わないんだから。」

悟はザックを降ろして、それに腰掛けタバコに火をつける。

「だつて本当に凄いよ、きれいだ。」

「冬山初めてだもんな。」

彼の隣に腰をかけようとすると、

「雪の上に直接座るな。」

と、注意された。

それで同じようザックを降ろし、それに腰かけて聞いた。

「何故？」

「体温が下がるんだよ。ちよつとしたことだけビ^クをつけた方がいい。」

そうか。

彼はゆつくりタバコを吸いながらぼんやり三方連邦を田で追つていった。

僕はその紫煙の流れが気になつた。

「山へ来てタバコはやめなよ。」

せつかくの景色が煙で台無しになるような気がした。

「うん、ごめん。この先は吸わないよ。」

そう言いながらもゆつくりと煙を堪能して、おもむろに胸から携帯灰皿を取り出す。タバコの火を消して、携帯灰皿をポケットにしまづ。

「これからちょっと行った所に林道の分岐点がある。そこから川を挟んで左岸へ行く道と右岸へ行く道がある。」

彼が地図を見せた。

「どっちへ？」

「じつちだ。しらぬだの池がある方、右岸へ出る道へ。そこから

雪があるからその分岐点でスノーシューをはじめ。」

そしてまた林道を歩き始める。道には雪が積もっているが、たいして歩きにくいほどではない。少し歩くとその分岐点が見えてきた。なるほど、ここからは結構雪がある。普通の靴ではやはり歩きにくいかかもしれない。悟に教えてもらつて初めてスノーシューを履く。デッキの大きさがちょっと気になると言うと、あまり意識しない方が歩きやすい、左右のバランスが崩れて歩きにくいからと、彼は言つた。あまり雪のない平らな所で少し歩いてみて、スノーシューの感覚を掴む。

「前に出すようにして歩いてみて。ストックをうまく使え。雪面を蹴るようにすると疲れる。体重を移動させながら、前に出した足に体重を乗せたら後ろの足を前に出して、今度はそこへ体重を移動させて。」

教えてもらつたとおりに歩いてみると、すぐに感覚がつかめた。綿の上を歩いているみたいで、不思議で結構面白い感覚だ。

「雪が深くなつたら、スノーシューで平らに雪を押しつぶすような感じで歩くと結構楽だ。この先はだんだん雪が深くなつていくからな。」

真っ白なふわふわした新雪の感触を、身体全体で楽しみながら歩いていく。30分程歩くと眼前に池が見えてきた。川かと見間違うほどの大きさで、池の周りは雪で覆われていて、誰もそこへ降りた気配はない。だけど動物はいるらしい。所々何かしらの動物の足跡が点在している。

これがしらぬだの池らしい。池のあちこちから枯れ木が点在して、それが雪を被り、この世の終わりのような悲壮感が漂つている。彼に聞くと、この池は大正時代に聖岳が噴火して、その泥流が川を堰き止めて出来たのだといつ。後方に先ほどみた三方連邦がそびえ、枯れ木がちょっと寂しい感じがするが、素敵なコントラストだ。僕

らは池を眺めながら、転々としている動物の足跡が何なのか、あれこれと思案してみた。

「夏なら鴨とかリスとか結構見るけどな。」

池の周りは結構広いスペースがあつて、夏場などは絵を描きに来ている人や、池で泳いでいる子供たちとかもいるらしい。そんな情景が嘘のように今はひつそりとしている。

小さな足跡はよく見ると、4つの足跡が丁字型に並んでいる。横2つに並んでいる方が後ろ足だとすると、これはうさぎだなど、悟が言つた。

「うさぎ？」

「雪の上に出てこるヤブや、雪の重みで垂れ下がつた枝から、枝や皮を食べてるんだよ。その辺に隠れて様子を伺つているのかも。」
潜んでいるうさぎを脅かさないように静かにその場から離れた。

「の先に、又湖があつて湿原になつていて。そこまで行つてからひと休みしようと彼が言つた。本当は釜トンネルから歩き詰めで、途中途中休憩はとつてはいるものの、座つてゆつくりするような休憩はまだとつていらない。僕は少しバテていた。本当のことを言つと昨日の酒がまだ少しうまっていた。

そこから田代湿原はすぐだつた。田代湖という湖の周りを囲むようには原の原が広がつていて、もちろん今は雪で何も見えないが。田代湖は、しらぬだの池よりひとまわりほど大きな湖だつた。池の中央に真つ白い靄がかかつていて、それが幻想的でとても綺麗だつた。横に細長く30センチほどに伸びた湖面にはうつすらと氷が張り、湖の周りを取り囲むようにブナやカラマツの林がそびえ、ケシヨウヤナギがうつすらと雪をまつっていた。まるで絵本の世界だ。

「あ、樹氷だ。」

悟が叫んだ。

僕が雪だと思っていたのは樹氷だつた。よく目をこらして見ると、湖の周りの木々の枝々に氷が張つてあり、それが一面に広がつてい

る。

「へえ、樹氷なんだ。初めて見る。」

珍しそうに眺めていると、

「めったにないんだ。こんなふうに樹氷が張っているのは。」

樹氷が張る条件は天気や気温、湿度などに左右される。よく晴れた日の朝晩は気温がぐんと下がる。その温度差が絶対条件らしい。今日は快晴になりそうだ。確かに昨日の晩はひどく寒かった。そして風がなかつた。それも条件らしい。それにしても悟はいろんなことを知つてゐる。それを言ひと、すべて叔父さんの受け売りだと言つた。

「どうしたの？」

彼が腕時計を見て、思案顔をしているので聞いてみると、

「まだ日が昇りきつていないだろ。あの方向から日が射して来ると、一瞬にして木々の樹氷が溶けるんだ。樹氷が風に乗つて流れていく様はそれは綺麗なんだつて。」

「綺麗なんだつて、つていうことはまだ見たことはないつてこと?」

「ああ、まだチャンスに恵まれなくて。」

彼の指差した方向を見ると、まだ山の岩肌に陰がじつとりと張りついていて、それが徐々に動いているのが見えた。

「どのくらい?」

「30分後くらいかな?」

「待つてみる?」

「そうだな。」

僕たちは、日が昇り樹氷が消えていくのを見るため、待つことにした。まだ日が昇りきらないため風が冷たく、突つ立っていると寒いので、僕らは雪で即席のテーブルと椅子を作ることにした。大きな雪玉を作り、何かの時に雪を掘つて避難する穴を掘らないといけないかもしないということで、折りたたみの小さなスコップを持つてきた。それで雪玉を叩いたり角を取つたりして、形を作った。作業をしていると次第に身体が温まってきた。その雪で作った椅子の上にアルミのシートを引いて、ガスコンロでお湯を沸かした。そのお湯で「一ヒーを作る。やれやれやつと温かい飲み物を飲んで休憩が出来るとほつとした。

「疲れた？」

悟が聞いた。

「いや。」

「一日酔いだろ。頭大丈夫？」

すごい、よくわかるなと感心すると、顔見てりやわかるよと言つた。そしていつもと状況が違うから具合が悪かつたりしたらすぐ言えよ、とつけ加えた。

時計を見るとあれから30分は経つていた。

「まだかな。」

「もうそろそろだろ。」

新鮮な朝の空気が流れていた。冷たくてひんやりして、それでも生まれたての新鮮な空気を感じる。僕は横に座つている彼の顔を見た。コーヒーの入つたマグカップを暖めるように両手で囲み、じつと一点を見つめている。黒のニットキャップを口深に被り、いつもは生やしたことのない無精ひげを生やしている。それがひどく大人びて見えた。そして真剣な目。その一瞬を見逃すことがないよう、一心に見つめている。樹氷が飛び去る様子はそんなに綺麗なん

どうかと思った。カラマツやケショウヤナギが樹氷をまとい、真っ白な雪で覆われた広がる湿原を見て、これでも充分綺麗だと思つていた。

いや、彼はその一瞬にして崩れ去る美しい瞬間を待つてゐるのだ。それが自分の元に訪れるかどうかなんてことは、本当は何の確信もないことだ。そんな美しくてはかない一瞬が訪れるかどうか、自分の中で賭けをしているみたいだ。まるで、それはそんなことはありえない、あつてはいけないような夢をみているようだ。そう、まるで僕と彼のことのようだ。

彼の横顔を見つめる。

（そして最後の旅。もし彼が待つてゐる瞬間がやつてきても、それを2度と僕と一緒に見ることはないだろう。）

胸の奥が痛んだ。彼は何を思つてゐるだろう。何も語らない。

時計を見る。40分経つた。

その時だ。山肌を舐めるようにして、日が作る影が徐々に移動している様をじっと眺めていると、日が完全に田代湖の上に躍り出た。一面に日の光がまるで粉を吹きかけるみたいに、湖を取り囲む林の木々の上に降りかかる。すると木々に張りついていた樹氷が魔法のように軽やかに、その身を今までの住処から日の光の中へ移動させる。それがきらきらと輝いて、一面宝石が飛び散つたかのような美しい光景を作る。僕は見惚れた。風に乗つてその宝石が自分のすぐ近くまで来るような気がした。

僕らは黙つてその光景を見ていた。ほんの一瞬。時間にすると何分、いや何秒？まるで夢みたいだ。

「まるで夢みたいだ。」

僕が心中で思つた台詞を瞬時に彼が口にした。そして満足そうに目を細め、口の端をあげて笑つた。そして続けた。

「隆博と見られるなんて。」

僕はどうした。

「ひとりで見ても綺麗だけど、こういう景色って、ひとりで見ると何だか孤独を感じるんだよな。だから良かつたよ。」

僕はなんて言つていいかわからなくて、黙つてうなずくと、

「美しいって僕いつてことなんだよな。」

「ほんとつぶやく。あの時のあの言葉。扶美もそう口にした。だけど今の僕にはこの言葉は別れを連想させる。切ない思いで、僕は彼の言葉を耳にした。

そして樹氷が飛び散つて朝田がまんべんなくその姿にあたつて活動をし始めた湖を眼前にして、僕らは名残惜しげに、ガスコンロなどを片づけ始めた。

（儂い、そう。美しいって僕いんだ。そしてこの時間もさつきの樹氷のように一瞬にして後方へ飛び去つて、2度と戻らないんだ。）

何だろ。美しい瞬間を見た後つて何でこんなふうに胸がしんみりするんだろ。多分彼も同じことを思つてゐるに違ひない、そう思つた。

2人で休憩した跡を片づけ、その場を後にした。振り返ると、僕らが作った急いでしらえの雪の椅子とテーブルが広い雪の湿原の中にぽつんと立つてゐるのが見えた。あの雪の椅子とテーブルも確かにあの美しい瞬間に立ち会つたのに、数日後には溶けて消えてなくなつてゐるのだろう。そう思つとなんだか寂しくなつた。だけど、僕らはそれを口にすることはなく川沿いの道を進んでいった。

テントを張る予定の大梨平のキャンプ場までの道を、川沿いに上流をさかのぼるよつた形で進んでいく。段々と雪が深くなつていくのがわかる。スノーシューで雪を踏み潰すよつとして歩くのだが、時折バランスを崩してしまつ。

「大丈夫か？」

時折、彼が振り返り声をかける。

「ああ。」

少し頭が痛いよつた気がして、すつきりしない。先ほどお昼を食

べた時に薬を飲んだのだけど、こんなふつこつまでもすつきつしないような一日酔いは初めてだ。

調子が出ないなあと、思いながら歩いていると、そんな僕の様子が気に掛かるのか悟は度々振り返って声をかける。大丈夫だと答えながら、彼の背中を追うようにして歩いていると、ふと頭に浮かんだことがあった。

（そうだ。まだ口にちを聞いていない。）

東京へ行く日にちのことだ。吾郎さんの家で2人が話しているのを聞いてしまったけど、直接彼の口からは聞いていない。

（聞いてみようか。）

聞いたからとこでどうなるものでもない。彼は東京へ行く。僕は又元通りの生活に戻るだけだ。

あの朝、彼は何もかも捨てて、お前だけいたらいと口にした。だけど、それは一時気持ちが高ぶつて思わず口にしてしまったことで、もしそれが悟の本音だとしても、乃理子さんと産まれてくる赤ん坊を見捨てるわけになんていかない。

どうしたらいいのか。どうすべきなのか。そんなことわかりきつている。

だけど、聞いてみたい。はつきり彼の口から。そう、別れをだ。その方がすつきりする。だけど、その時、僕は冷静でいられるだらうか。

今まで、お互の思つてこことなんて、話して確認しあうべきではないと思つていた。そうしたところで何かが変わるわけではないし、聞いて余計にお互いつらい思いをするだけかもしれない。でもこつして一緒にいられるのはこれが最後だろ。最後だと思えば思つほど、その思いは大きくなつていぐ。胸を指すような焦燥感にかられる。このまま何もなかつたかのように、お互の生活に戻つていく。樹氷を見たときを作つた雪のテーブルと椅子は数日経てば崩れて、春になつて暖かくなつたら溶けて消えてしまう。まるで現

実、僕らがそこに存在などしなかつたよつたよ。

（聞いてみようか。）

また思いが頭をもたげた。行つたり来つたりだ。歩きながらあれこれと思案する。ふと視線を川の流れの方へ移す。こんなに寒くて周りは凍つてしまつのに、何故川は凍らないのかな。流れているからだよな。

物思いにふけつていると、又声をかけられた。

「休憩する？」

ぼんやりして悟の声を聞き逃した。

「何？」

「休憩するかつて聞いてんだよ。」

彼が仏頂面で立ち止まつた。

「え、ああ。」「いや、いいよ。」

「そうか。大梨平までまだだいぶあるから。なるべく早めに着いてテント張りたいし、いいか?」「彼は少し急ぎたいようだ。」

「ああ。」

聞くタイミングを逃してしまった。

それでも、雪山は初めての僕には足元が悪く、歩きづらかった。しているのがわかつたらしく、彼は少し歩調を緩めた。それで僕は周りをゆっくり見ながら歩く余裕が出てきた。

川原には所々雪が無く、岩がむき出しになっている所や、石がころごろと転がっている箇所がある。そして川の流れを取り囲むようにして、雪を被った山々が並んでいる。何だか急にその川原に降り立つて川の流れを間近で見てみたような衝動に駆られた。

「悟、下へ降りてみたい。」「えつ。」

「彼はびっくりして振り返り、雪があるから滑るよと言つた。」「無理かな。」「そうだな。降りれそうな所を探すから、もう少し先へいってみよう。」

そう言つて、少し進んでいくと、傾斜があまりなくて川原へ降りられそうな道があつた。ストックを上手に使ってゆっくり降りいく。川原にはすぐに降りることができた。川原には岩がごつごつしていてスノーシューが駄目になるから、その辺を歩きたいならスノーシューを脱げよと彼が言つた。それでその通りにして、川の流れが見える所まで歩いていってみた。またさつきのことを思った。川

は流れているから凍らないんだよな。そして何故か芙美のことを思い出してしまった。

広い川原だった。三方連邦の1つ銚子ヶ岳が川の上流の方に、ちょうど僕の目の前に位置していた。雄々しく人を寄せつけない威厳をたたえて、氷のように尖ったその尾根は、僕を威圧するように何も言わずに聳え立っていた。その靄がかかつた中腹を見て、そこに芙美がいるような気がした。

人が死んだらどこへ行くんだろう？その時自分の頭に疑問がふと浮かんだ。身体は歩いてきたので熱く、暖かい体温を感じる。冷気を含んだ風が自分の頬をなでてくる。身体は温かいのだが、表面が外に出ている顔などの部分には風の冷たさを感じる。

気温は何度だろう。1もないはずだ。こんなに寒いはずなのに、表面に出ている部分は別として、身体の中に血がめぐつて、生きていることを感じさせるような体温の熱さを感じる。その様子を後方でストックを杖にするようにして立つて見ていた悟が、同じようにスノーシューを脱いで僕の方へやつってきた。

「何が見えた？」

そして僕の背中へ質問を投げかけた。

「あの世だよ。」

「あの世？」

彼はぎょっとしたように言い、そして笑い出した。

「何、それ？」

僕は言った。

「人が死んだらどこへ行くんだろうって、考えたことってある？」

「いやあ、ないな。自分は多分リアリストだろうな。そういう事つて考えたことないな。」

「ふうん。」

「何、隆博はなんて？」

真面目な顔に戻つて彼が尋ねた。

「いや、川の流れを見ていてふつと思つたんだ。あの世とかじゃな

くて、死んだら魂はどこへ行くのかつていう話。」「魂？」

「そうだ。死んだら身体は灰に帰るだろ。でも魂はきっと帰る場所があると思うんだ。もしそういう場所があるとしたら、それはこんな所じゃないかなと思つたんだ。」

「なんていうか、神々しいといつか人の観智が及びつかないような、そんな場所に思えるんだ。」「死んだら人はどこへ行くかじやなくて、魂だけになつてあるべきところへ帰つていくんだろうなつて思うんだ。」

「ふうん。」

感心したように、今度は彼が鼻を鳴らした。

僕は川の流れで磨き上げられる川中の石を見た。その流れは透明で澄んでいて、本当に川底まで綺麗に見える。川の中の石や岩のひとつひとつまでね。その澄んだ流れを見ていると実感する。この考えが真実だつて。

それは、人は死んだら魂だけになつて、何も考えない？無？の存在に戻るんだ。ここにある石ころや木の根っこや、川原に寝転がっている岩のひとつひとつや、もしくはこの川の流れの一環になつて、やつと本当の安らぎを得るんだろう。それは本当に幸せなことかもしれない。そして長い長い時間？自分？という存在を意識することなく、ただここに空気のようにじっと存在するだけなんだろうな。そんな話を僕がすると、悟はだまつてじつと聞いていた。そして思いついたよう前方の山の中腹を指差した。

彼の指の先に銚子ヶ岳があつた。

「あの辺りに？」

そう言い、遠くを眺めた。魂だけになつて帰る場所。彼の目線も銚子ヶ岳の巣のかかつた中腹辺りにあつた。きっと彼は自分と同じことを感じている。そう思った。そうしたら急に何だか嬉しく、胸の中が暖かいもので満たされるような、そんな気がしてきた。

僕らは川沿いをどんどん遡つて行き、今日の宿泊地に着いた。そこはだだっぴりこ雪の平原だった。はるか遠くに山の尾根が見える。本当に広くて何も遮るもののが無く、雪を被つた木が隣接する林もかなり遠くに見える。

「こりや、風が強いとかなり寒いね。」

僕が言つと、

「そうだな、テントが吹き飛ばされるかも。」

彼もにやにや笑う。

この大梨平のキャンプ場は、夏は本当に美しい牧草地で、牛なんかが草をはんでいたりして、それはのどかで牧歌的な雰囲気が漂うとてもいいキャンプ場らしい。もちろん、今はただ真っ白な雪の平原だが。

「夏はな、この辺まで来ると観光客もほとんどいなくてのんびりできて、叔父さんと来てはテントを張り、魚を釣つてきて焼いたりして過ごすにはそれはいい場所なんだ。」

そうか。僕としては夏に来てみたいな、こんなに寒くはないだろうし、縁の広がる平原で昼寝なんぞしたりすいぶん気持ちいいだろうな。

「出来れば夏にして欲しかったなんて、思つてるんだりつ~。」

「よくわかるね。」

僕の考え、図星だ。

「ふん。」

「まあ、早めにテント張りつけ。食事の支度もしないといけないし。」

「ていうか、どうせそれ僕でしょ。悟、料理出来ないから。」

「悪いな。」

「これを機会にチャレンジしてみたら。」

うん、そうだな、なんて言いながらがさごぞと道具を出し、テントを張る準備をしていく。全くやる気なんてないんだから。

それでも雪を踏み固めて、テントを張る敷地を確保していくうちに身体も温まり、なんだか楽しい気分になってきた。気がつくと頭の痛みも和らいできたみたいだ。悟はこんなことはかなり馴れているみたいで、手際よく準備し、テントを張り、寒さ除けと防水のために外側にもシートを張った。中には何枚か重ねてマットを引き、寒さをしのいだ。

「眠れるかな？」

僕が聞くと、

「寒さで時々目は覚めるだろ?」

あっけなく彼は答えた。

「そうか。まあ、いい。

まだ日が昇ついていたから、外にテーブルを作り、食事の支度をし始めた。風がなくてありがたい。

「で、夕ご飯は何?」

彼はうれしそうだ。

「キムチ鍋は?」

「いいね。」

そう、食事などの食料担当は僕。それ以外のテントなどの装備は彼の担当だ。

バーナーで火を起こし、鍋に湯を沸かす。キムチ鍋の素をいれて汁を作り、冷凍して持ってきた野菜や肉を入れる。事前に切って冷凍した食材を持ってきたのだが、解凍することなく、1日経った今でもそのまま凍った状態のままだ。まあ、これだけ寒いんだから当然といえば当然なんだが。明日の朝はこの残った汁にレトルトのご飯を入れて雑炊にする。湯を沸かし、切っておいた材料を入れるだけだからあつという間に出来上がる。真っ白い湯気がもうもうと雪の平原に立ちのぼる。他にテントを張っている者もいない。まるでのろしを上げているみたいだ。

「出来たよ。」

テントの設営をしていた彼が振り返った。

「もう?」

「だから、切った材料を入れるだけだから、悟でも出来るよって言つたじやん。」

「いや、お前が作ったほうが絶対うまい。」

絶対食事当番をやろうとはしないんだから。

まあ、いいか。荷物の中からお皿やコップなどを取り出す。他はソーセージ、缶詰やサラミなど。もちろんお酒も。寒いので温まるのがいいということで焼酎のお湯割にすることにした。

で、僕らは焼酎をちびちびやりながらいろんな話をした。まず僕はずいぶん前から聞いてみたかったことを聞いてみた。

「前から思っていたんだけど、悟は何でも出来るのに、何故料理が出来ないの?」

そう聞くと、彼は困った顔をした。

「何故、って言われても困るなあ。」

「だつてひとり暮らしで絶対出来ないと困るのに。」

「やうなんだけど、まあ、出来なくて食べるのには困らないし。やううと思ったことも無いからなあ。何故って言われても思いつかないよ。」

それからそんなこと初めて聞かれたとも言い、ちょっと考えてからこつ続けた。

「叔父さんに似たんだろうなあ。」

「例の叔父さん？」

「ああ。」

「子供の頃からいろいろな所へ連れて行ってもらつて、その大半はこんなアウトドアだから、もちろんキャンプやらバーべキューやらで料理をする機会はあつたはずなんだけど、叔父さんが飯合でご飯を炊くといつも真っ黒で、そのまずい飯をいつも無理やり食べさせられた覚えがある。その頃はレトルトのご飯なんてなかつたからね。叔父さんはアウトドアでも料理を楽しむよつなタイプではないんだ。それが一番の楽しみなんじやないかと思つただけだ。

「それで叔父さんがやつているのを見よう見まねでやつてみたこともあるんだけど、多分料理のセンスがないんだろうな。叔父さんと一緒に。真っ黒のご飯しか出来ない。カレーもまづく食べれたもんじゃない。せいぜい肉とか野菜を焼いて食べるくらいしか出来ない。それでも充分楽しかつたけどね。」

「ふうん。」

隆博は?と振られたので、

母親が料理上手で、たぶんそういうのを食べたり、母親が台所に立つてゐるのを見ていたりしてゐるからかなあ。別にどうしてってことはないんだけど、大学に入つてから、自炊を始めたりしていふちに何となく出来るようになつていただけのことだと、説明した。

「天性なのがなあ。そういうのつて。」

「天性?」

「うん、今までつき合つた女の子が作った物より、お前が作る物の方がうまい。」

「女の子には勝てないよ。」

そう言いながら、母親が、千夏よりあんたの方が料理がうまいと言つていたことを思い出した。

「あんまり、褒め言葉にもならんね。女の子じゃあるまいし。」

そう言つてむくれると、

「ごめん、でも得意なことがいくつかあるつていいことだよ。それに男だから料理が出来ないで通る時代でもないしね。本当は少しくらい出来たほうがいいなあつて、思うこともあるし。」

「得意なことねえ。悟は得意なことがありすぎるよ。なんでそんなスーパーマンなのかね。」

「そうか?」

自分で自覚が無いのか。

「昔、母親に言われたことがある。いろんなことが出来た方がいいつて。何でかつていうと、それは自分の為ではなく、いろいろ出来ることがあると、それを人の役に立てることが出来るからだつて、言われたんだ。」

「お母さん良いこと言つね。」

「ピアノを無理やり習わされたときにわざわざ言つて説得された。」

「幼稚園の子に?」

悟がピアノを習い始めたのは幼稚園の頃だと言つていたことを、思い出した。

「ああ、たぶん母親は子供が小さからうがなんだろうが、一人前の人間だと思ってしゃべつていた部分があつたんだ。」

母親の話をするなんて珍しい。だいぶ酔つてきたのかな。僕は火の加減を見ながら、野菜や肉を入れた。煮立つてくるとそれを取り皿に取り分けてやる。

「そななのか。何でそんなにいろんなことが出来るのか不思議だつた。」

「多分、積み重ねつていうか、習慣だな。」

「習慣？」

「子供の頃、偉人の話を本で読んだりして、何で同じ人間なのにこんないろいろなことが出来る人がいるんだうつて不思議だった。で、その人たちがどんなことをして、どんな生活をしていたのか調べたんだ。」

「それで？」

「うーん。難しいことなんだけど、いや、でも難しいと思つてしまつたら何も出来ないんだ。何かを成し遂げよつとする時、最初からそれを難しいつて考えちゃだめなんだ。そのことを何回も練習したり、出来ない所は何回もやつたり、分からぬ箇所があれば勉強して調べたりするだろう。それを毎日やるんだ。習慣にしてね。それでひとつずつ自分のものにする。その数が1個、2個、とちょっとずつでも増えていくだろう。それが自分の自信につながるんだよ。その…なんていうか、パズルを解くみたいな感覚かな。何となく、こうすれば出来るだらうつていうような仕組みがわかつてくるんだよ。」

「ある日、それがいろんなことに応用出来るつて氣づくんだ。」

僕が頭に手を当てて、言葉の意味を噛み含めるように考えながら聞いていると、

「難しいか？こんな話。」

悟が怪訝そうな顔をした。

「いや、そんなことは。」

「でも常人にはちょっと理解しづらい話かも？」

と、笑うと、

「俺、変わつてること？」

彼も笑つた。いつもはどれだけお酒を飲んでも顔色ひとつ変わらないのに、珍しく顔を赤く上気させている。

「いや、すごいって思つてこるよ。」

鍋をつつきながら何倍か杯を空けていくうちに、日が西に傾き始めた。うつすらと周りが暗くなり始め、ランタンの灯をつけようとして立ち上がった。僕はまたふと先ほどのことを思い出した。

（聞いてみようか。）

ゆつくり話が出来る時間がまだたっぷりある。ランタンの灯をつけ席に戻る。話しかけようと思うのだが、彼の顔を見ると口を開くことが出来ない。楽しそうにしている彼の顔を見ると何だか口にすることが出来ない。

「どうした？」

「別に。寒くなってきたね。」

せっかく気分良く飲んでいるのに雰囲気を壊すことはない。そう思い直して話題を変えることになった。

「寒いときは鍋が一番だね。」

「結局これが一番簡単だしな。」

僕らは今までの順調に来た行程の話をし、山の上で何が食べたいかなど話をした。彼は山の上でカキ氷が食べたいと言った。

「力キ氷？」

びっくりして尋ねると、

「雪山に登つた時に、頂上に綺麗な雪があるだろ。アズキ缶とコーンデンスマilkを持って行つてそれにかけて食べるんだ。」

聞いただけで寒そうな話だと、身を震わせると、

山に登ると結構暑くて汗をかくから、意外と美味しいんだと言つた。

「で、明日やつてみるの？」

「ああ、美味しそうだらうつ？」

明日、僕らはこの大梨平のすぐ先にある水晶平まで登ることにしている。吾郎さんが僕にこつそり教えてくれたことによると、本當はもう少し先にある、標高がここより数百メートル程高い別の峰に登る予定だつたらしい。馴れていて何回も登つている者ならいいが、僕みたいな初心者にはさすがに無理だと、吾郎さんが進言してくれたおかげで変更になつたらしい。

もう少しで雪山遭難するところだつた。とはいえ、本當は明日その水晶平に登るのも気が進まない。平坦な道でも結構歩きづらいのに、山歩きだなんて。

「そういえば体調は大丈夫か？」

僕が一日酔いで頭が痛いと言つていたことを思い出して彼は言つた。

「だいぶいいよ。」

「そう、でももうあまり飲まない方がいいかな。」

そして、あちこち登つた山について話などをしていると、あたりは真っ暗になり、焚き火を焚いて、ガスバーナーの火で鍋をしていふとはいえ、さすがに辺りが冷え込んできた。

「結構冷え込んできたな。」

温度計を見るとマイナス13度。テントの中でもマイナス6度しかない。

「テントの中でも氷が張るよ。」

「本当に…？」

「水を張つておくと、すぐに凍るよ。」

悟は楽しそうだ。寒さにはずいぶん強いみたいだ。それでも結構な時間が経っていた。僕らは早々に片づけて、テントの中でもう一杯やることにした。

テントの中に入るとそれでも結構暖かい。風がないからいいな。外はだだっぴろい平原だから少しでも風が吹くと寒い。着られるだけの服を着て、ショーラフに包まる。ランタンの灯りをひとつにして、タバコをふかしながら又いろんな話をした。子供の頃の話や、あちこちに行つた話や、熱中していたスポーツや趣味のことなど。

悟はまだずっとあれから飲んで、タバコをふかしていたが、僕は明日峰へ上るのに、酒が残つているとまずいと思い、止めることにした。それで時折会話が途切れ、外の様子を何とはなしに伺つていると、テントに落ちる粉雪の音が断続的に聞こえた。あとはランタンのシユーッという燃焼する音が聞こえるだけだ。

「全く静かだな。」

「あの世に取り残されてしまったような気がするね。」

僕が返すと、

「？あの世？とかいうと、そういうえばさつき川原で変わった話をしていたな。」

彼が聞く。

「何？」

問うと、

死んだ人の魂はどこへ行くのか、という話だと彼が言った。また美しいことが頭をよぎった。

「さっき、俺感心していたんだ。」

何のことかと聞くと？死？に対してもんふうにいろいろ語れるつていうか、しっかりした考え方を持っていることに対してだと言つた。

「20歳そこそこのそんな？死ぬこと？なんて考えないもんな。本当にずっと先のことで、実感として感じたことなんてないからな。」

「普通、そうだろうね。」

つぶやくと、そのまま2人とも黙り込んでしまつた。
彼が何か聞いたそうだった。そして僕の顔をじっと眺めて、
「何を考えている？」

と、尋ねた。

「別に。」

芙美のことを考えていることを氣取られないよう、さりげないふうを装つて新しいタバコに火をつけた。

「でも本当はこんな風にしている時でも、きっと？死？はすぐ側にいるんだと思うよ。」

そう言つと、

「怖がらせないでくれよ。」

そう言つて彼は身を縮めた。

怖い話が大好きなくせに結構怖がりなんだから。僕がその様子を見てくすくすと笑うと、

「誰か好きな子つていたか？」

いきなり聞いてきた。

「藪から棒に何だよ。」

僕が芙美のことを考えていたことがわかるみたいだ。

「最初に好きになつた子つて？どんな子？聞いてみたい。」

「えー、いいよ。そんなこと。」

はぐらかそぐとすると、聞きだそつとして彼はしつこかつた。

しうがなく、芙美の話をした。中学校から同じクラスでずっと片思いをしていたこと。高校生になつて仲良くなり、グループでいる

んな所へ遊びにいった話なんかを。

「それで今何している？ その子？」

（イマナーシテイル？ ソノ口？）

同じ年。大学生だったのか、社会人になつて働いていたのか？ 思いつきり胸を凍つた手でひつつかまれたような気がした。僕が戸惑つて黙り込んでいると、

「聞かない方がいいかな？」

遠慮がちに彼が言った。

「いや、別に。でももういないんだ。その子。」

さりげらとした粉雪がテントの側面を滑り落ちる音がした。ちょっとした間があつて悟が思い切つたふうに尋ねた。

「死んだのか？」

「ああ。」

自分が今どんな顔をしているのかが気になつた。彼に表情を読み取られたくなかった。

「事故でね。結局自分の気持ちすら伝えることが出来なかつた。でも、彼女、好いていてくれたんだ。死んでからわかつことだけどね。ずいぶん後悔した。」

「そうか。」

「彼女は本が好きで、英語が得意だつた。いろんな洋書を原文で読んでいて、最後に彼女が僕に渡してくれた本が原書だつたんだけど、その頃、全く英語が出来なくてね。でも何とかそれを読みたくて、一生懸命勉強した。それで何とかその本が読めるようになつて、それでかなあ、何となくその辺から翻訳をやりたいて思いだしたのは。」

「彼女もそういうことやりたかったんだうな。」

「ちゃんと聞いたことってなかつたけど、そつだつたのかもしけない。」

ふうんと呟いて、悟が黙り込んでしまつたから、僕はこんな漫つ

ぽい話をして悪かつたなと思い謝ると、

「いや、ちょっとその子がうらやましいなって。死んだ人はいつもでも思い続けてもらえる。永遠に。さつき川原で思っていたのはその子のことなんだろう。だからあんな話を…」

彼が寂しそうな顔をして、また黙り込んでしまったから、僕は口を開いた。

「死んだ人はいつまでも忘れられずに思い続けてもらえるって。そうだな、若い時の姿のままで、美しい思い出になつて。でも、それがうらやましいって?でも、僕はそんなの嫌だ。生きている人の声を聞いて、その身体に触れていたいよ。」

僕は悟のことを言つた。彼が理解してくれるといいと思った。

「相手の歳を重ねていく姿を見たいよ。その人との間にどんなに汚くて、見苦しい思い出が増えていつたって。その中には目を向けたくないような、どろどろとした嫌な思いもあるだろう。でもそれでも、そのままそこで自分の気持ちだけが取り残されたまま止まっているのよりはいい。自分の気持ちがそのままそこで動けないまま、止まっているのは苦しいよ。もうそんな思いは嫌だ。」

僕は彼の両腕を掴んだ。僕は彼が年齢を重ねていく姿を想像してみた。その目元に皺が増えていく姿を。たぶん僕はそれを見ることはない。腕を掴んだ手に力を込めた。彼は僕の手を取つた。

「悪かったよ。うらやましいなんて、軽いよな。ごめん。」

僕は別に謝つて欲しいわけではなかつた。今思つてているのは芙美のことより、現実に目の前にいる相手のことだつた。彼も同じ気持ちだろうか。そうだつたいい。だけど彼は何も言わなかつた。

また、テントの側面を雪が滑り落ちる音がした。僕らは黙つて、その音を聞きながら眠りについた。

しばらぐとつとして眠りについたと思つと、寒さでふと目が覚める。背中に冷気が這い上がってきて、寒さで震える。それでも眠たくて、その睡魔と寒さとの間で夜中、僕はうろうろしていた。朝、目が覚めると、悟の言つたとおりに、昨日飲みかけで放つておいたコップの酒が氷になつていた。手元の懐中電灯で照らしてみてみると、そして腕時計に視線を移して時間を確認する。まだ4時を少し過ぎたところだ。テントの中は真っ暗で、夜明けはまだまだ先だと暗闇が告げている。隣を見ると悟は寝息を立ててぐつすり寝込んでいる。起き出すにはまだ早い時間だが、これ以上シェラフに包まつていても眠れそうになかつたので、起き出すことにした。

外に出ると真っ暗で、鋭いナイフのその切つ先で、頬を切りつけられるような冷気が身にこたえた。指先が凍りそうだつた。僕は自分の指先に息を吹きかけ、ランタンに灯をともした。昨日、焚き火用にと取つておいた木片がテントの脇に転がっている。雪に濡れないうにシートを被せておいたので、大丈夫。すぐに火が起こせるだろう。僕はその木片を積んで、バーナーと着火材で火を起こした。ちらちらと赤い火が木片の間に見え隠れし、やがて大きな炎になる。まだ夜が明けきらない暗い雪の平原に、そこだけがまるで生き物のようにならめき、ぽつんと赤い色をともす。僕はその火で凍えた指先を暖める。指先に感触が戻つてくると、ポットに水を入れ火にくぐる。何かの映画で観た。こんなシーン。火を起こし、ポットにお湯を沸かしてコーヒーを入れ、それを飲みながら夜明けを待つ。漆黒からダークグレー、そして灰色を含んだブルー、やがて夜明けが近づくと乳白色の空へと。

遠くで鳥が鳴くような声がした。こんな静かな時間にひとり身をおいていると、現実の自分が住んでいる世界が、本当に思いもよら

ないほど遠い所にひつそりと現実味をなくして崩れ落ちたままになつてゐる。そんな夢とも現実ともつかぬような想いをひとりめぐらせる。

夜と朝の境目の時間。不思議な感覚だ。誰もいない。誰の意識もこの僕の時間を邪魔しない。焚き火と自分の吐く白い息だけだ。そして寒さを感じる感覚だけが残される。

そうしていつに東の空が徐々に明るくなつてきた。一面に広がる薄いブルーグレーの空の切れ間から乳白色の空が遠慮がちに顔を覗かせている。今は曇つているけど多分徐々に晴れてくるだろうと思つてゐる。

「早いな。」

ふと後ろで声がした。その声で僕の意識は一気に現実に引き戻される。

「悟。」

「眠れなかつたか？」

そう言つて眠そうに目をこすり、僕の側に来てその鼻先を僕の頬に押し当てる。彼の冷たくなつた鼻先の感触にくすぐつたいような感じを覚える。子供のような仕草。彼の目を見る。ふいに笑みがこぼれる。

そう、それでも半分は僕の意識はまだ夢の中だ。
そして彼も。

お湯が沸いた。白い湯気が薄暗い平原に立ち昇る。それでコーヒーを作り、彼に手渡す。僕も同じようにホーローのカップに黒い液体を注ぎ、それを飲みながら朝食の準備をする。東の空がだいぶ明るくなり、ランタンの灯りで手元を確認しなくとも楽に作業が出来るようになった。空が白み始めると、悟もテントを片づけ始める。僕らは朝食が出来るまで、黙々と己のそれぞれの作業に没頭する。朝食用に、昨日のキムチ鍋の残りにレトルトのご飯を入れ雑炊にする。そしてフライパンでソーセージを炒めていると、ふいに左の目

の奥がずきんと痛んだ。手元の視界がふと一瞬白くなつた。その様子に気づいた悟に

「どうかしたのか?」

と、声をかけられた。

「いや。」

(具合が悪くなつたらすぐ言えよ。)

初日にそう言われた彼の言葉が頭に浮かんだ。

(一日酔いにしては長いな。風邪をひいたのかな。)

そう思つたが、それでも体調の不良を彼に告げることはやめた。悟はちょっとの間、じっとこちらの様子を伺つていたが、僕が何でもないふうに作業を続けていると、それきり何も言わず片づけを続けた。

火にあたりながら朝食を食べていると、徐々に太陽が昇り辺りが明るくなり始めた。雪の平原のはるか向こうに聳える山頂を眺めていると、高い頂きの屋根の向こうから白い朝靄がゆっくりと立ち昇り、そして空へと消えていく。そして山の足元にまとわりつくように覆つっていた白い靄も徐々に風に流れて、空の高い所へと吸い込まれていく。朝日に照らされて明るく輝く白い雲が、青空と共に大きくなる。まるで絵画のようなコントラストを描き出すと、やっと実感として僕らの周りのものすべてが動き出したことを感じる。ぴーんと張りつめたような朝の冷氣の中に立つていると、体中の古い細胞がすべて新しいものへと入れ替えられるような、そんな気がした。

「行こうか。」

僕が山の方を見ていると、早々に荷物を片づけた悟が声をかけてきた。

「ああ。」

僕らは大梨平を後にし、歩き始める。僕らがテントを張つた大梨平を足元にはべらせるようにして銚子ヶ岳がそびえる。僕らが今日指すのは、その銚子ヶ岳の登山道を少し上がつた所にある水晶平

だ。目的は行く道筋にある樹氷の森を見ることと、水晶平から見ると、三方連邦だ。本当は違うルートで行く予定だったが、吾郎さんにだいぶ言わされたらしい。遭難させる気かつて。悟が考えていたのはいつも叔父さんと行くルートで、かなりアップダウンのきつい道筋が続くルート。で、しかも水晶平よりも少し上方まで行くつもりだったらしい。

吾郎さんに言われて変更したルートは、初心者でも登れる傾斜のあまりない水晶平に続く道だ。ブナやナラが点在する森林を抜けると、スキー場のような広いなだらかな平原に出る。その三角地点に景観のすばらしい開けたところがあるらしい。時間にすると2時間程。このくらいなら何とか。とは、思ったが、すぐに林道から脇に反れる登山道に入ると、その考えが一気に払拭された。

雪が膝下まであり、ラッセルしながら進む状態だ。雪面にスノーシューの先を蹴りこんで、雪の中にステップを切るようにして登る。ストックでバランスを取り、片足の膝を軸にしてスノーシューを後ろに振り上げてから、雪面にスノーシューの先をしっかりと蹴りこむ。しつかり雪面に入ったのを確認し、踏み込んで体重を乗せて立つ。そして反対の足で次のステップを切つて登る。その繰り返しだ。最初はバランスを取りながら蹴りこむことがうまく出来なくてふらふらしていたが、何回か繰り返しているうちにコツがつかめてきた。そうして細い急登を登りきると、少し幅の広い道に出たので、身体を横向きにして登る。

「スキー場で斜面を登る時みたいだな。
と、声をかけると、

「ああ、でもお前うまいわ。雪山初めてとは思えん。」

息もきらさず悟が答えた。

「運動神経いい方だな。」

「ずっと野球やってたからね。」

「ああ、そうだったな。イメージわからんけどな。」

と、笑った。

それでも数10分歩いただけで、息が上がった。気温は氷点下マイナス10度近いはずだが暑くて汗が吹き出る。彼が振り返り、振り返り声をかける。

「大丈夫か。休むか？」

大丈夫だと答えるが、それでも無理しない方がいいからと休憩をすることにした。立つたまま水分を補給し、チョコレートを広げる。やっと余裕を持つて周りの景色を眺めることが出来た。まだ林の中で、ブナやミズナラの木々に覆われている。林の隙間から真っ青な空がちらりと顔を覗かせている。木々の細かい枝の先までが樹氷になつて凍りつき、あたり一面は真っ白な雪の林だ。

「天気が良さそうだ。」

悟は満足そうだ。

「この分なら一日大丈夫そうだね。」
と答える。

そして、その場所で5分ほど休憩をし、又歩き始める。さらに少し登つて開けた地点まで出ると、辺り一面の林の木に、その枝の先々までが樹氷になつていて、陽の光を受けてきらきら輝いている。風が吹くとその風に乗つて氷が当たり一面に飛び散り、まるでダイヤモンドみたいだつた。その陽にあたつた氷のかけらが目に飛び込んでくるように感じて、ふとめまいがした。目の前を白いものがふつと横切つたように思えた。

「大丈夫か？」
僕の様子を見て悟が声をかける。

「大丈夫だ。」

朝、食事の支度をしている時にもこんな感じで頭が痛み、めまいがした。引きずっている一日酔いでなければただの軽い風邪だ。心配をかけたくない。それよりも途中で行程を断念して戻ることが嫌だった。

「とりあえず休憩しようか。」

そう言つて、僕らは樹氷の森で何度目かの休憩をとつた。辺りを見回すと、何の足跡だろう？ 小さな足跡が点々と続いている。

「足跡がある。」

ザックからカロリー メイトを取り出して、彼に手渡しながら話しかけると、

「狐かテンだな。」

と、悟が答える。

「子供の頃はもっと足跡が多かつたような気がする。動物の数が少なくなつたんだろうな。」

「そりなんだろうね。」

「でも、どうやって足跡で見分けるんだ？」

尋ねると、

「狐の足跡は、連続して一直線につくのが特徴。指は4本だから犬に近いね。」

「テンは？」

「左右の足が横に並び、前足と後ろ足がほとんど同じ所につくのをわかりやすいよ。」

「おもしろい。」

それに興味を持った僕は、森の中についた足跡を追つて、その足

跡の持ち主を当てる」とした。

「ここちはテンかな?」

「やうだな。」

足の指の形が5本ついている。

「狐より足の指が一本多いんだね。」

「もう少し上のほうに行くとカモシカがいるかもしれない。」

「へえ、カモシカ?」

カモシカか。どんな動物なんだろ。見たことがない。

「悟は見たことがあるの?」

「ああ、だいぶ前にな。」

「角があつて意外とすんぐりとした感じの身体で茶色くて、山の方にいてじつと遠くからこちらの様子を伺っている。それをホント遠くから見たんだ。人間を観察しているんだよ。だからさ、俺らが動物を見るんじゃなくて、動物が俺たちを観察しているんだよ。だってここは彼らのフィールドだからさ。俺たちはそのフィールドにお邪魔させてもらつていいのに過ぎんからな。」

そんな話をしながら歩いていると、変わったものを見つけた。僕がそれを手に取り、

「これは何?」

差し出すと、

「あ、エビフライだ。」

悟が笑い出した。

僕が手に取ったものは、松ぼっくりの芯だけになつていていた。これはリスが松の実を食べた跡。実の入っていない先端部分は、かじらずに残すので、ここをエビの尻尾に見立ててこの食跡を通称?エビフライ?とつらじい。

「ほら。」

田の前に差し出された松ぼっくりの芯だけになつた物をよく見ると、なるほど。エビフライだ。

「ほんとだ。美味しそうだ。」

僕も笑い出した。

こんな時間。何の変哲もない時間。たわいのない話、意味のない軽口の叩き合い。そんな時間。それがどうしてこんなに胸を締めつけれるんだろう。過去のことも先のことも考えず、今この時間を過ごすこと。それがどうしてこんなに楽しいんだろう。そして自然の中に身を置いていると、ただそれだけで、何の特別なことがなくてもこんなに気持ちが満たされる。そしてひどく胸がわくわくする。こんな子供の頃のような気持ちになるのは何故だろう。

人が幸せだと想うのはこんな時間。自由で、何にも縛られずに、時間も止まつたままで。そしてそれは彼がいるからだ。僕の側に。人はひとりではないと思つとき、どうしてこんなに満たされた気持ちになるのだろう。黒のニットキャップを口深に被り、無精ひげを生やした彼は喉元をくしゃくしゃにして笑い、こちらを見た。

「こんなにある。」

子供みたいだ。？エビフライ？をあんなに集めて。

僕はまた胸を締めつけられる。ふと雪の斜面が傾いたような気がした。そしてある言葉が喉元のすぐそこまでせりあがつてくる。

言つてしまいそうだ。言つてどうなる。文さんの顔が浮かんだ。（ダメだよ。文さん。）僕は喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。そう、今までだつて何回飲み込んだろう。それは言えない。

僕らは脣までにはその水晶平にある池（もちろん凍つて雪を被つてるけど）の辺りまで歩いて、そこから景色を眺めて食事を済ませたら山を下るつもりでいた。15分歩いて5分休み、また15分歩いて5分休みを何回か繰り返すと、林を抜け稜線上にでた。

「足元に気をつけて。」

稜線に出ると所々に雪庇ができていた。

「雪庇の上を歩かないで。」

「雪庇つて？」

「あれだよ。」

彼が、稜線上に出来てゐる雪が屋根上に張り出したものを指差した。

「ああ、あれ？」

「そう、踏み抜くと大変だ。」

「下は空洞つてこと？」

「そうだよ。」

僕らは慎重に雪庇を避けてその道を通過した。僕は急に雪崩のことを考え心配になつた。そのことを彼に言うと、

「この付近では過去に雪崩が起きたことはないらしい。それにここ1週間ほどの間には大雪にはなつていないし。でも雪庇の崩壊が雪崩につながることもあるから、踏み抜かないように気をつけないと。」

「そんなことを聞くと急に怖くなつて、歩き方も急に大人しくなつてしまつ。」

「まあ、そんなにびくびくすることはないよ。」

僕の様子をおかしそうに見ている。

「そりや、そつちは何回も経験があるからいいけど。」

「だから何回も来ている経験者がいるから大丈夫だつて、言つてゐじゃないか。」

僕らは顔を見合させて笑つた。お天氣も良く、稜線から見る景色は雪と青空のコントラストが本当に美しかつた。稜線上を少し歩くと、まるでスキー場のような平らな平原に出た。白い、本当に白い雪の斜面が平べつたく広がり、その雪の地平線の向こうに青い空がぽつかりと出ていた。その先にはスギかカンバ類の木々の林が見える。

「この先だよ。もう少しだ。」

彼が指を刺した。その先を見ると白い雪の斜面に太陽の光が当たつてきらきらと光つていて、まぶしいくらいだ。僕らは雪焼けをし

ないようサングラスをし、鼻の下までネットカバーを引き上げてガードし、その斜面をトラバースで斜めに移動し始めた。平べったい斜めに回り込んだ雪の斜面を横切つて歩く。これがなかなか簡単に見えて大変だ。左右のスノーシューをひっかけそうだ。

つまり斜めに雪の斜面を回り込むんだ。身体を山側に傾斜するようにして、足を左右に慎重に入れ替える。山側の方のストックを短めに持つて、谷側を長くする。斜面に突き刺さすようにしてバランスを取る。が、ストックに体重をかけすぎると、反対にスリップしそうになつて恐い。思つたより雪の斜面は傾度がある。

「練習しておけばよかつたな。」

「僕の様子を半分楽しんでいるよつて、悟がにやにやした。

「ほんとだ。」

彼の楽しそうな様子につき合つてゐる余裕がない。僕は四苦八苦だ。

「ひっかけて転ばないよつていろよ。」

そういうわれても足を入れ替えるときには、スノーシューをひっかけそうなる。そのまま滑つて雪の斜面を滑落しそうだ。

「しつかり踏み込んで、山側からな。」

「滑らないようにクランポンとトラクションデバイスをきかせて。

「なんだつてそのトラクションデバイスつて?」

用語まで覚えきらないよ。まったく。

それでも少しずつコツを得て、斜面を横切つて歩く。少し歩いて、休憩する。それを何回か繰り返す。たぶんせつかちな悟はもつと早く行きたいんだろうなと推測する。でもこの速さが精一杯だ。僕の四苦八苦している様子を楽しんでいる割には、それでも心配そうに何回も何回も肩越しに振り返る。？大丈夫か？つて。朝から何回その台詞を聞いただろ？。

「ちょっと待つて。この先凍つてゐわ。」

「え？」

「だつて爪が刺さらんわ。」

彼が急に立ち止まり、スノーシューで何回か足を入れ替えしていが諦めたようにそう言った。

「この先は無理だな。」

外見上はわからないが、斜面が凍つていて、これ以上上方には進めないと彼は判断したらしかった。

「どうする？」

「下りう。」

「行こうとしていた上方にある池の周りは、きつと凍つていて危険だ。この下方にちょっと開けたところがあるからそこで飯にしよう。」

それで僕らはトラバースで斜面を横切るのやめにして、下方へ下ることにした。彼は地図とコンパスで位置を確認し、僕に方向を指示した。

「残念だね。」

「別にいいさ。」

登つたり横切つたりするより、下る方が楽なような気がした。傾斜は急だけど斜めに下れば斜度も落ちて楽に下れる。ただ傾斜がひどい所では真っ直ぐに下ると、そのまま滑つていいそうで恐い。

「スキーがあつた方がいいかな。」

「ほんとだ。そのほうが楽だな。」

そう言いながらジグザクに方向を転換しながら下り始めた。斜面を横にして立つ。ストックでバランスを取り、谷側のスノーシューを下ろし、フレームの内側のサイドエッジでステップを切る。体重を徐々に乗せて、クランポンとトラクションデバイスをきかせる。これをきかせないと滑つて体が安定しない。山側のスノーシューをおろし、フレームの外側のサイドエッジでステップを切る。その繰り返し。所々後ろ向きに下りたり、身体を横向きにして下つたりす

る。登りほど息は切れないが、それでも息が上がり、身体が熱くて汗が出る。やはり調子が悪いみたいだ。自分でも自覚していく。が、もう少しだ。

何メートルくらいだろう、30分程かけて下ると、右横へ回り込むようにして方向を変えるよう言われた。その先には悟が言った通りに、少し開けた地点がある、そこからは360°のパノラマとはいえないが、はるか前方に雪を被った山脈が見え、なかなかいい眺めだった。

「ここも結構眺めがいい。」

「本當だ。雪山が綺麗に見えるよ。」

だだつ広い平原だと風が吹くと寒い。この地点で標高2000メートル近い。気温が氷点下10°から20°になるときもある。風があるときの体感温度は風速1メートルにつき1°低くなる。今日は風がなく穏やかでありがたい。それにこの場所は、周りを大きな岩壁で囲まれたような形をしていて、風を避けるには最適な場所だった。

「よく知っているね。いろんな場所を、それにこんなに真っ白でよく道に迷わないね。」

僕は感心した。

「でも3月でこれだけ地面が凍っているとは思わなかつた。本當はもう少し上方まで行ってみたかつたんだけど。」

悟は少し不服そうだった。僕はこの地点でも充分満足だった。本当は少し寒気がして早く下山したいのが本音だった。

時計を見るとちょうど計ったように昼の12時を指していた。急速ガスで火を起こし、コッヘルにお湯を沸かす。それは、寒冷地用の専用ガスカートリッジとバーナー部分を連結するだけでコンロになり、気温が低くても火力が落ちない。そのお湯でラーメンを作り、食べた後はまたお湯を沸かし、コーヒーを入れる。暖かい物を腹に入れて安堵した。天気は良いとはいえ、氷点下。身体が冷えている。

「温泉に入りたいな。」

僕はふと口ににした。

「温泉?」

「こんな雪が積もったすばらしい景色を見ながら、温泉につかれた
ら最高だらうなつて。」

悟はにつと笑つて、

「いい所があるよ。」

と、言った。

「何?」

聞くと、数年前にここへ来たときに、吾郎さんの家の付近で温泉
が出たらしい。町を挙げて温泉を掘り、温泉施設を作つたそうだが、
それを見て、吾郎さんと叔父さんの隆司さんがそれなら家の付近で
も出るんじやないかつて。いろいろと調べて試行錯誤した挙句、家
の裏山を少し入つた所にある自分の土地を掘つたら、本当にお湯が
出たらしい。それで何シーズンかの休暇を使って、ふたりで岩を積
み、素人作りではあるが入れるように整備したということだ。

あほなことをしとると、文さんはあきれて見ていたらしく、本
当にお湯が出たことに驚いて、というか喜んで、それから何回かそ
のお湯につかりに行つたらしい。ただ、こないだはその話が出なか
つたし、今はどうなつてるかはわからないらしいが。

その話を聞いて思つたんだけど、吾郎さんとい、叔父さんの隆
司さんとい、どうも悟の周りの大人は子供っぽい人が多いみたい
だ。でも、そんなふうに人生を楽しんでいるのはすくいことだ
と思つし、自由な風を感じる。そうだな、たぶん僕にはないところ
だろうな。そうゆう雰囲気は。

「じゃあ、入りに行く?」

「ああ、いいね。本当にまだちゃんとお湯が出るなんぢ。」

いくらかのお金を払つて、土日になると人でごつた返すような町
の温泉施設に比べたら、そんな趣のある温泉の方がいい。そんな話
をしながら休憩していると、どうも東の方の空の雲行きが怪しくな

つてきた。

悟が少し難しい顔をして、

「東の方から風が吹いている。」

「まづいの？」

「うん。天気崩れそうだ。」

そくならなるべく早めに下山した方がいいところとで、僕らは

早々に立ち去り、又来たルートを戻つて帰ることにした。

「あんなに天気が良かつたのにね。」

「ああ、予測できなかつたな。天気が崩れる前にある程度のところまで下れるといいんだが。」

悟はちょっと不安そうだつた。今来たルートを戻ると、さつきは白い雪の平原と青い空のコントラストが素晴らしいと思つて見たあの景色が一変し、薄いダークグレーの雲が広がりつつあつた。僕らは少し歩調を速めた。平原を横切るようにして歩き、さつきの雪底のある場所まで出た。もう少しで稜線上を歩くのは終わり、林の中に入る。さつきから風が少しづつ強くなり、僕は身体に感じる寒さが先ほどよりも強くなつてきたように感じた。風が身体を芯から冷やす。風が強くなる。

その時だ。ふわっと雪が舞つたかと思つと辺り一面が真つ白になり、全く視界が利かなくなつてしまつた。

（吹雪？）

かと思つたが違う。風のせいで粉雪が舞つて雪面と空間の区別がつかなくなる。

「悟」

声をかけると、

「ホワイトアウトだ。」

落ち着いた声が返つてきた。

「大丈夫だ。すぐに収まる。」

少し開けた広い稜線上だつたが、近くに岩場があつたのでそこで

風をよけることにした。しゃがむと自分たちの背丈くらいはある大きな岩場に身を寄せる。頭の上を風が吹き抜けていくのを感じる。僕らは身を寄せてこの状況が収まるのを待った。

「こんなことは？」

聞くと、

「初めてだ。」

先ほどかいた汗が乾ききらないうちに、吹きつける風のせいで気温が下がり体温が下がる。予測もしていない事態だ。背筋を悪寒が走る。彼はこの状況をどうしようかと考えている様子で僕の様子までは気づかないようだ。このままなんとか風が收まり、下山出来れば。それまで自分の体力がもつだろうか。

そんなことを考えていると、数分で風が收まり、視界が徐々に戻ってきた。彼はこのチャンスを逃さず、素早く地図とコンパス、高度計で方向を確認した。そして今のうちに林の中へ早く移動しようとした。林の中に入れば木々がある程度風をよけてくれる。

僕らは稜線上を離れ、ブナやナラが隣接する林の中まで移動することに成功した。林の中は、先程よりは体感的に風を感じることもなく安堵した。

なるべく先を急ぐうと歩いていると、僕は徐々に身体が真っ直ぐに保てないことに気づいた。自分の身体がふわっと揺れて、真っ直ぐ歩いているつもりが斜めに移動していることに気づき、慌てて方向を修正する。それと同時に先ほどから感じていた寒さが急に増していく。寒くて身体が震える。悟は天気が崩れる前に下山することに意識を集中しているので、僕の様子に気づかない。前をどんどん歩いていく。声をかけようとするのだが、歯の根が合わない。全身がひびくだるい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512v/>

この手のひらで消える雪のように（彼の娘：続編）

2011年11月23日18時51分発行